

第3章 発掘調査の成果

1. 遺跡と調査の概要

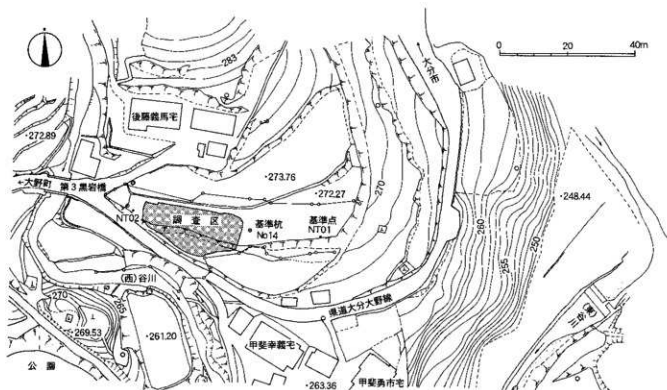
黒岩遺跡は、大野川の支流河原内川の最上流部に位置する狭楕な谷合いの小さな舌状丘陵の南斜面に位置する。遺跡の範囲は、こうした地形に制約されているためか、東西30m、南北10数m前後と狭く、今回の調査は、北側の一部を残してその大半に及んだものと推定される。

調査は、試掘調査によって確認されたアカホヤ火山灰層下部の押型文文化層を対象とした。当初はその範囲も小さく、文化層も押型文を包含する黄褐色土層のみと考えていたが、調査の進行によってその範囲が広がるとともに、黄褐色土の下部に無文土器を含む黒色土層を確認したため、調査区の拡張と期間の延長を行った。

上2層の縄文時代早期の文化層は、アカホヤと基盤の黄色ロームに挟まれるもので、その厚さは1mに達するものであった。文化層は大きく2つに分けられるものであるが、上層の下部において、泉下の縄文時代早期の前半に位置づけられる帯状施文の押型文土器が多く検出された。下層の黒色土層においては、押型文に先行する無文土器と条痕文土器が主体となる状況が観察された。下層の土器組成は、泉下では、玖珠郡九重町二日市洞穴の7～8層の文化と共通するもので、泉下で最も古い縄文時代早期の文化とすることができる。

また、これらの土器に伴う石器は、定形的な石器が少ないながらも器種は豊富であった。そして、乏しい石材条件の中で現地産の石材を有効に利用している状況が観察され、この時期の石器組成を考察する上で良好な資料となった。

さらに、黒岩遺跡では、変化に富む集石遺構をいくつか検出することができた。その中には炉跡のほか、埋葬遺構とみとめられるものがあり、この時期では稀少な縄文時代早期の代表遺跡として評価できるものである。



第3図 黒岩遺跡地形図・調査区位置図(数字は標高m)

2. 調査区の設定

県道大分大野線の改良事業に伴う、現道上方の水田部(標272.27m面)の試掘を行った。調査区は、遺構・遺物が確認できなかった東半部をはずし、西半部に限定した。調査の範囲は工事が及ぶ範囲とし、工事の基準点を利用して、東西に主軸をとり、西側より5m毎に1~8区とした。調査の途中、南側の水田部の土手とその下方の畑地まで拡大した。北側は、上方の旧宅地との境に石垣があり、それより北側については対象外とした。各区の境界に基準杭を設けて1m方眼とし、実測の基準線とした。

3. 層 序

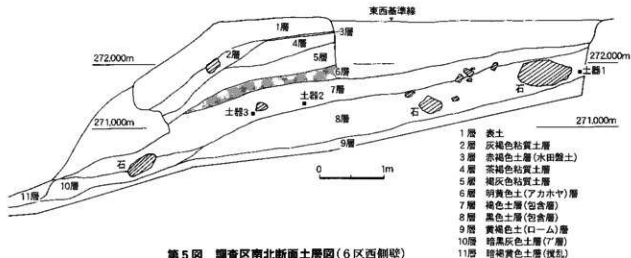
調査区の土層は、地山面の南に開く浅い谷状地形に沿って、南北は南へ傾斜、東西は5区・6区の部分を底部とする皿状の堆積となっている。当遺跡の縄文時代早期の文化層を覆っていたアカホヤは、調査区の南半部では良好に堆積していたが、北半部では、後世の開田作業の整地により削除されており、北側断面斜面では観察されなかった。

黒岩遺跡の基本の層序は以下のとおりである。

- 1 層：表土。水田耕作土。
- 2 層：灰褐色土。水田上手の整地上。
- 3 層：赤褐色土。硬い水田盤土。
- 4 層：灰茶褐色土。水田整地土。粘質、しまりが弱い。
- 5 層：褐灰色土。粘質、しまりが弱い。
- 6 層：明黄色土。アカホヤ火山灰。ガラス質。
- 7 層：褐色土。粘質、しまりが弱い。主として押型文化層。北側では上・中・下部に分ける。
- 8 層：黒色土。粘質、しまりが強い。主として無文土器・条痕文土器文化層。
- 9 層：黄褐色土層。いわゆるローム層。粘質、しまりが強い。無遺物層。

北側断面土層の西側には、小礫混りの黒色土層が8層の下に溶るように堆積しており、8層とした。また8層と9層の漸接層を9層としたが、遺物は認められない。南北断面の10層は7層とすべき押型文包含層。11層は攪乱層である。

黒岩遺跡の時間示標層となるアカホヤ火山灰層は、いうまでもなく南九州鬼界カルデラの噴出物であり、その噴出年代は約7,300年前(C14年代測定法)といわれている。このテフラは、西日本一帯に広く降下堆積し、オレンジ色の鮮やかな色調によって特徴付けられる。本遺跡では約20~30cmの厚さに堆積し、下部の縄文時代早期の文化層を完全に覆っている。



第5図 調査区南北断面土層図(6区西側壁)



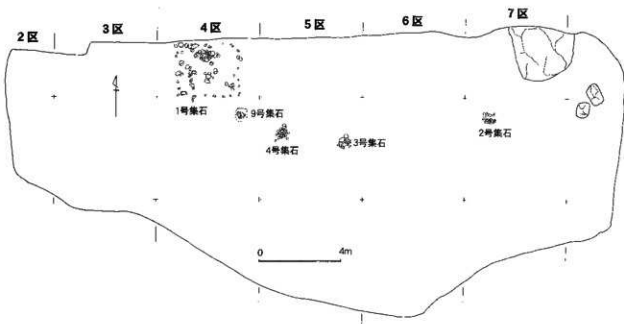
7図 第7層の礎分布図

8図 第8層の礎分布図

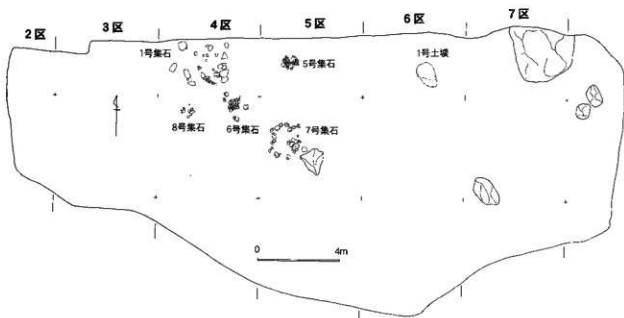
5. 遺構

黒岩遺跡で検出した遺構は、集石と土坑である。集石はいくつかの形態がみられるが、土坑単独のものは1基のみである。

集石については、上層と下層に一応分けることができたが、同一層の中で二重構造をもつものがあり、これらは全体図において上部・下部と分けて図示した(第9・10図)。土坑については、単独のもの一基のほかは集石に伴うもの(9号集石)がある。



第9図 遺構配置図(上部)



第10図 遺構配置図(下部)

1). 上層の集石遺構

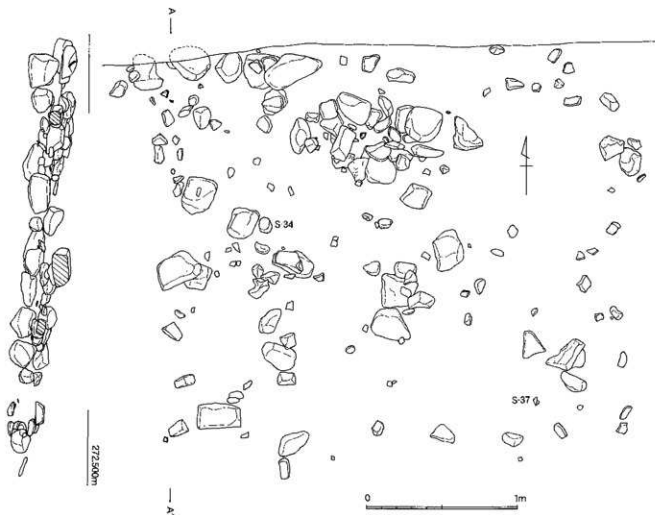
1号集石

調査区の北側、4区の山際の壁に近く位置する配石状の集石遺構である。3.5m×2.5mの略長方形に広がり、長軸を東西にとる。上部は拳大から人頭大の礫による長方形の配石と中心北寄りの集石によって構成される。中心の集石は少し積み上げたような状態である。

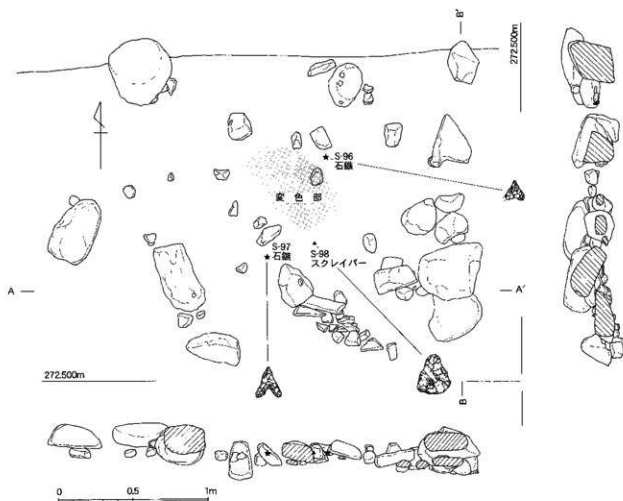
下部は、人頭大より大きめの扁平礫を略長方形に配してあり、その内側はまとまりのない小配石となっている。そのほぼ中央部の土に長円形の変色部がみられたが、土坑と確認するに至らなかった。しかし、変色部の周辺において石籤2点とスクレイパー1点が検出されているのは意味があると思われる。石籤は、遺跡全体3点のうち2点がこの部分での出土である。この下部の配石については、とくに東側の配石が直線的であり、南辺と東辺においても大きい扁平礫を意図的に配置している様子がうかがわれる。そうであれば中心部の変色部は埋葬による土坑であった可能性が高く、その周辺の石籤とスクレイパーは副葬品の可能性も考えられる。上部の集石部は、この変色部の直上となり、埋葬の標式としての集石と理解したい。

なお、これらの集石の礫は火熱を受けた形跡は認められない。また、石材については、現地の山石か河川礫と推定される礫岩である。

副葬品とみられる石籤は、1つは小型のチャート製、他は中型の抉りをもつサスカイト製、スクレイパーは、外形が尖頭状石器に近いチャート製である。3点とも完形の優品である。



第11図 1号集石実測図

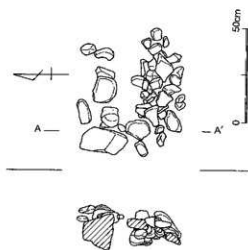


第12図 1号集石下部の配石遺構実測図

2号 集石

調査区の東側、他の集石からやや距離を置く7区の巨岩の近くに位置する。集石の礫の大きさは統一がなく、大中小とり混ぜた集合体である。この集石には比較的大きな土器片が共伴している。集石の石材は1号と同じく現地の転礫であり、火熱は受けていない。

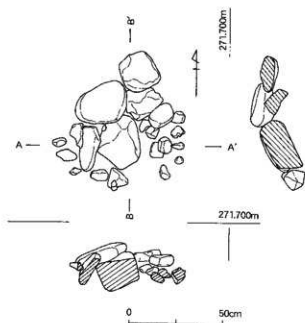
こうしたことから、2号集石の性格はが跡がなく、また埋葬に伴うものでもないと思われる。その広がり、は、70 cm × 60 cm の略方形である。



第13図 2号集石実測図

3号集石

調査区のはば中央、5区のアカホヤ直下で検出された。人頭大の扁平礫を少しずつ重ねるように集めたもので、その周縁に拳大の礫を若干配する。礫は焼けてなく、いずれも現地の転礫を利用してゐる。周縁に大型の土器片が伴う。その広がり70 cm×70 cm程である。



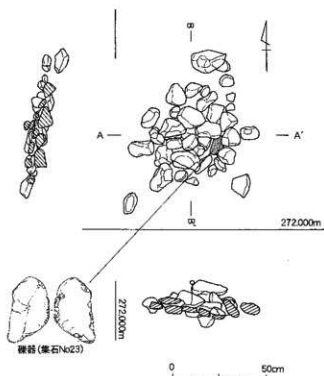
第14図 3号集石実測図

4号集石

調査区の中心のやや西寄りの5区内に位置する。拳大より大きめの礫を主体とし、その大半は火熱を受けており、脆くなっている。その広がり70 cm×70 cm、東西の断面をみると土層の傾斜に沿って南に傾いている。礫はいずれも現地の礫岩の転礫である。

集石の下部の東側寄りに、硬質の砂岩の垂角礫の一端に両面加工を施した礫器が1点検出された。長さ10.5 cm程の断面三角形の稜角に打撃を加えたもので、礫器にしては丁寧な加工である。また、その端部の鋭角部分のほか2ヶ所にも片面加工を施している。この礫は焼成をほとんど受けてなく、両面加工部分は、とくに鋭いエッジをのこしている。それゆえに、この石器は他の集石の礫と異なって、意図的に集石に加えられた可能性が考えられる。

この4号集石を取り上げたところ、直下から7号集石を検出することができた。

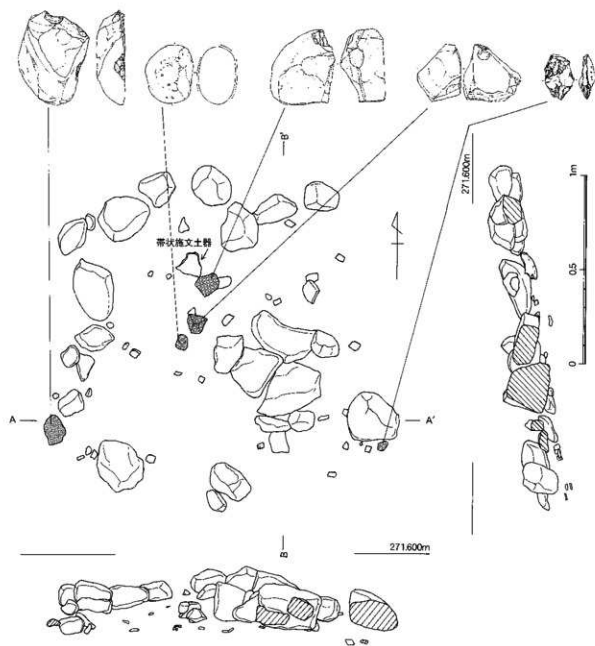


第15図 4号集石実測図

7号集石

4号集石の下部で検出された略円形の配石遺構である。その広がりは一.8m×1.8mであり、人頭大からそれより大きめの転礫で構成される。その配石は一様でなく、東南部により大きめの石を数個密集させている。この密集部と北西の配石の間に空白部があり、この部分で、ベルト状施文の大型破片と礫石器3点が集中して出土した。4号集石はこの部分の直上にあたる。その位置関係は意味あるものと思われるが、4号集石の下面と7号集石の上面の間にはいくらかの間層を認めることができる。

配石の南北の断面は4号集石と同様に南側に傾斜している。石材については1号配石と同様である。配石間の空白部についてはとくに土坑、変色は認められなかったものの、配石と共伴遺物の出土状況から1号配石と同じく埋葬遺構の可能性が考えられる。このほか、配石の周縁部で礫石器とスクレイパーの2点の石器が検出されている。



第16図 7号集石実測図

また、7号集石について特記しておかねばならないことは、配石東南部に縦・横1.5m角の大きな自然の塊石が接していることである。これは、明らかに7号集石の設定の際のランドマークとしたものと推定されるものである。端的に言えば、7号集石の標石として利用したものを考えることができる。

こうしてみると、7号集石と4号集石にかかる人の営為は、大塊石(自然石)に接して北西部に略円形に人頭大の石を配置→何らかの祭祀行為→覆土→焼石行為→礫器の埋め込みという一連の動きを読みとることができる。

出土遺物

配石間の空白部に3個の礫石器とともに楕円押型文大型破片が出土している。外面は口辺部から3帯のベルト状施文としており、内面は口縁部の1帯にとどめている。器壁はうすく、焼成も良好である。供献土器の可能性がある。

9号集石

4区内の1号集石の東南隅の近くに位置する土坑を伴う集石遺構である。土坑はアカホヤ下部の第7層に掘られたもので、集石は土坑内の塊石状の上に扁平礫が3個体立石状に立てられた状況を示す。土坑は1辺75cm程の略方形の開口部をもち、深さ約60cm下方に一段段をもってすぼまる。内部に土器片が少々有り、底部に礫は接していない。断面の観察で判るとおり、上部の扁平礫は土坑内の埋設が安定した後に並べ立てられた様子がうかがわれる。

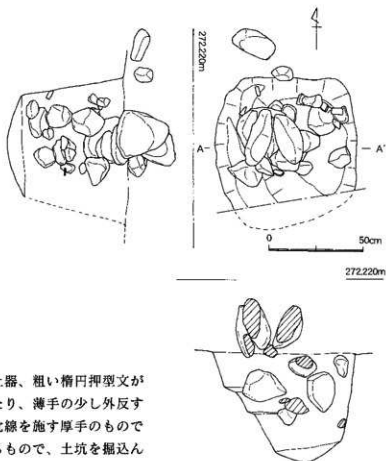
9号集石の土坑が掘られた時期は、土坑内上層の埋土にアカホヤが混入しており、アカホヤ降下直前と見てよい。

また、内部の礫は意図的に投げ込まれており、出土の土器は厚手無文土器が主である。土坑は第7層に掘り込まれ、底は第8層まで達する。このため、土坑内に8層の遺物が混入している可能性もある。

9号集石は、土坑と一体となり、上部の立石は意図的な標石とみとれる。そうであれば、土坑を埋葬遺構と考えても不自然ではない。1号集石とは、その位置関係から、何らかの関係が考えられそうであるが、1号集石は完全に7層中に形成された遺構であり、7層に掘り込まれた1号集石土坑とは時間差が明瞭である。

出土遺物

土坑内から厚手沈線土器、薄手条痕文土器、粗い楕円押型文が出土している。条痕文土器は口辺部にあたり、薄手の少し外反する器形である。沈線土器は縦横に浅い沈線を施す厚手のものである。この両者は、楕円押型文に先行するもので、土坑を掘込んだ際の混入品とみられる。



第17図 9号集石と土坑実測図

2) 下層の集石遺構

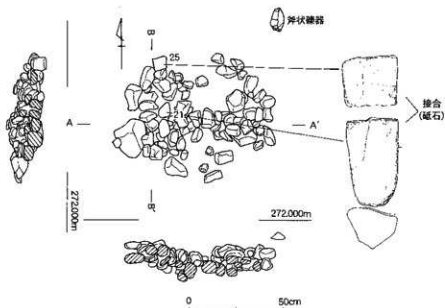
5号集石

1号集石の東側、5区の北壁面近くに位置する黒色土層中に構築された集石である。集石は、ほぼ半大の大きさのものが多く、密集状態に近い。南北、東西の断面を見るといずれも底面は浅い皿状となり、もともと浅い凹みに集積されていたことが観察される。集石はいずれも焼成を受けており、脆く破砕もしくは分割されたものも見受けられる。

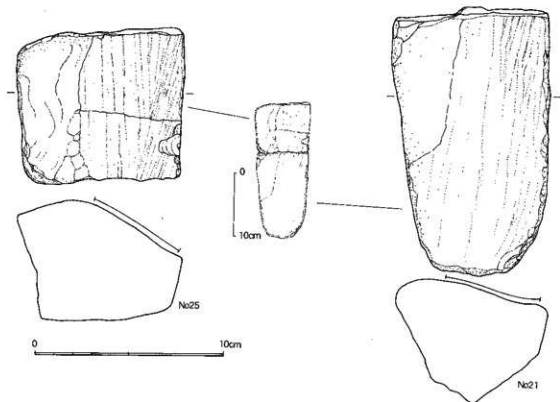
集石の中の接合例に2分割となった砥石が約20cmの間を置いて検出された。砂岩製の磨製石器用と砥石とみられる、分割面には煤が付着しており、砥石が割れて使用されなくなった後、焼石として利用されたものとみられる。

このほかの集石の礫は、現地の礫岩の転礫である。また、5号集石の北東部近くから、斧状の礫器(第96図3)が出土している。これは、良質の礫岩の分割礫を利用した、ほとんど片面加工に近い形態のものである。集石と何らかの関係があるものと考えられる。

5号集石の性格は、集石の底部分では多くの炭化物が確認されていることから調理用の焼石とみられる。



第18図 5号集石実測図

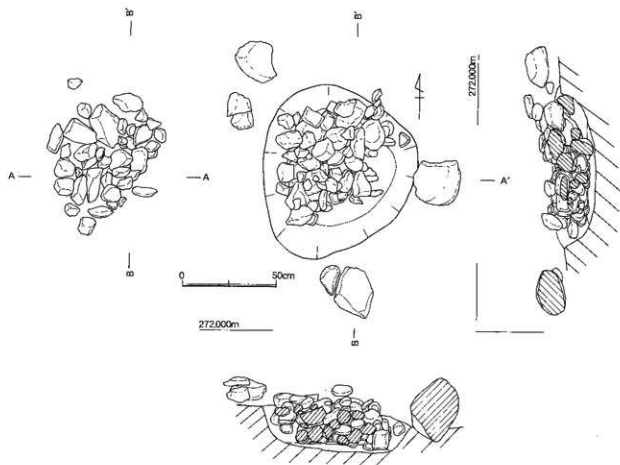


第19図 5号集石内出土砥石実測図

6号集石

4区内の1号集石南東部近くにある土坑を伴う集石である。土坑は9層のローム層に掘り込まれており、長径90cm、短径80cmの略円形、深さ約25cm、内部にぎっしりと詰まった状態の集石である。礫は拳大のものとそれより少し大きめの礫で構成され、いずれも焼成をうけている。礫は現地の礫岩の転礫を使用している。

6号集石の土坑は少し深めの明確な掘り込みであり、焼石は全てその内側に納まる。これとは別に土坑の外縁に沿って人頭大の礫が東と南と北西部に配されているのが観察される。これは、1号集石や7号集石の配石とは明らかに性格が異なるもので、調理に何らかの関係するものとみられる。おそらく、腰掛け石といったものではないかと推定される。



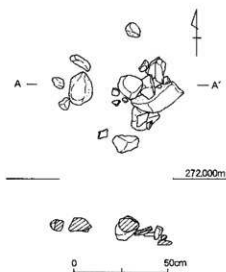
第20図 6号集石実測図

8号集石

4区1号集石の南側に位置する小規模のものである。集石は大小不統一、まとまりがない配石状である。集石の東側に少し重なりがみられ、またこの部分から土器が集中して出土している。集石は現地の転礫を使用している。その広がりは東西、南北ともに70cm。

出土遺物

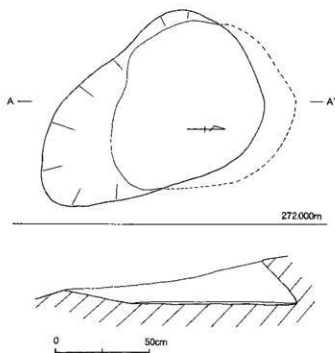
集石に接して2個体分の無文土器片が出土している。2つとも胴部から口辺にかけて直向するもので、やや薄手の口径の小さいものである。



第21図 8号集石実測図

3) 土 坑

6区の北側壁近くに位置する。集石を伴わない唯一の土坑である。長径は底部で140cm、短径90cmの長円形。袋状をなすもので、上部がかなり削平されている。本来南側も袋状であったとみられる。9層のローム層に掘られており、その性格は貯蔵用か埋葬関係のものか判然としない。



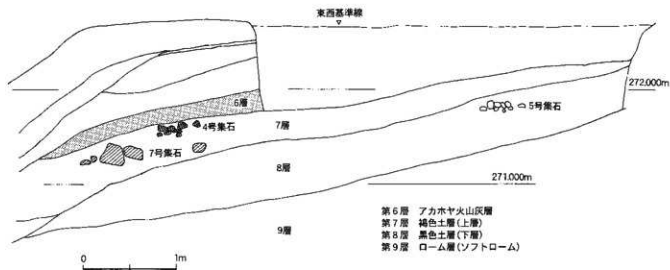
第22図 1号土坑実測図

4) 遺構 小結

黒岩遺跡では、300 m²に満たない調査区の中で変化に富む集石遺構が検出された。それは、(1) 配石状のもの、(2) 上坑をもつ集石、(3) 焼けた集石、(4) その他の4つに大別できる。(1)の配石状ものは、1号集石と7号集石である。1号集石は、上下の二重構造の上部の集石の下部に土坑状の変色部をもち、その周辺に副葬とみられる石器が伴うもので長方形の配石墓の可能性はある。7号集石は円形の配石の内部に石器と土器が集中する空白部をもつ。9号集石の(2)は、深い土坑の上部に立石を伴うもので標石とみられる構造である。(1)・(2)はいずれも焼石を伴わず、その形状から埋葬遺構と考えたい。(3)の集石はいずれも焼成を受けた集石であり、4号・5号・6号がそれに当たる。そのうち6号は掘り込みの上坑内に焼石が密集したもので、また三方に石を配する周到なものである。なお、4号集石は7号集石の上部に位置し、相関する可能性が高いが焼成を受けており、別個のものと考えられなくもない。ただ、4号集石の下部から熱を受けていない礫器が1点共伴しており、その性格は検討を要する。(4)はとくに性格は特定できないが、礫の集合体としてまとまったものであり、集石の範疇にいった。

概して、上層部は埋葬を主とし、下層は焼成礫を主とする空間として利用されたと理解しておきたい。

縄文早期の配石や立石を伴う集石遺構は、県内では別府市十文字原第一遺跡や速見郡日出町エゴノクチ遺跡で報告例がある。これらとの比較検討が必要であろう。



第23図 集石の出土層位図

6. 遺物

1) 縄文時代の土器

(1) 土器の出土状態

黒岩遺跡の層序を簡略に述べれば、上部から表土層（1～4層）、褐色土層（5層）、アカホヤ火山灰層（6層：ただし、調査区短軸の中程から東側、および長軸の中央部に残る）があって、その下層に二枚の遺物包含層が続く。褐色土層（7層）と黒色土層（8層）が遺物包含層である。

調査区南端の2区ではアカホヤ火山灰層・褐色土層は存在せず、礫混じりの黒色土層が残る。7区北半部から北側にはアカホヤ以下の7・8層は残らず、大きな岩が1個、西部から調査区外に延びる。初め地山の岩盤が露出しているのであろうと考えたが、転礫であった。ある時期、山崩れが起こり、遺跡を消滅させたものと思われる。

2区と3区の境界部分及び6区と7区の境界部分に設けたトレンチでは個別採り上げが十分ではなく、大部分一括して採り上げている。現地調査終了後、土器片に記入した文字が読めなくなった場合も生じたため、出土位置が不明になったものもある。

以下ではできるだけ同一個体か否かについて注意しつつ報告するが、特に無文土器の場合、よく分からない土器が多かった。押型文土器はすべての口縁部を図示した。少数の胴部片は図示することを割愛したものがある。無文土器の胴部片は図示していない例が多い。口縁部も特徴的なものは図示したが、小片については若干示していない。土器の胎土については何かの結論を得ることができず、曖昧な説明に終始しそうなため、特別な場合をのぞいて触れていない。

同一個体毎にまとめた結果、同じ土器の破片が上層の7層と下層の8層に分かれて出土する例があった。また、調査中、頻繁に担当者が交替したので、出土層の記載に混乱ないし無記載が生じた場合があった。その場合、前後の状態から判断して報告したが、一部の礫遺構の認定と共に確定的ではない。

土器の報告にあたり、層毎に平面的位置を示す方法をとった。平面図は北を下に、南を上を図示している。中央縦方向に並んだ方形は一辺5mである。土器・石器は出土標高とともに採り上げたので、細かな高度差については一部のみ図示したが、それ以外についても後日再検証可能である。

7層出土土器（第24図～第43図）

○ 山形押型文土器から説明する。

第24図には7層出土土器は3個体を図示した（4・5は8層）。

1は5区南部に分布。内面の山形文は5段。口唇部には刻み目。2・3は同一個体。山形文は前者が6段。4区と5区に分布した。6は口唇部に刻み目がつく。4区西部出土。第25図は7点すべて別個体である。2は7層と8層の間の微妙な位置で出土した。第26図は同一個体の胴部片である。縦方向の施文が多い。斜め方向に図示したのも、方向は厳密ではない。7層だけでなく8層にも類似の山形文をもつ口縁部の破片はないので、流失したのであろう。4区・5区に分布した。

以下、楕円押型文土器を示す。

第27図は同一個体で、施文原体には5段の楕円文がつく。施文は外面だけにあり、帯状に無文部がある。4区・5区の西部で出土した。第28図は同一個体である。土器の傾きは不明。原体には8段の楕円文がある。分布は4・5区中央から東部にまとまる。13は5号集石に混じていた。

第29図も別の個体である。前図に似、4区東部に集中する。無文部をもつ帯状施文の楕円押型文土器である。1から外面には4段以上の施文がある。原体には8段の楕円文がつく。口径

30.4 cm、破片の高さは14.1 cmある。

第30図は1～3、4～6、10・11がそれぞれ同一個体である。第31図は同一個体である。4区の西部に分布する。第32図も同一個体である。楕円は大きい。4区に分布する。第33図は同一個体である。1は口縁部で、内面に縦方向の沈線がある。第34図は同一個体で、6区西部に出土した。第35図は6区南部から7区中央部に分布した壺形土器である。縦方向に回転施文している。口径13.3 cm、胴部最大径13.2 cm、高さ14.5 cmで、焼成前に空けられた穴の直径は13 mmである。

第36図も同一個体である。5・6区西部に集中した。外面のみ施文している。第37図は3区の口縁部の同一個体である。内面に沈線状の押型文がある。4区の東部に分布すること、楕円文の大きさから第32図のものと同一体の可能性もある。

第38図は3区西部で出土した。第39図は5～7以外は別個体である。

その他の土器を次に示す。

第40図には9個体を図示した。1は二枚貝条痕で器面調整したおそらく円筒形の土器である。3は6区のトレンチで8層から出土したものであり、これだけ、ここに載せた。8には楕円形の突起がつく。第41図2は帯状の突起がつく。この破片では突起としか見えない。第42図には5個体を示した。5は横なで調整。長さ9 cm程度の横に長い突起がつく。7は上部が欠けているが、十字形の貼付けがある。器面に二枚貝による条痕調整が残る。7区西部出土。8は7層から8層にかけて曖昧な位置に出土した。

第43図1は燃糸文土器である。6区の2号集石からまとまって出土した。口径26.5 cm、高さ20.2 cmの丸底器形である。2には焼成後の穿孔がある。補修孔であろう。1・3は7層出土土器にあって、数少ない北部地域（分布図の下部）出土土器である。

7層出土土器の特徴の第一は、山形に比して楕円押型文土器の量的な多さが顕著な点である。次に、楕円文の中でも帯状施文土器（第27・28・29図）の存在を挙げておきたい。下層に多くの押型文土器が存在するにもかかわらず、上層において複数の帯状施文楕円押型文土器が出土したことは注意しておきたい。第28・29図の2個体は破片数も多く、4区東部から5区東南部の同一地域に分布している。偶然の一致であるか、同時に使われたのか五分五分であろう。この分布域に重なって第26図の縦方向施文山形文が出土し、同じ分布域の西部に大型の楕円文の1個体（第32・37図）が分布した。これ以外の土器の分布状態は、無文土器・条痕文土器等を含め調査区南西部にあるものが多く、北部（分布図の下部）から出土したものは少ない。

8層出土土器（第44図～第79図）

8層では7層以上に多量の土器が出土している。山形押型文土器、楕円押型文土器、無文土器、その他の順に説明してゆきたい。

○ 山形押型文土器から説明する。

第24図4・5・第44図～46図は山形押型文土器である。

第24図4・5は同一個体。7段の原体は山形列をもち、口唇部に刻み目をもつ。4は2区8層出土、5は5区7層出土。

第44図には9個体を示す。1は外面に斜め方向の山形文がある。帯状施文つまり無文帯をもつ。5区の東部で出土した。2は外面に横方向の紋様をもつ。4区中央の南部で出土。3も同様の施文。5区中央の北部出土。帯状施文。4は帯状施文で、内面にも施文する。7段の山形文をもつ。4区

中央北部で出土。5・6は同一個体で、3区西部出土。7は6区西部出土の大型山形文。8・9は同一個体である。4区中央から西部に分布した。8は内面にも山形文を施している。無文帯の狭い帯状施文土器である。10は4区中央出土で、内面にも施文がある。11は帯状施文で5区中央部出土。

第45図は同一個体での薄手土器である。尖底であろう。口縁部内面に9段の山形をもつ原体を押し付け転がしている。外面は上部が横方向、下部は斜め方向の施文である。口径21.9cmで、推定高さ17.3cmである。3・4区の西部に分布する。3点は下層である8層（黒色土）、2点は上層の7層（褐色土）から出土している。黒色土が本来の包含層であろう。この土器は上部は稲荷山式だが、下部は横方向施文ではない。第45図下部はこの土器の出土状態の断面投影図である。図の説明をすると、横方向は縦線と縦線の間隔が5m、横線は標高であり5倍に拡大している。

第46図には6個体を図示している。すべて薄手土器である。これらは4区西部から6区中央に分布し、口唇部に刻み目がない型のものである。1・2は直線的に立ち上がる薄手土器である。施文具は少なくとも7段の山形をもつ原体で、2の内面下部では原体端部がわかる。6区中央部出土。3は口縁部が内湾する土器で、内面に横方向、外面に斜め方向に施文している。4は直線的な口縁部で、両面とも横方向に施文している。5・6は直線的な口縁部である。両面とも横方向の施文。原体には少なくとも7段の山形がある。4区西部出土。7は口縁端部が短く外反するもので、内面に山形紋をもち、外面は無文のようである。4区中央部出土。8～13は同一個体である。4区西半分から5区中央部に分布した。8からみて少なくとも7段の山形をもつ施文具を用いている。

第47図は胴部の同一個体である。横方向に施文した胴部の破片である。出土状態は4区中央部と5区の東部に分布する。

第48図は胴部の同一個体である。4区東半分から5区中央部に分布する。口縁部・底部はなく、すべて胴部の破片である。施文の方向は上部では横方向に施文し、下部では斜め方向に乱れている。

第49図には縦方向に施文した9個体を示す。1は山形文の中心に1列だけ楕円文のつくものである。楕円文部分が施文具の末端というわけではない。7区南東部から出土した。2～4は縦方向に山形文が施文されている。6区中央に狭く分布した。5は3区としか分からない。6は4区中央部で2点出土した破片である。丸い器形であり、縦方向施文も上層（7層）の楕円押型文の有孔盃形土器に似る。7～11もそれぞれ別個体の縦方向施文土器である。

以上の山形文土器で特徴的な点は、①口縁部が直線的に立ち上がるものだけで、②口縁部に刻み目をもつのは1個体しかなく、他は外面と同じ山形文を横方向に施文している、という点である。

○ 以下は楕円押型文土器である（第50図～第57図）。口縁部に限っては全点実測図示した。

第50図から第52図は同一個体であろう。当初、別個体と考えていたので別々に分布図を作成した。第50図は口縁部が直線的に短く外反する。原体には少なくとも9段の楕円文が並ぶ。内面は横方向に楕円文を回転施文した後、口縁部に直線状の押型文を施文している。外面は横方向に施文している。5区中央部に集中し、6区に1点出土した。第51図は横方向施文の直線的な破片であり、口縁部に近い部位か。第50図の分布よりも少し北東の6区中央から東部に分布した。第52図は5区東部・6区東部・7区中央部から東部にかけての分布、調査区全体では北東部に分布する。施文具の回転方向はばらばらである。破片の部位はどちらかといえば胴部下半ということもできる。この個体の分布状況は口縁部周辺が第50図にあるように5区中央部に分布し、それに続く下側は6区南部に多く、土器の下の部分はさらに外側に広く拡散している。

第53図には8個体を示した。1は小粒の楕円文を横方向に施文したものの。4区中央部出土。2は斜め方向に図示したが、横方向にすべきかもしれない。4区西部出土。3もやや小粒の楕円文。

4区西部出土。4・5は同一個体である。5区中央部で出土した。口縁部は外湾し、内面には横方向に10段の直線状押型文を施し、上部に重ねてそれより太く短い直線状押型文がつく。外面には横方向のやや小粒の楕円文がある。6は大粒の楕円文のように見える。5区中央部出土。7はやや小粒の楕円文である。5区中央部出土。8は両面に小粒の楕円文を横方向に回転施文している。4区西部出土。9は小粒の楕円文のように見えるが鮮明ではない。5区中央部出土。

第54図には6個体を示した。1は小粒の楕円文を横方向に施文したもので、押型文は上下に重複施文されている。原体の楕円文は8段確認できる。この破片の上部には帯状に無文部がある。3区中央部出土。2は上部は縦方向施文、下部は横方向施文である。同一個体があるはずだが、はっきりしない。4区中央部出土。3・4は同一個体である。4区中央部で出土した。5は5区西部出土。6は5区中央部出土。7は5区西部出土。

第55図には2個体を示した。1～3は口縁部付近の破片で、胴部は張り出し、口縁部は強く外反している。内面には直線上の沈線文が上下二段施文される。外面は斜め方向施文のやや大型の楕円文である。4区・6区に散漫に分布した。4区中央部の土器は7層から出土している。4は5区西部で出土した口縁部から胴部下半にかけての大きな破片である。器形は胴部は張らず、口縁部は外反する。口縁部内面には二段の直線の沈線文が引かれ、外面には縦方向施文の楕円文がある。4の出土状態の断面見通し図を第54図下部に示した。

第56図は同一個体である（2が同一個体かはやや疑問があるが）。やや大型の楕円文土器で、口縁部内面には斜め方向に太い沈線を引き、口縁部外面には斜め方向に楕円文を施文している。4区東部から5区中央部に分布する。

第57図1・2は同一個体である。口縁部は外湾し、内面無文。外面には斜め方向に大粒の楕円押型文が回転施文されている。1点7層出土で大部分は8層から出土した。5区中央部に集中し、1点4区東部に分布した。

○ 格子目文土器が1個体ある。

第57図3～6は同一個体で、5区から6区の中央部に分布した。12段以上、おそらく13段の窪みが施文されている。帯状施文土器である。内面に施文した破片はない。

○ 以下は押型文土器以外の無文土器・条痕土器である（第58図～第76図）。条痕調整を大部分で消したのもあることから、一見無文に見える土器も条痕調整が消されている場合もあり、一括して説明する。条痕調整が顕著に残る例は拓影で了解できると思う。

第58図は同一個体である。図示しなかったが、このほか胴部の小片が若干出土している。4区と5区に分布し、4区の8号集石、5区の4号集石には集散的に分布する。二つの集石が同時期のものである可能性が高い。直線的に立ち上がるもので、口径22.6cm。第58図下部にこの土器の出土状態断面見通し図を示した。西側の縦線に近い土器である。相互の比較のため、他の土器の場合もこの線のそばのものを●で示している。

第59図2は口径22.0cm、高さ16.7cmの円筒形である。条痕調整が残る。4区西部で出土した。1は同一個体と思われる突起をもつ口縁部で、3区出土。層不明。

第60図は同一個体。両面に二枚目条痕調整後、なで消し。1は円筒形で口径22.3cm、高さ12.1cm。口縁部は内向きに傾く。2・4は小片のため傾き不明（この場合、口縁部左上に直線を描いていない）。4号集石（7層）からも1点出土したが、下層のものが掘り出されたのであろう。大部分は8層出土である。8号集石からこの土器片が5点出土している。1の口縁部上端には突帯状の貼り付けがある。長い突起かどうかは不明。

第61図には4個体を示す。1～3は4区出土。4は4区出土。5・6は同一個体だが、5は3

区東部のアカホヤ混じりの部分から出土した。

第62図には6個体を示す。1～3は同一個体で、1には下向きに垂れた横長の貼付け突起がつく。7と9も同一個体で9には口縁上端からやや下がった位置に突起がつく。

第63図には5個体を示す。すべてなで調整である。

第64図2は丸底に近い薄手の尖底である。4区出土。4は口径20.6cmで横長の貼付け突帯をもつ。5は小型の粗製土器で、粘土紐の繋ぎ目がよく残る。口径9.6cm。

第65図は5個体を図示している。1・2は同一個体とみたが、とすれば1の突帯状のものは突起であろう。この突帯状のものは第67図3に類似する。

第66図1～3は4区出土の同一個体。厚手で口縁部は外湾する。6～8は縦方向の条痕調整の土器。8は丸底らしい。

第67図には2個の同一個体がある。1・2は4区出土。1には横長の貼付け突起がつく。3・4は3が4区、4が6区出土である。3の口縁部外面に無刻目突帯状だが、突起の可能性もある。

第68図1は口径27.9cm、高さ20.7cmである。2とは直接接合しないが、推定の復元高は29.5cmである。4区中央から西部に集中分布した。薄手で尖底の角度が狭く、口縁部は内湾気味に立つ。

第69図は同一個体で、器面調整は内面なで、外面板状具によるなで。5区中央部に集中し、1点4区西部に出土した。

第70図1～3は同一個体で、両面ともへら磨き調整。4区出土。6は両面とも条痕調整で、厚手である。円筒形のものか。7・8は浅く明瞭な条痕がある。口唇部には刻み目はない。9は壺形か。

第71図はすべて同一個体の破片である。薄手で器面は平滑ななで仕上げされている。第72図は同一個体である。4は9号集石土坑から出土したが、他の3点は下層の8層から出土した。二枚貝条痕調整で、胎土に石英を混入する。

第73図には貝殻条痕の認められる5個体を示す。1は4区西部出土で、口縁部は外反する。2～6は4・5区西部出土。両面に条痕を残し、口唇部に刻み目はない。7・8は5区出土で、明瞭に残る条痕調整の上から楕円形の突起を貼り付けている。第74図には6個体を示す。

第75図4～6は同一個体で、4区西部出土。7は上部で内傾し、口縁部は外湾する。

第76図1～3は同一個体である。図示しないがほかにも胴部小片6点があり、分布図のように4区から6区に分布する。1・2の口唇部には二枚貝助縁による刺突がある。器面調整は幅広の条痕文が施こされている。4は焼成後の穿孔がある。

○ 以下は沈線文土器である(第77図)。

第77図は同一個体の厚手の土器である。器面調整は内面はなで、外面は細い条痕のち棒状のもので縦横に沈線を密に加えている。

○ 以下は条痕調整であるが、外面に二枚貝の刺突文をもつもの(第78図)。

第78図1は内面は二枚貝条痕で、外面には二枚貝の背を押しつけた刺突文がある。5区の中央部で出土した。2は同様の施文をした土器である。6区の中央部で出土した。

○ 以下は摺糸文土器である(第79図)。

第79図は摺糸文どきである。1～4、5～8はそれぞれ同一個体である。1は3区出土。2～4は3区出土。内面はなで調整。

出土層不明土器・攪乱層出土土器（第81図）

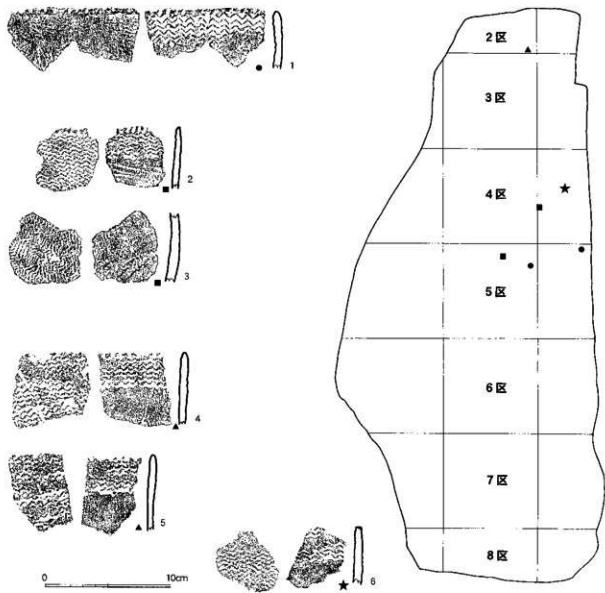
出土層位が不明のものをまとめた。1・2は攪乱層出土の同一個体で、内外面二枚貝条痕、口唇部にもその先端部で刺突している。外面上部に縦方向に沈線文が付けられる。外面には条痕調整後、貝殻肋縁による刺突がある。器形は円筒形であろう。3・4は3区出土。5は3区のトレンチ出土。6は6区南部のトレンチ一括採り上げで、層不明。7は3区出土。8は4区の出土で、土器片の記入が消えている。P-不明数字59である。9・10は同一個体で条痕調整。尖り底。共に4区の攪乱。9は最大径15.3cm、高さ11.4cmに復元できた。

円盤状加工土器片（第81図1～13：○は7層出土、●は8層出土である。）

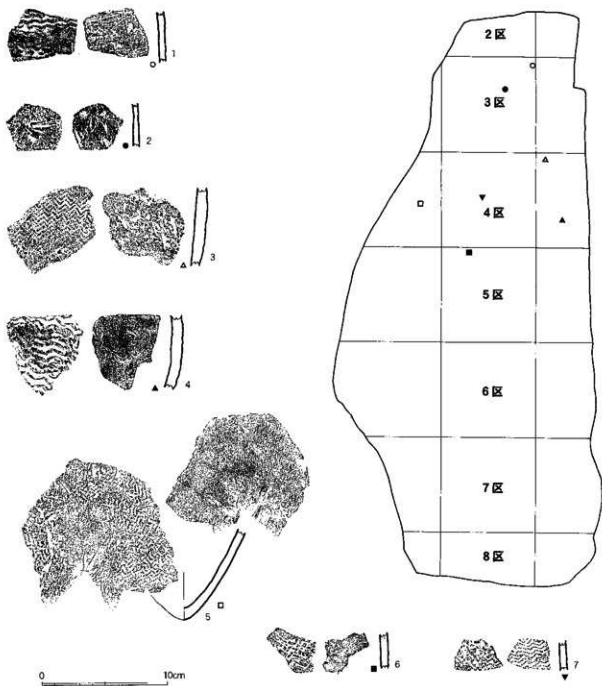
土器片を打ち欠いて円盤状に仕上げたもので、基本的に打ち欠きのみで作られるが、7は矢印の部分の側面を磨いている。利用された土器には押型文土器はない。4・5は外面に二枚貝条痕を施している。7層から3点（4・9・12）、8層（その他）から10点出土した。7層出土品は4区中央から西部に分布し、8層出土品はその周辺に広く分布する。

重量は以下のとおりである。

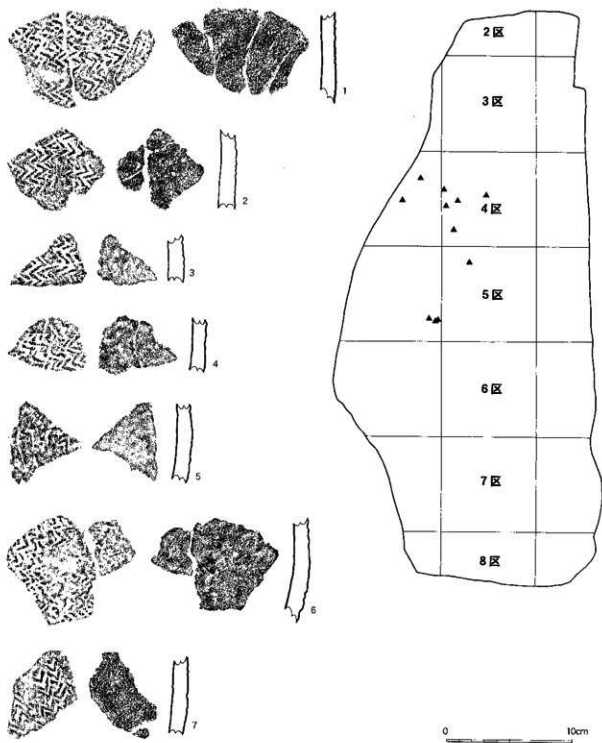
1 (79.5 g)・2 (37.3 g)・3 (58.1 g)・4 (23.5 g)・5 (23.4 g)・6 (10.6 g)・7 (25.9 g)・8 (17.4 g)・9 (13.9 g)・10 (11.4 g)・11 (14.3 g)・12 (13.7 g)・13 (27.1 g)



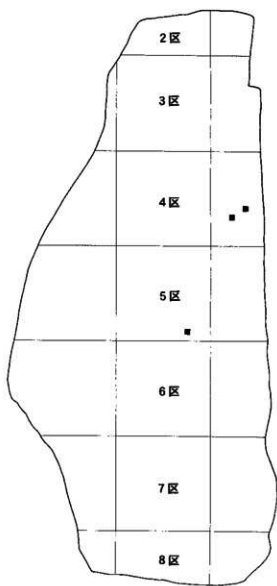
第24图 7層出土土器(1) ※4・5は8層出土



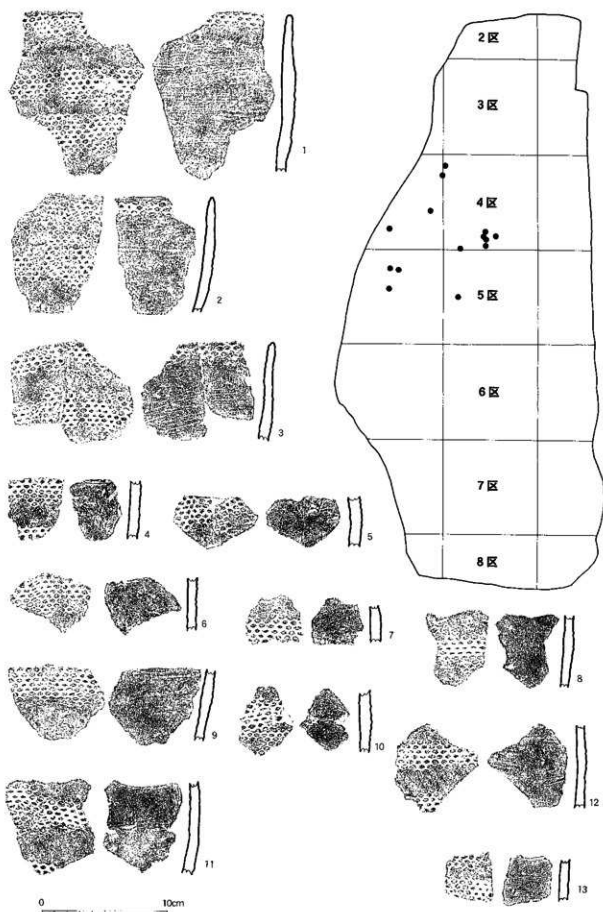
第25回 7層出土土器(2)



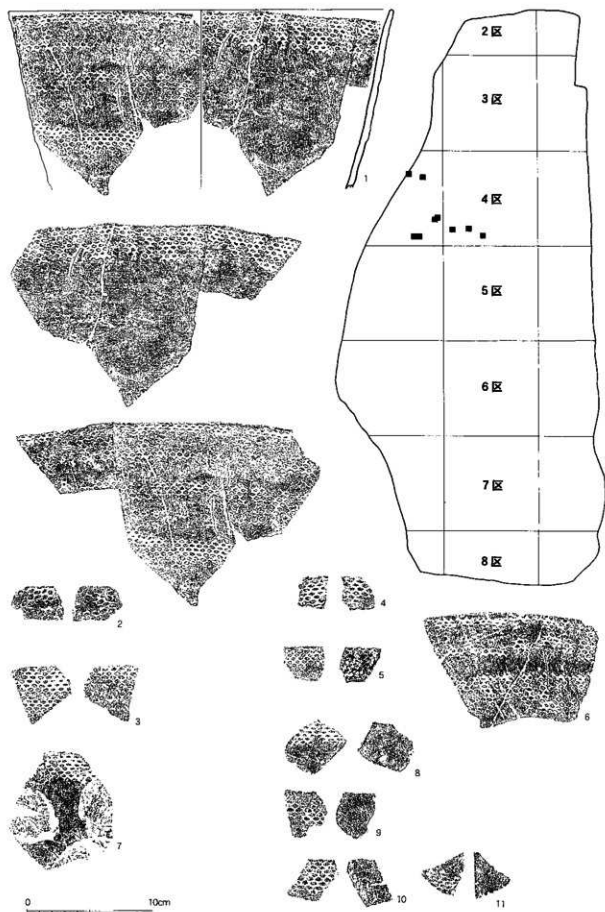
第26圖 7層出土土器(3)



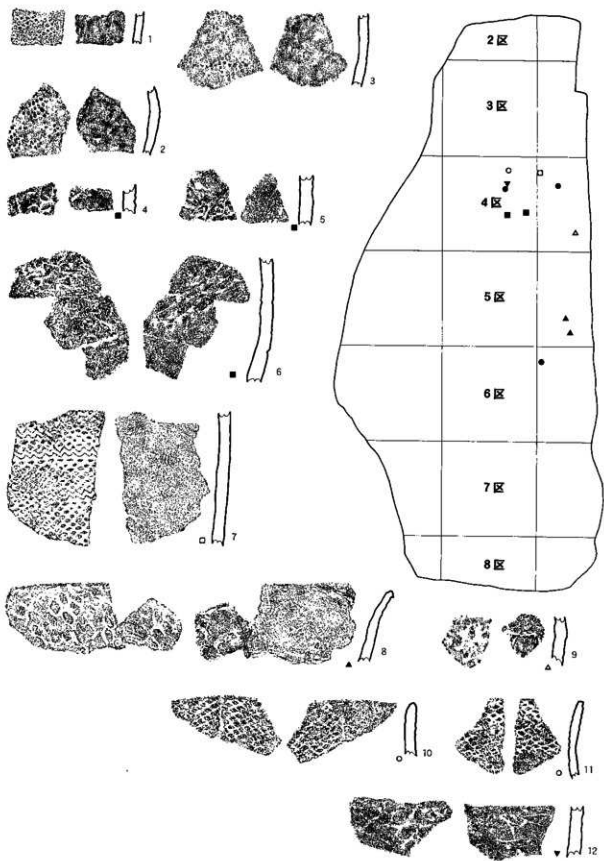
第27图 7层出土土器(4)



第28圖 7層出土土器(5)

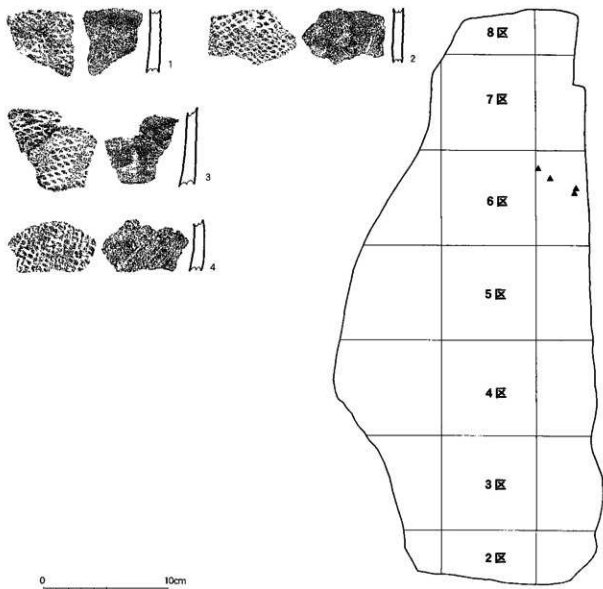


第29回 7層出土土器(6)

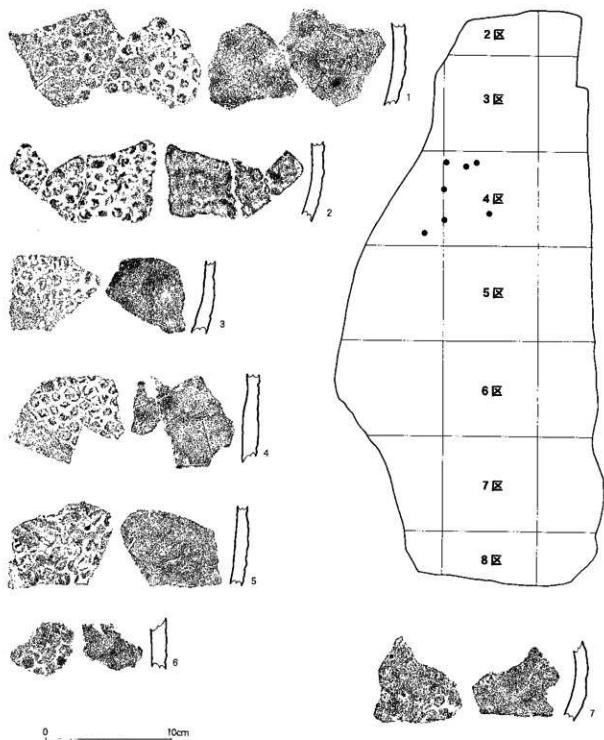


0 10cm

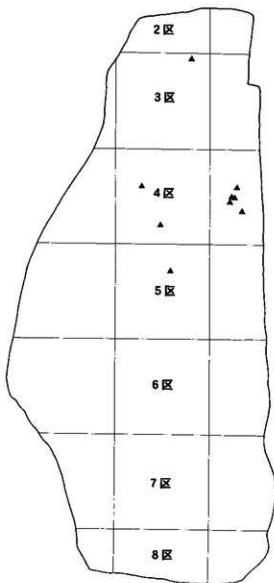
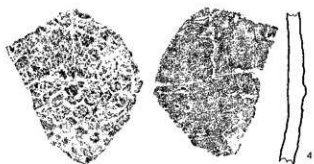
第30图 7层出土土器(7)



第31圖 7層出土土器(8)

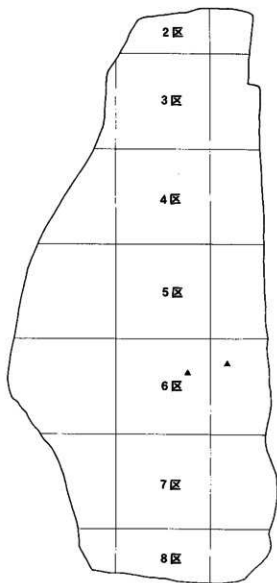
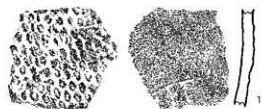


第32圖 7層出土土器(9)

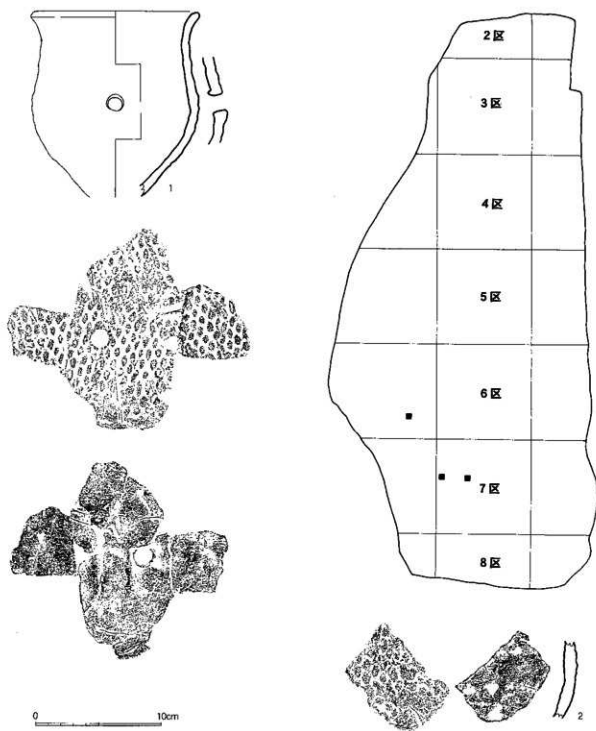


0 10cm

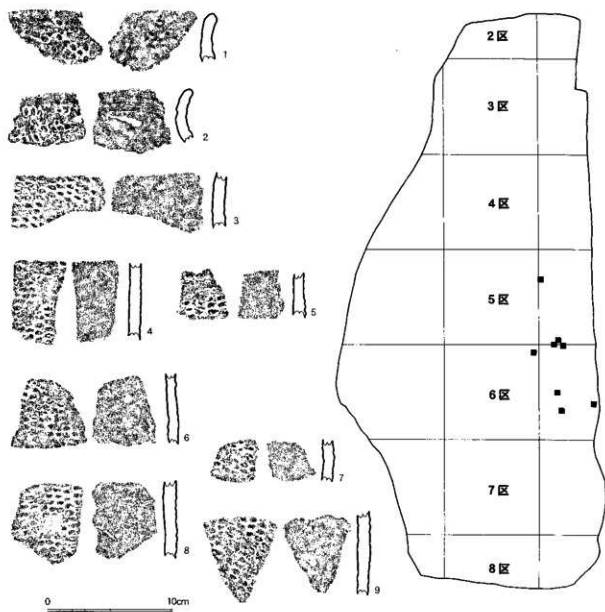
第33图 7层出土土器(10)



第34图 7层出土土器(11)



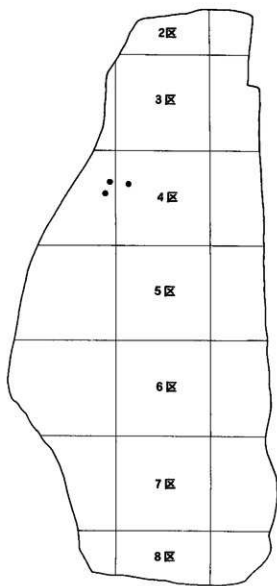
第35图 7層出土土器(12)



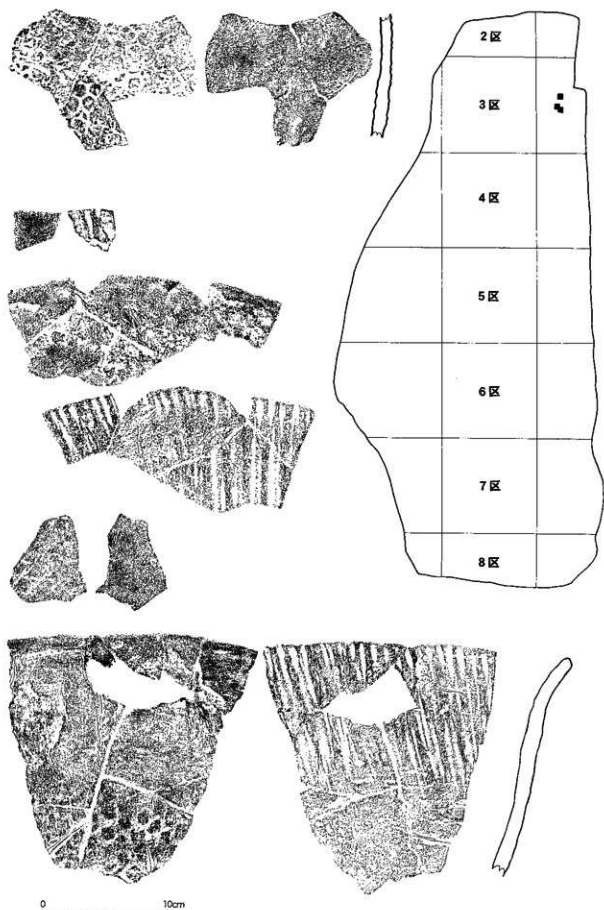
第36图 7層出土土器(13)



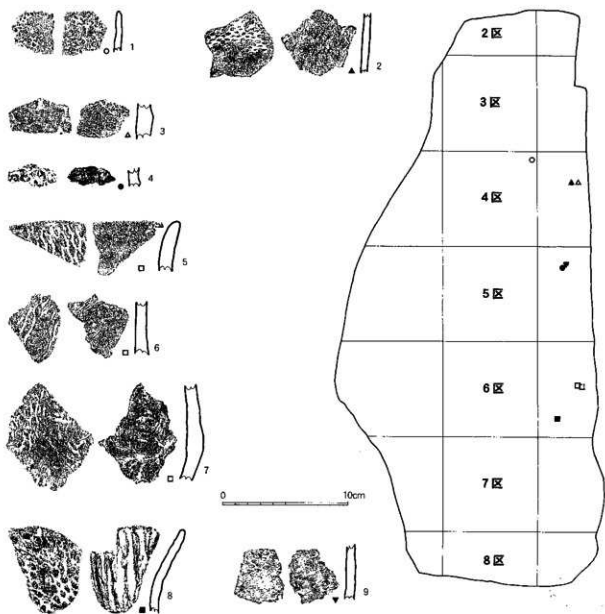
0 10cm



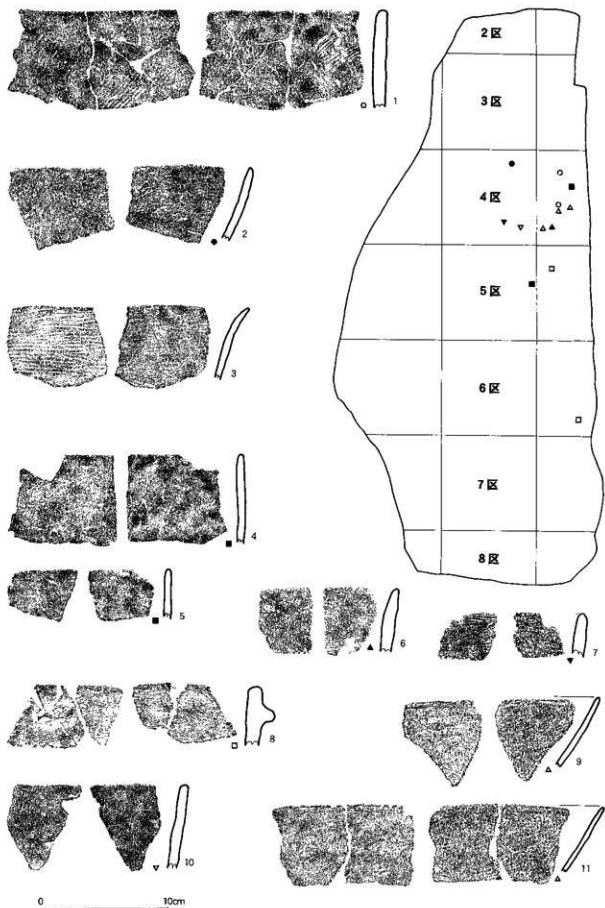
第37图 7層出土土粒(14)



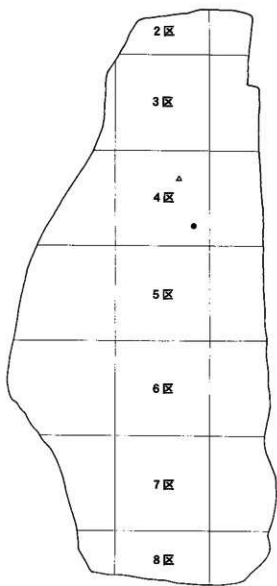
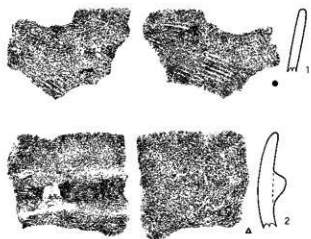
第38圖 7層出土土器(15)



第39圖 7層出土土器(16)

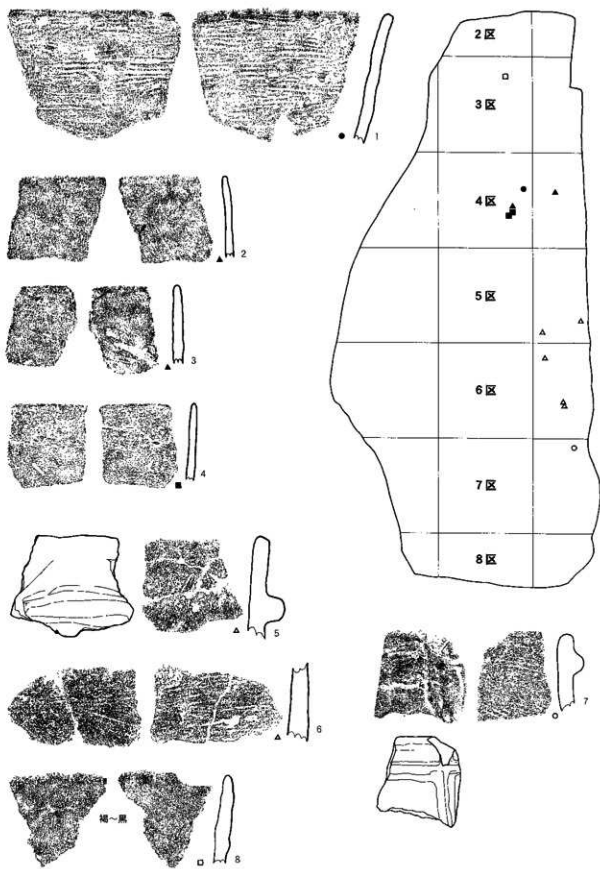


第40図 7層出土土器(17)※3は8層出土

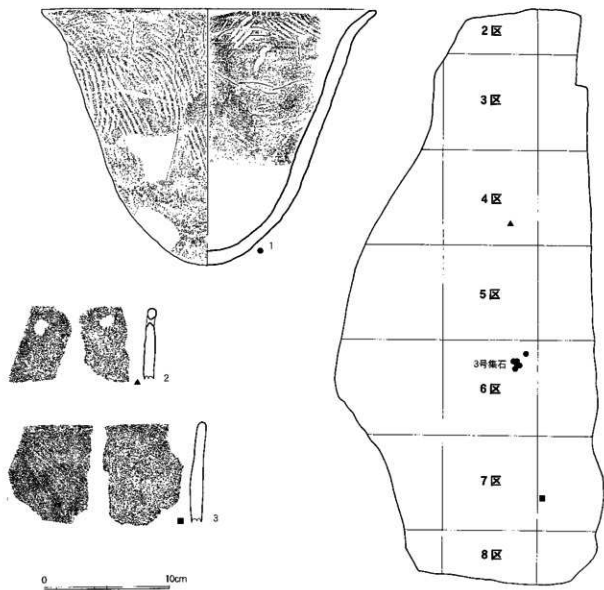


0 10cm

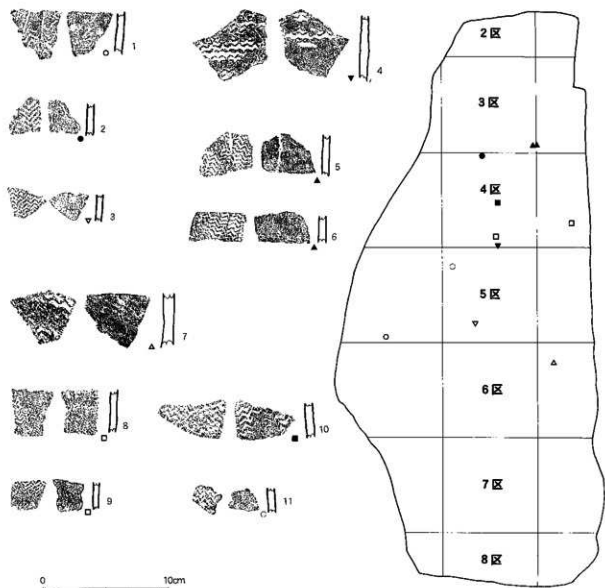
第41圖 7層出土土器(18)



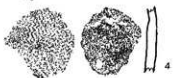
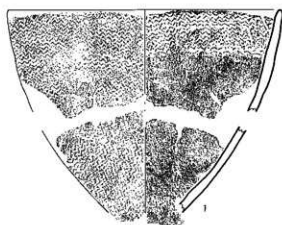
第42図 7層出土土器(19)



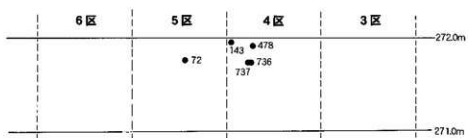
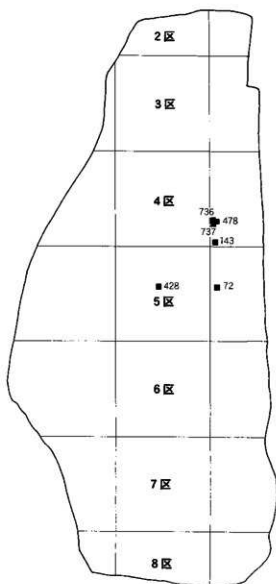
第43图 7层出土土器(20)



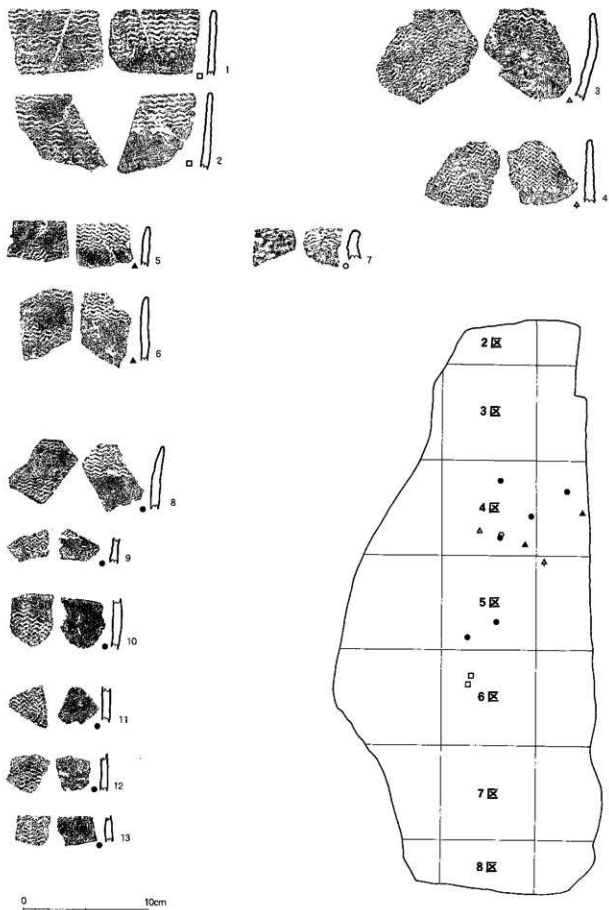
第44图 8层出土土器(1)



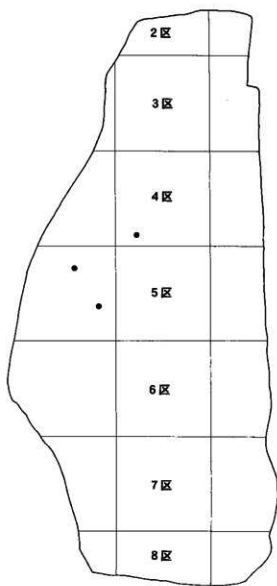
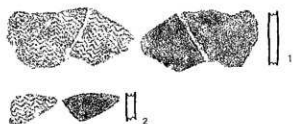
0 10cm



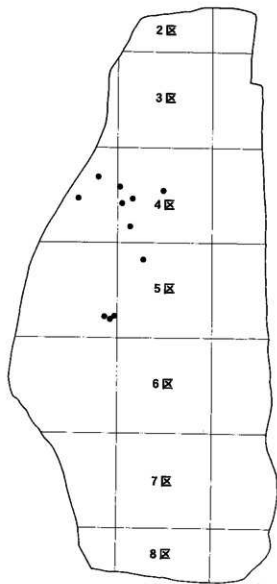
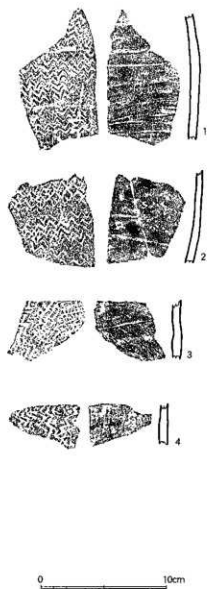
第45图 8層出土土器(2)



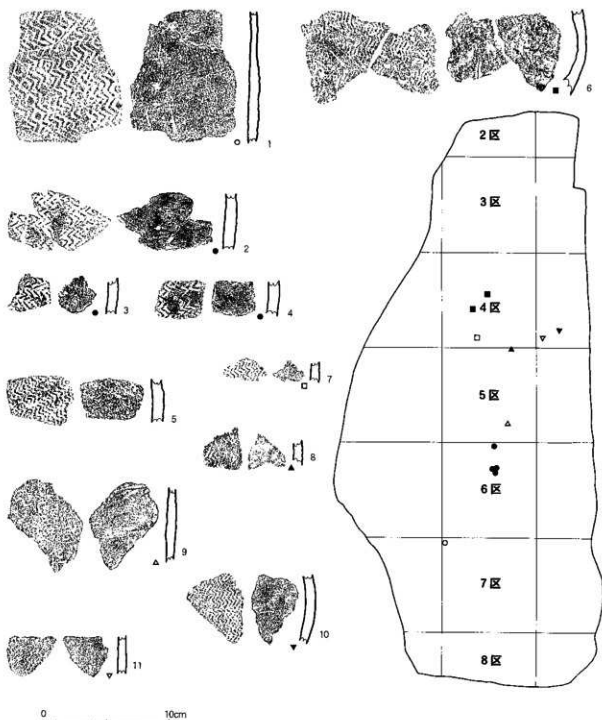
第46图 8层出土土器(3)



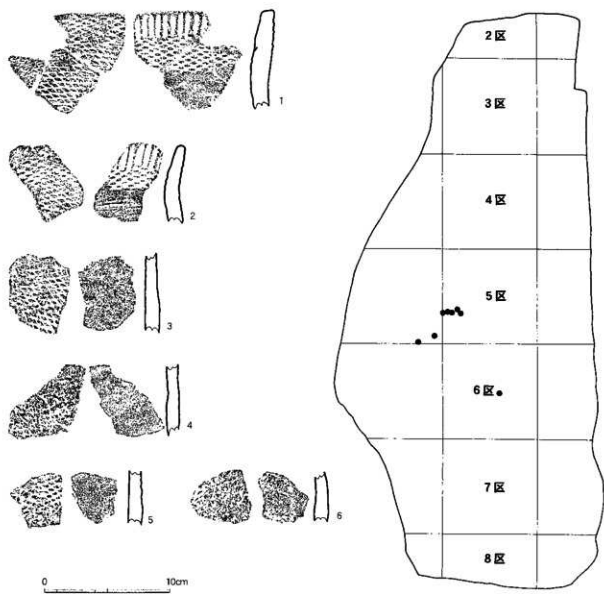
第47图 8层出土土器(4)



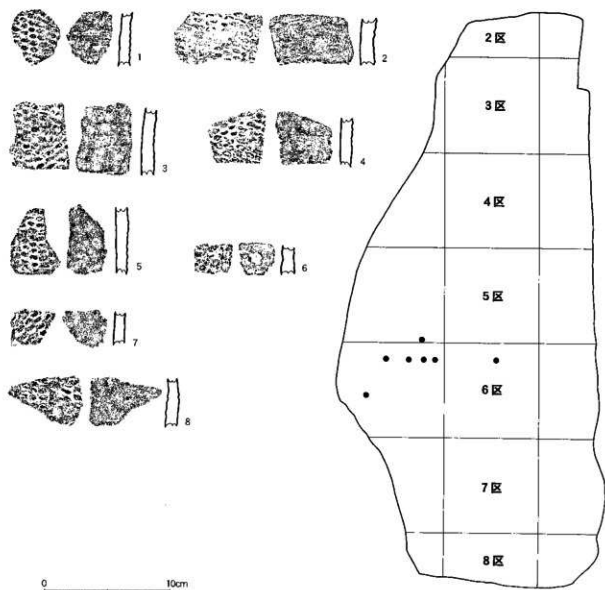
第48图 8层出土土器(5)



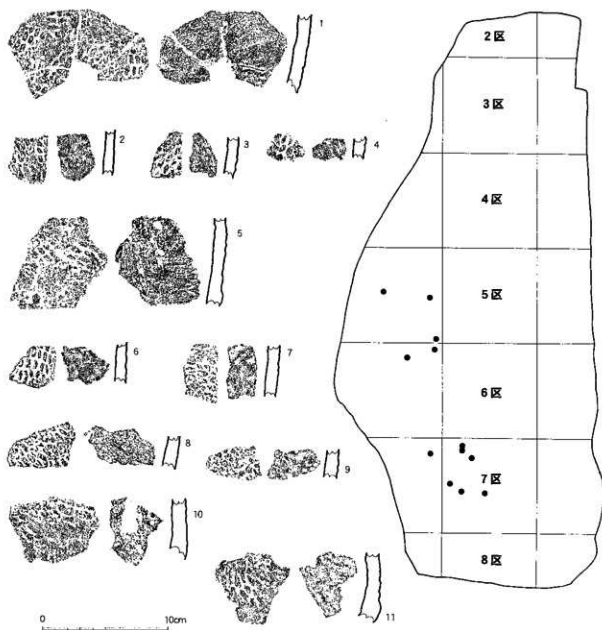
第49図 8層出土土器(6)※5は出上層不明



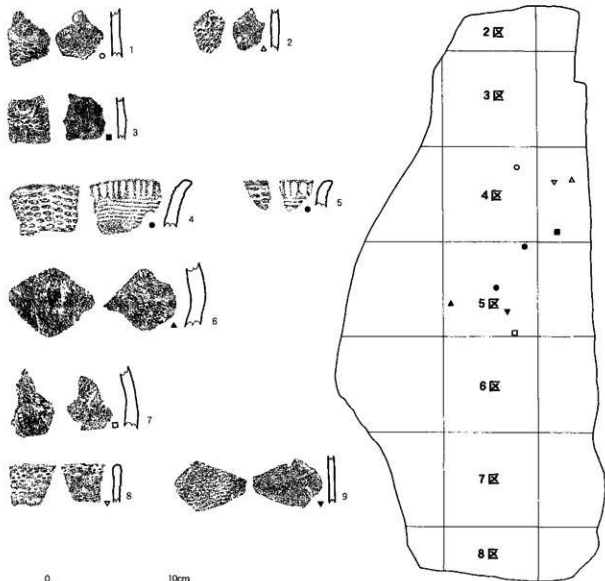
第50图 8层出土土器(7)



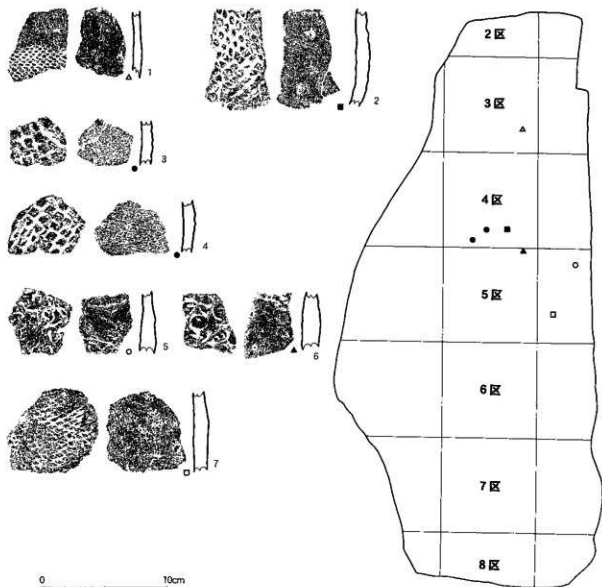
第51回 8層出土土器(8)



第52図 8層出土土器(9)

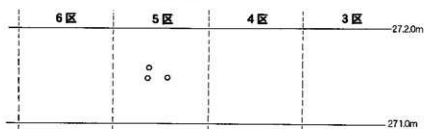


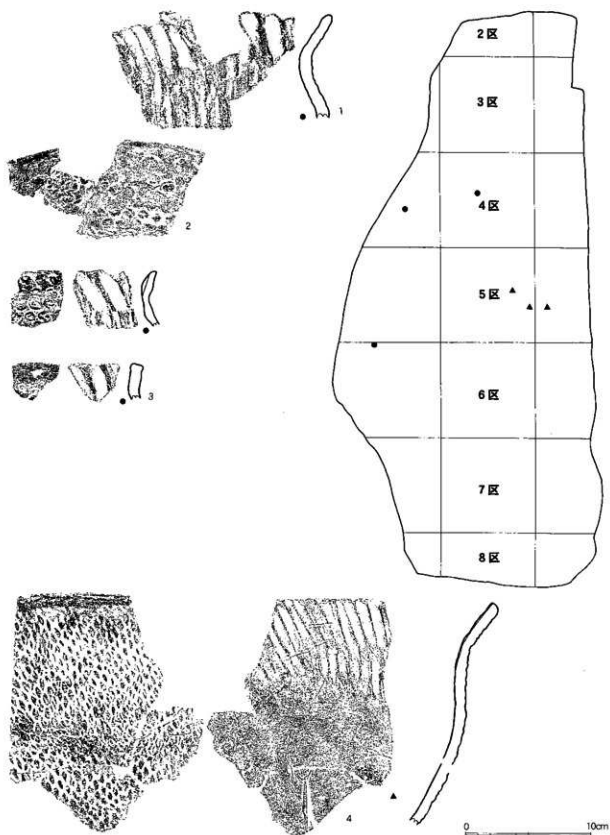
第53图 8层出土土器(10)



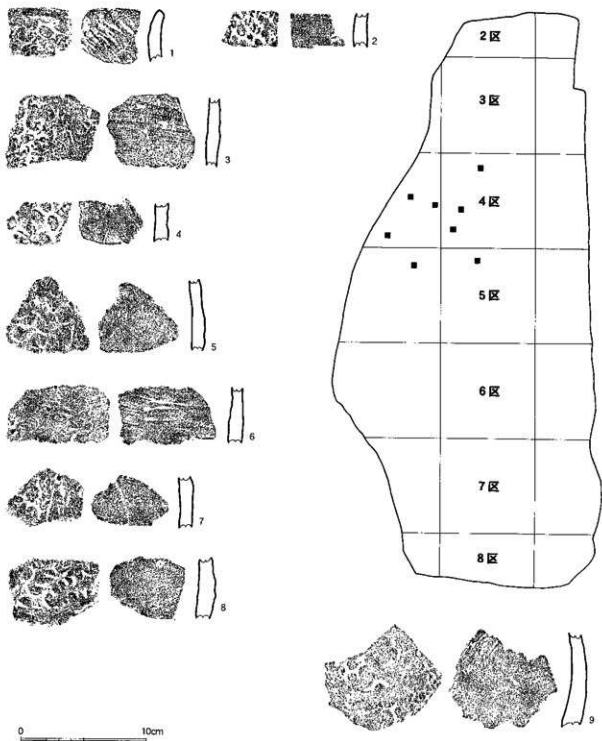
第54図 8層出土土粒(11)

第55図 4の分布図





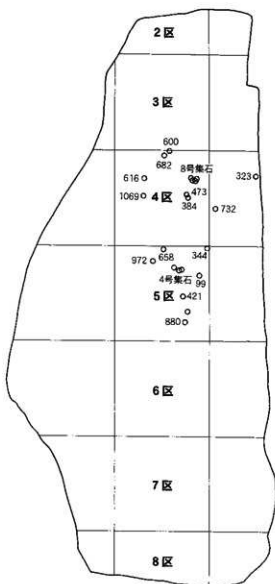
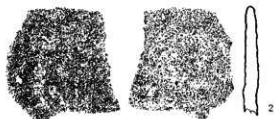
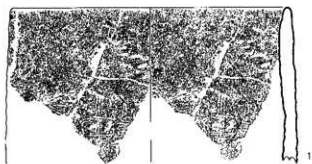
第55图 8层出土土器(12)



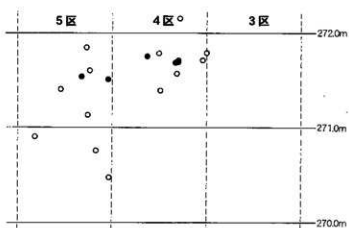
第56圖 8層出土土體(13)



第57图 8層出土土器(14)

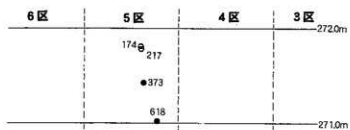
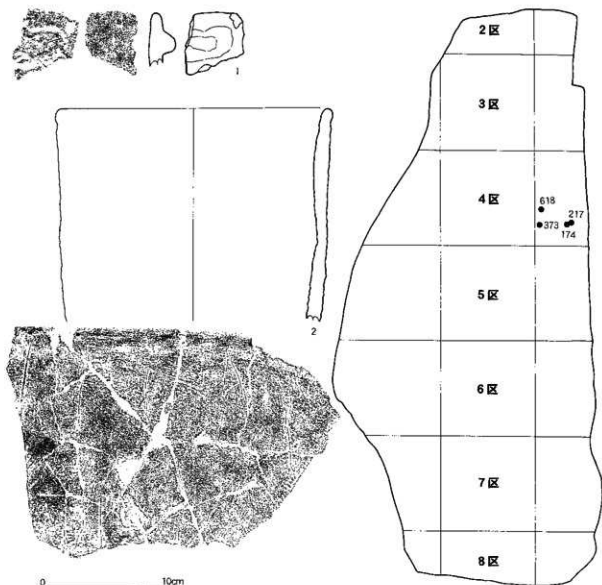


0 10cm



↑この線に近いものも左図では黒丸で示す。

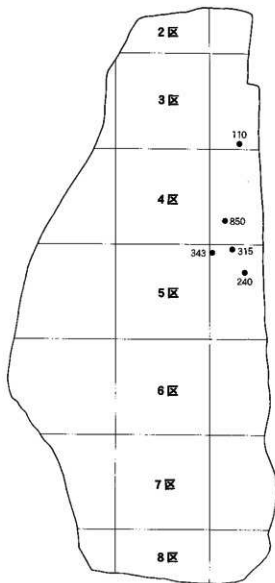
第58図 8層出土土器(15)



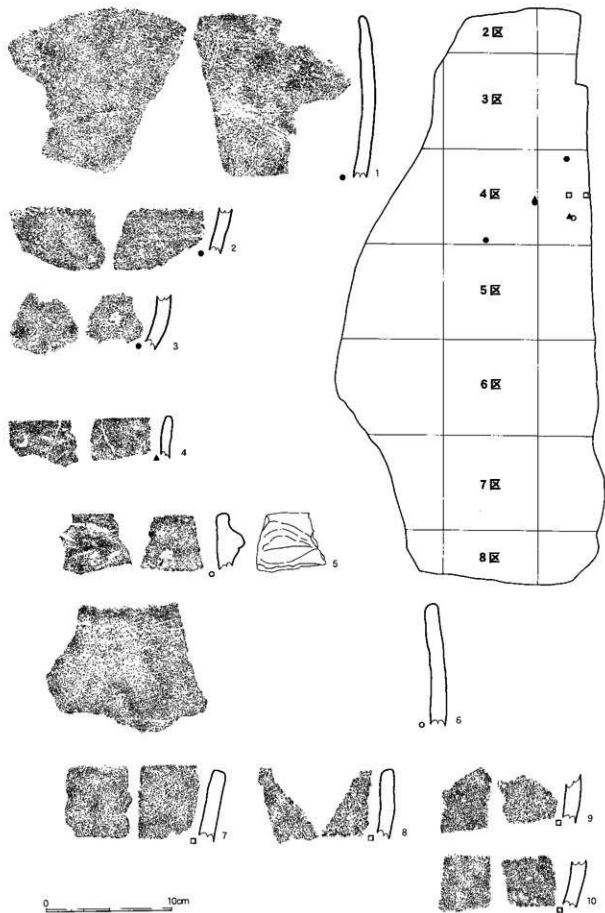
第59图 8层出土土器(16)



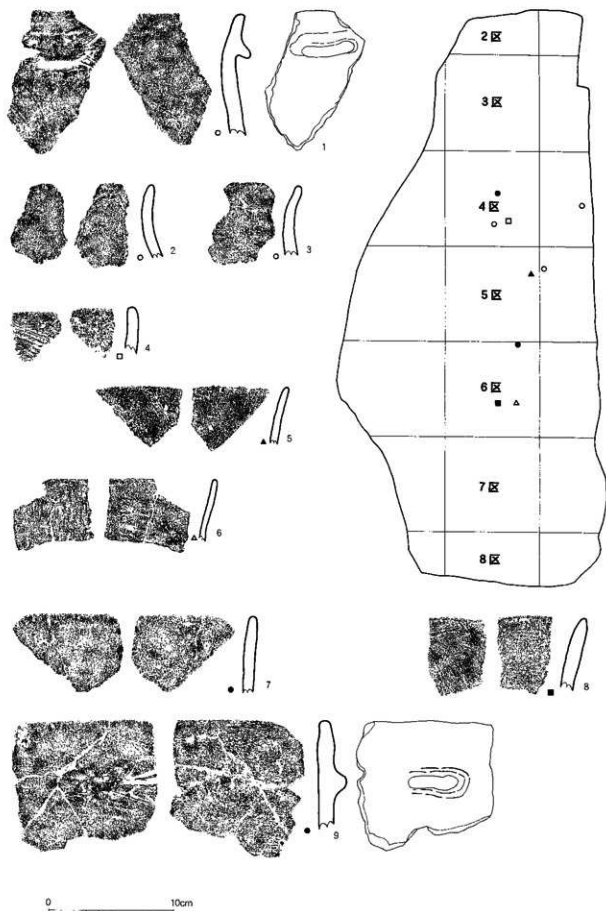
0 10cm



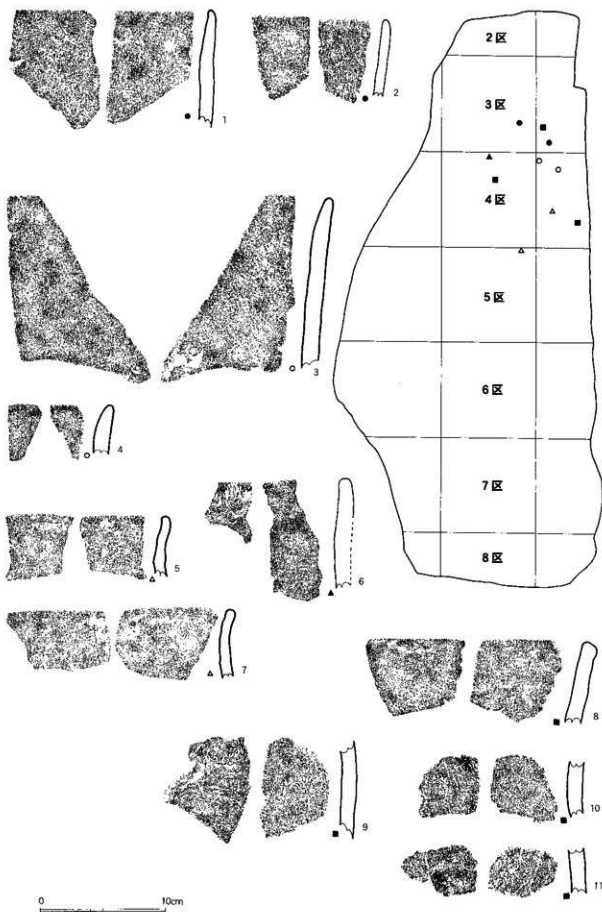
第60圖 8層出土土器(17)



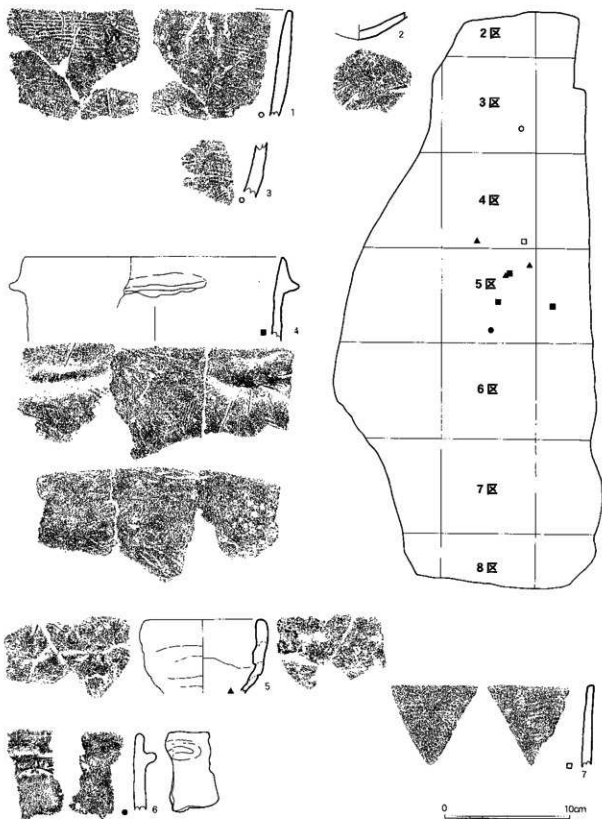
第61图 8层出土土器(18)



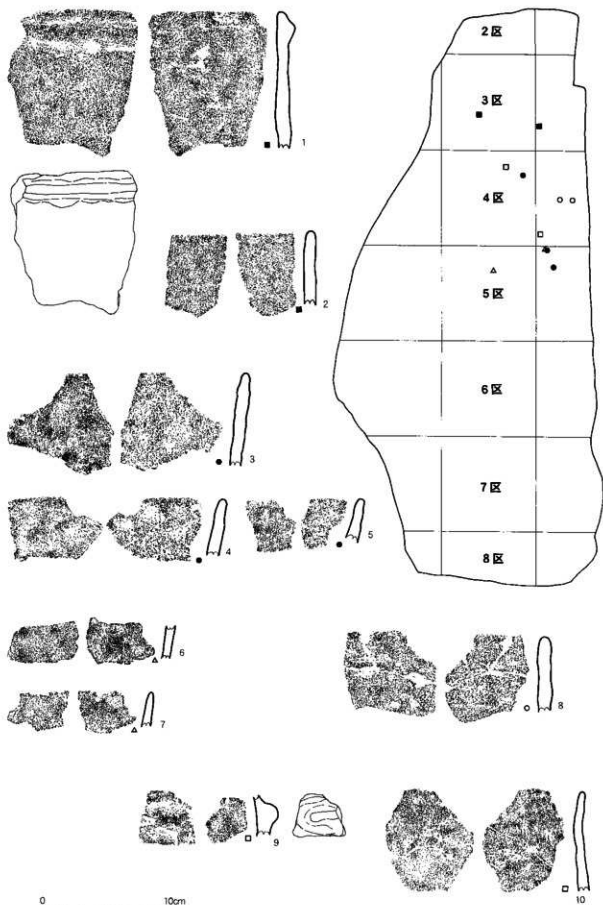
第62图 8層出土土器(19)



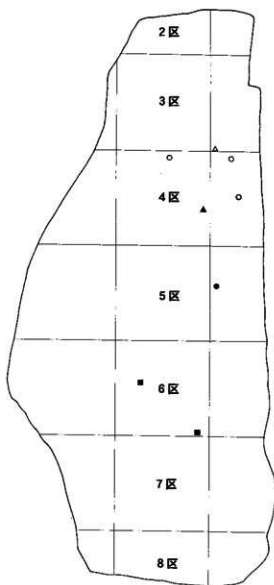
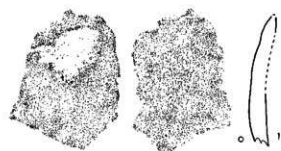
第63图 8层出土土器(20)



第64图 8层出土土器(21)

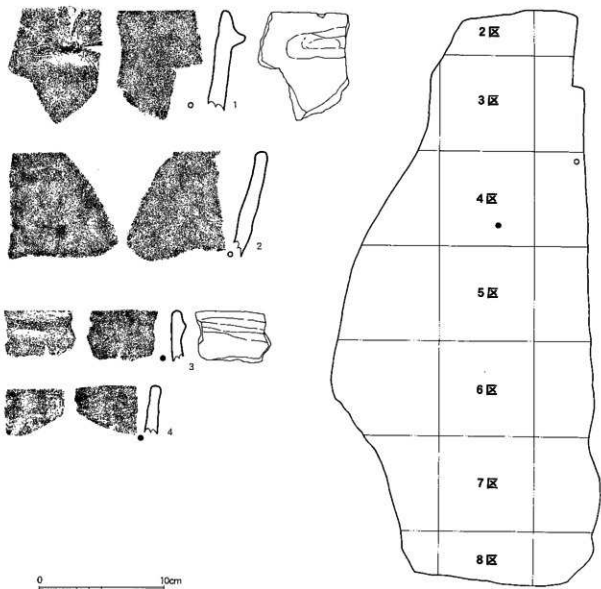


第65图 8层出土土器(22)

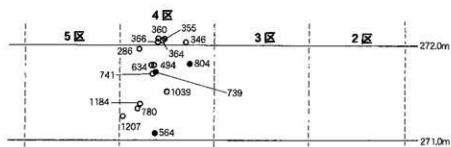
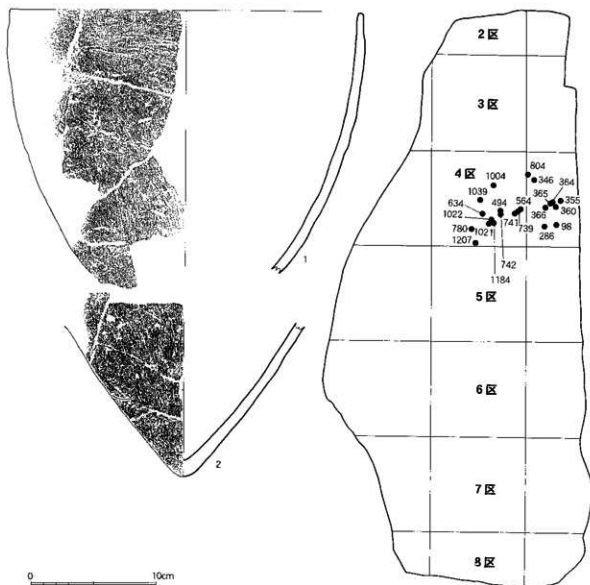


0 10cm

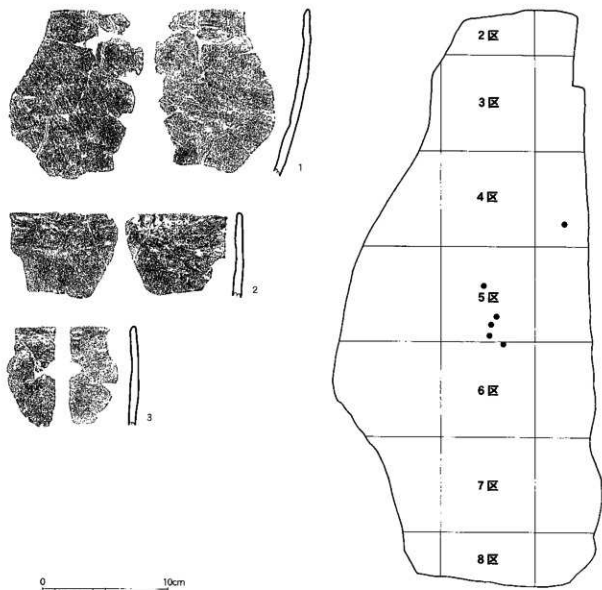
第66图 8层出土土器(23)



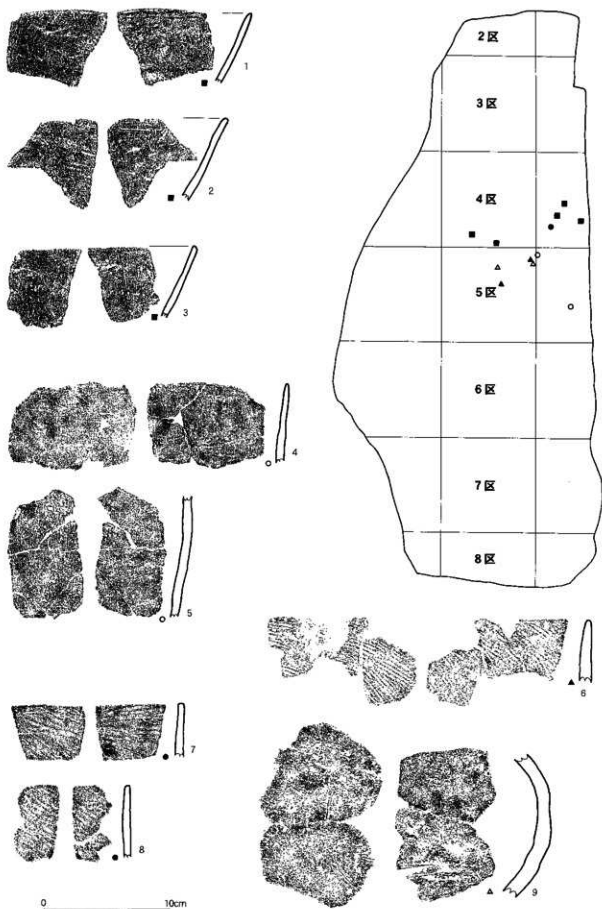
第67图 8层出土土器(24)



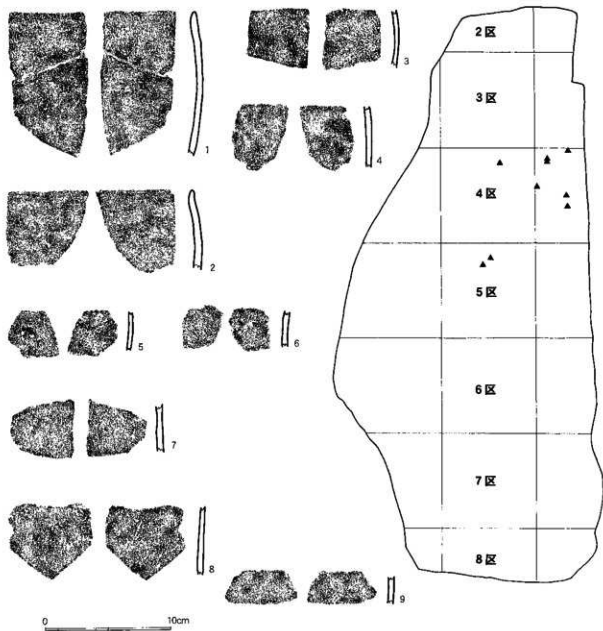
第68圖 8層出土土器(25)



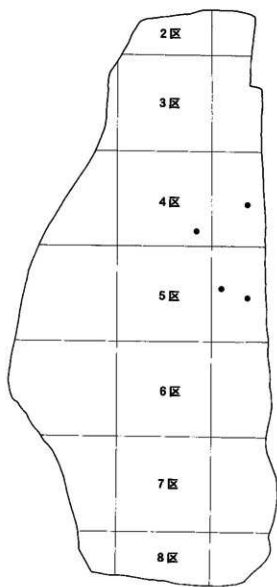
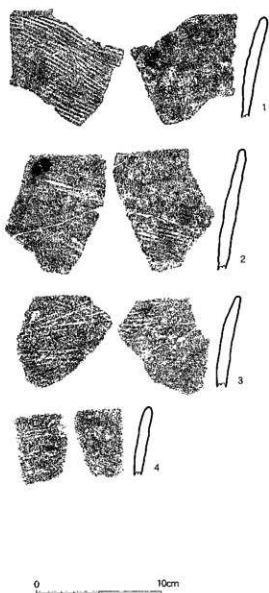
第69圖 8層出土土器(26)



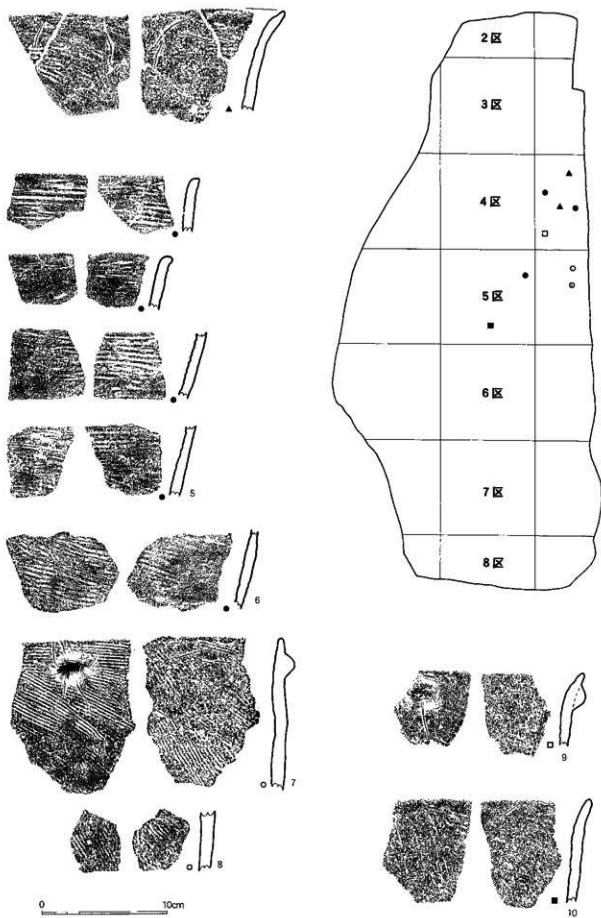
第70圖 8層出土土器(27)



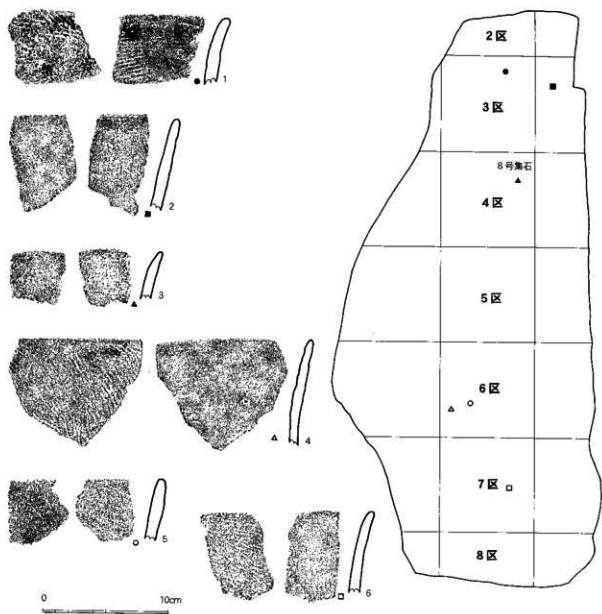
第71图 8层出土土器(28)



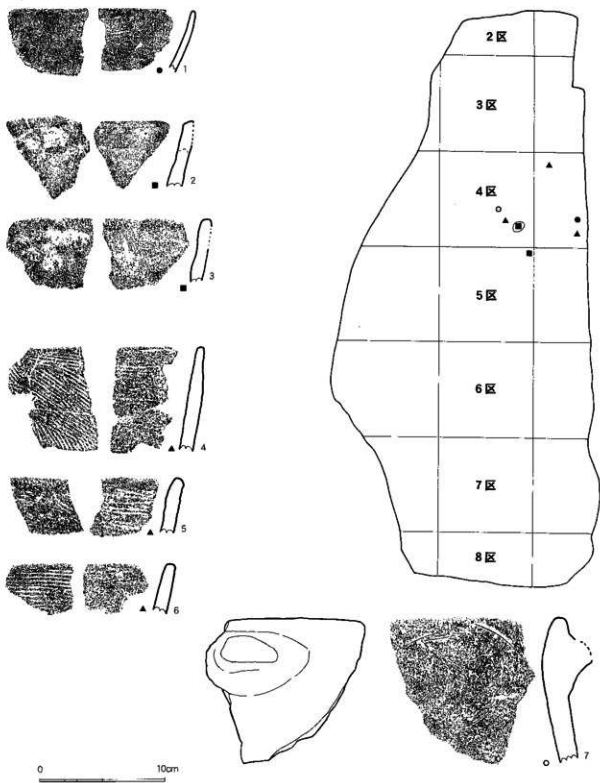
第72图 8层出土土器(29)



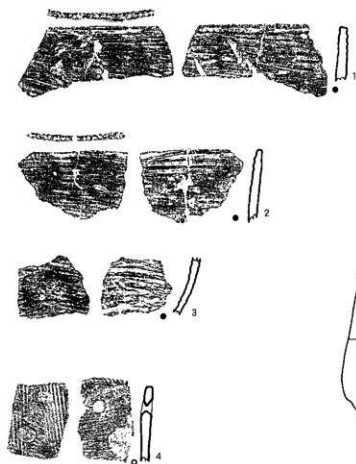
第73图 8层出土土器(30)



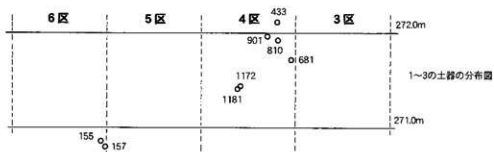
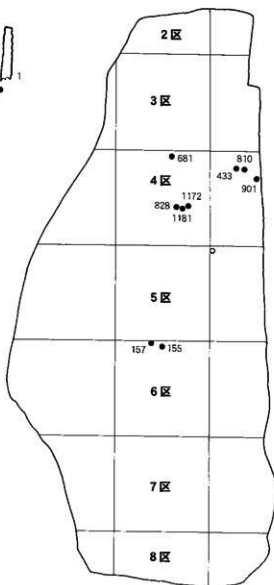
第74图 8层出土土器(31)



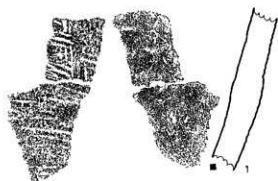
第75圖 8層出土土器(32)



0 10cm



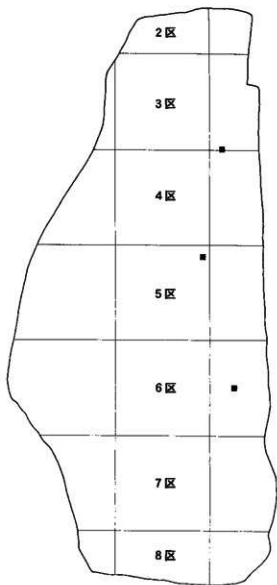
第76図 8層出土土器(33)



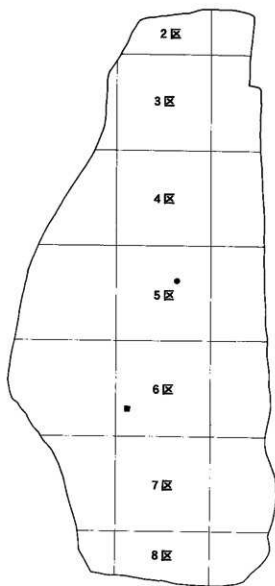
0 10cm



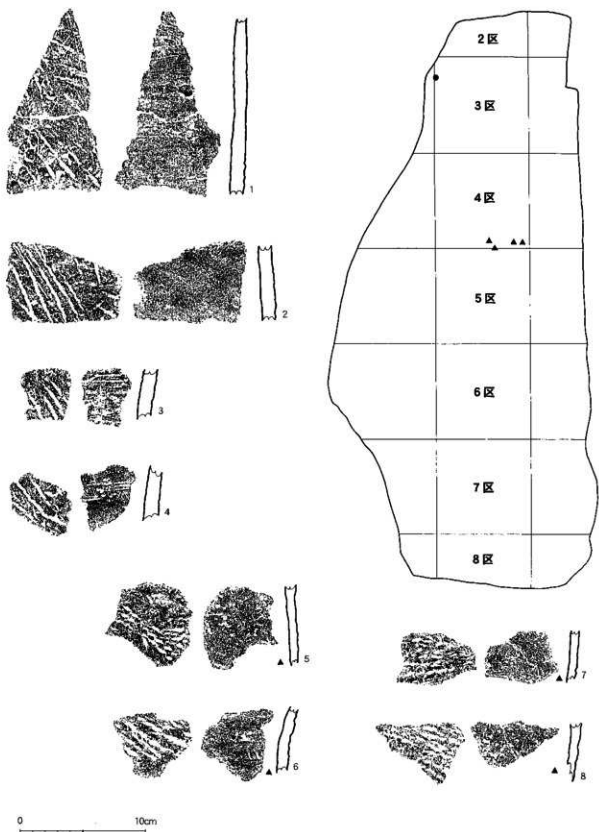
A horizontal scale bar is located below the text '0 10cm', with a vertical tick mark at the '0' end and a longer tick mark at the '10cm' end.



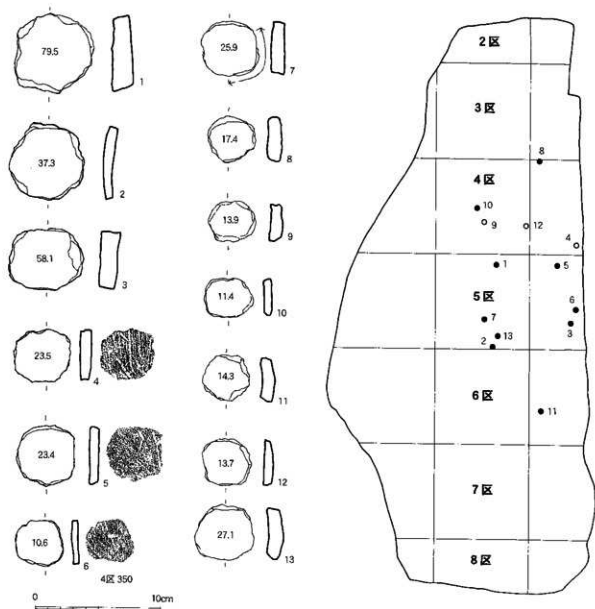
第77图 8層出土土器(34)



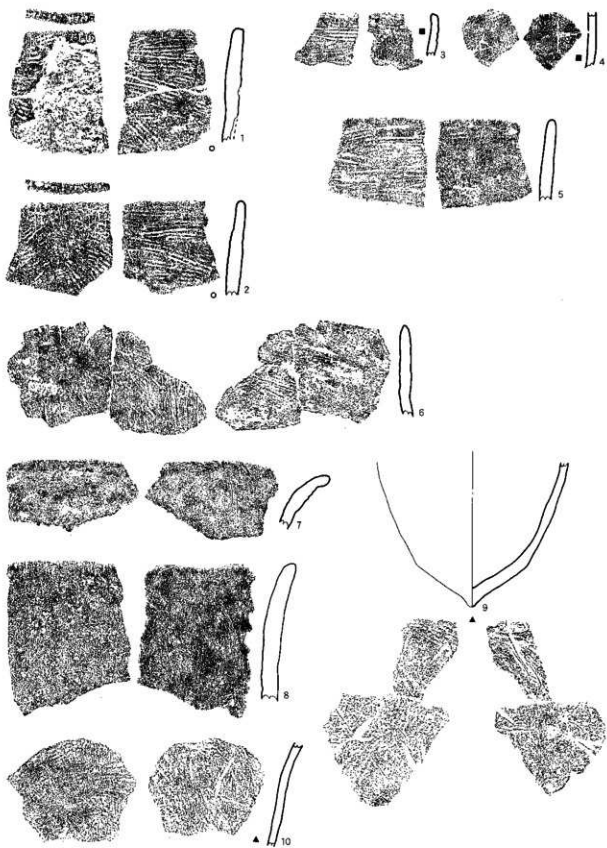
第78图 8層出土土器(35)



第79圖 8層出土土器(36)



第80图 円盤状加工土器片実測図



第81图 拨乱层·出土层不明土器实测图

2) 縄文時代の石器

(1) 石器の出土状態

黒岩遺跡の発掘調査によって、縄文時代早期の文化層から計 185 点の石器類が出土した。ここでは、文化層が、上下の 2 層に分けられることから、基本的には層毎に記述する。7 層（上層）は、押型文土器を主体とする文化層、8 層（下層）は、無文・条痕文土器を主体とする文化層であるが、その境界付近は漸移的であり、同一母岩とみられる石器が上・下別に出土する等明確に分離できない部分もある。また、南北の地形断面が南側に傾斜しており、出土状況としては、やや不安定な要素もあるが、原位置を著しく移動した形跡はみられなかった。

石器の出土範囲は、土器とほぼ重なるものであり、主として 4 区・5 区に集中する。この両区は、集石遺構が集中するところであり、生活空間の密なところであるところから当然のものとみられる。このほか、3 区・6 区・7 区でも出土しているが、4 区・5 区に比べ希薄な分布である。

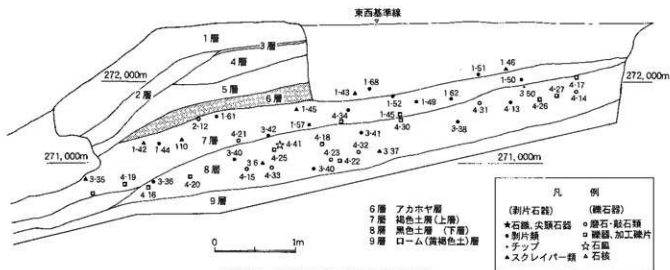
上下の文化層には、立地が斜面にあることから、石器以外の転礫が多数散布しており、これらと集石遺構、大型石器との分類に労力を費やした。これらの転礫は、主として礫岩の角礫であり、集石の石材あるいは台石等に利用されたものとみられる。

(2) 遺構に伴う石器

前出の遺構のところで少しふれているが、黒岩遺跡では集石遺構に伴うと考えられる石器が若干出土している。これは、集石の性格を考える上でも重要な資料となりうるものである。

1 号集石は、埋葬関係の配石遺構とみられ、配石の中心部の土の変色部の周辺から、黒岩遺跡では出土が少ない石鏃 2 点と尖頭状石器に近い両面加工のスクレイパー（削器）が検出された。この 3 点の石器はいずれも完形の丁寧な作りであり、副葬品の可能性が高いとみられる。4 号集石では、集石を構成する礫の中から礫器 1 個が発見された。これは、断面三角形をなす直角礫の主として一辺に両面加工を施したもので、石材は硬質の砂岩を利用している。黒岩遺跡の中では数少ない両刃礫器の一つである。4 号集石の下部遺構である 7 号集石も 1 号と同様に配石状であり、4 号集石の直下にあたる部分から 3 個の礫核石器と外周部から片刃礫器とやや大型のスクレイパー（削器）が出土している。配石の中心部の 3 個の石器は、礫器、石核状礫器と磨石である。これらはいずれも近接して、帯状施文の大型押型文土器とほぼ同一レベルで検出された。

下層の遺構である 5 号集石の中から 2 個分割された砥石が検出された。砂岩製の長さ 21.5 cm、幅 8.0 cm、厚さ 6.3 cm の分厚い磨製石器用とみられるもので、2 つに割れた後、砥石として利用されなくなり、焼石に使用されたものである。



第82図 黒岩遺跡出土石器垂直分布図

(3) 7層の石器 (第84～91図)

剥片石器類 (第84～87図)

中・小型の剥片石器類である。定型的な石器が少なく、石材はチャート、石英、ホルンフェルス、黒曜石、ガラス質安山岩等である。石材の産地は、黒曜石は佐賀県唐岳産、ガラス質安山岩は大分県姫島産、チャート・ホルンフェルスは大野川河床産、そのほかは地元産とみられる。これらの剥片石器の母材である石核の出土数はきわめて少ない。出土点数はチップまで含めて68点。

石鏝 (第84図1・2・4・5)

1、2は完形の門基式。1はチャート製の細石鏝に分類できるものである。2はサヌカイト製、4・5黒曜石製の未製品であるが4はスクレイパーに再加工された形跡がみられる。とくに1・2は1号集石に伴うものである。

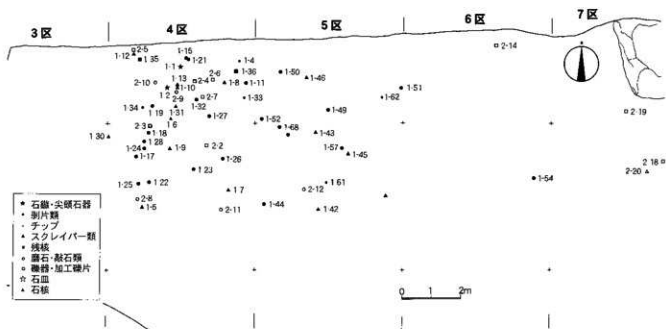
スクレイパー類 (第84図)

スクレイパー類は定形的なものは少なく、2次加工の剥片類と区別するものは容易ではない。その形態は素材の剥片の形によって大きく左右され、また素材の加工の度合いによって大きく異なるものである。

3は、1・2の石鏝とともに1号集石に伴うもので、石鏝の形態に近い精巧な両面加工の小型のスクレイパーである。とくに底辺にあたる部分は弧状に鋭いエッジとして仕上げている。6はやや縦長のチャートの剥片の両端に両面加工を施している。とくに下端部の片面は押圧剥離が著しい。7は縦長剥片の両側にわずかなリタッチ状の加工を施したもの、9はノッチ状のもの。10は1側辺に規則的な細かい剥離を施している。17は横長剥片、18は幅広剥片の一侧に一面のみに細かい加工を施している。

彫器様石器 (第84図8・16)

いずれも良質のチャートの分厚い剥片を素材としている。8は、断面部カットし、さらにその側方から斜め方向に長い剥離を施している。16は、一端に明らかにフルーティングを施そうとしたものであるが、剥離が完了していない。この二点は、いずれもの典型的な彫器とは云い難いが、彫器的用途を目的として制作されたものと考えられる。



第83図 7層出土石器分布図(No.は一覧表に対応)

2次加工剥片 (第84・86・87図)

いずれも不定型な剥片の一部にわずかに加工を施したもので加工の部位はまちまちである。第84図12・14・15・19は小型の剥片素材、第86図1・2・4～6は中型の剥片素材、第87図1～3・5は大型の剥片素材である。第86図1・2は頁岩の横長剥片に片面加工を施したものである。同じく、5・6・9は石英の剥片にわずかに加工痕をもつものである。第87図3は、火山岩の大型剥片の一端に両面加工をもつものである。5は珩岩の板状の剥片の一端にチョッパー状の加工を施している。

使用痕のある剥片 (U・F) (第84図13、第85図4・16・17、第86図7)

剥片のエッジ部分に使用によるとみられる微細な剥離がみられる剥片である。第84図13はチャートの幅広剥片の一侧辺に痕跡がみられる。第85図4は小型の縦長剥片の2ヶ所の内湾部に微細な剥離痕が認められる。第86図7はメノウ質の打面再生のためとみられる幅広い剥片であり、エッジの部分に使用痕が認められる。

石核及びコアスクレイパー (第85・87図)

第85図1・2は、ともに腰岳産黒曜石の最終的な石核(残核)である。1はさらにそれをスクレイパーとして加工したもので、この石材を有効にしようとした形跡をうかがうことができる。腰岳産黒曜石を素材とするものは、いずれも小型品のみであり、貴重な石材であったことをうかがわせる。第87図6は、ガラス質の緻密な石材を使った比較的大型の石核である。大きな剥離面2面と調整的な剥離面のほかは自然面が多くこのこされておき、剥片剥離はあまり進行していない。剥片の素材としては悪くはないものであるが、同一母材の剥片や石器は検出されていない。

表1 黒岩遺跡7層出土石器一覧表(剥片石器類)

No	器種	石材	出土層位	出土部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	図No.	備考	注記No.
1	石 塵	チャート	IV	磁土層	1.2	1.3	0.29	0.38	1-1	配石の内部、黒石塵	4-96
2	*	サヌカイト	IV	*	2.0	1.7	0.35	0.69	1-2	配石の内部	4-97
3	スクレイパー	チャート	III	3区	4.0	4.0	1.67	29.0	1-16	アカキヤ属、彫琢的加工	3-5
4	ロフ(使用痕ある剥片)	腰岳産黒曜石	IV	4区	3.25	1.65	0.98	3.78	2-3		4-65
5	スクレイパー	チャート	IV	4区	5.5	3.1	0.81	15.96	1-6	両面加工	4-110
6	2次加工剥片	ホルンフェルス	IV	4区	3.6	4.05	0.79	7.14	2-21		4-99
7	スクレイパー	*	IV	4区	5.4	2.8	1.40	18.92	3-2		4-124
8	2次加工剥片	*	IV	4区	4.8	3.3	0.91	16.77	1-13		4-4
9	*	石英	IV	4区	4.25	5.2	1.38	29.66	3-5		4-15
10	*	*	IV	4区	2.5	5.5	1.93	25.56	3-6		4-88
11	ロフ	*	IV	4区	8.85	4.9	1.55	60.88	3-9		4-100
12	スクレイパー	頁岩	IV	4区	7.1	6.6	1.70	94.83	4-2	大型の剥片石群	4-77
13	*	チャート	IV	磁土層	2.5	2.25	0.55	2.89	1-3	配石の内部、矢筈状石器に近い	4-98
14	剥片	ホルンフェルス	IV	3区	5.9	3.7	1.25	25.03	3-3	図11-10と同一母材、両面打面	3-1
15	*	チャート	IV	4区	3.60	2.45	0.70	7.3	2-14		4P-459
16	*	サヌカイト	IV	4区	2.70	2.20	0.45	2.0	2-10		4B-IV
17	*	チャート	IV	4区	2.4	2.7	0.71	3.69	2-11		4-18
18	*	*	IV	4区	2.1	2.5	0.38	2.29	2-12		4-106
19	2次加工剥片	*	IV	4区	2.1	3.4	0.8	7.70	1-19	一側辺に加工	4-81
20	剥片	サヌカイト	IV	4区	2.65	1.90	0.20	1.0	2-8		4A-IV
21	*	チャート	IV	4区	3.6	2.75	0.90	7.37	3-22		4-68
22	*	*	IV	4区	2.6	3.2	0.91	9.61	2-23		4-107
23	*	西北九段産黒曜石	IV	4区	1.95	3.55	0.69	3.17	2-6	在世帯市東浜面か針尾産	4-119
24	ロフ	ホルンフェルス	IV	4区	3.7	1.9	0.40	1.55	2-4	縦長剥片	5-84
25	2次加工剥片	*	IV	4区	3.5	5.1	1.19	12.5	2-24	先端部に加工	4-109
26	剥片	火山岩	IV	4区	3.25	2.95	0.65	4.8	2-19		4-120
27	*	ホルンフェルス	IV	4区	3.50	2.80	0.90	6.1	2-9	縦広剥片	4-37
28	*	*	IV	4区	4.8	6.05	1.61	70.0	3-10		4-83
29	*	*	IV	4区	5.5	5.7	1.0	31.70	3-8		4-29
30	2次加工剥片	頁岩	IV	4区	6.0	3.7	1.4	24.7	3-1	片面、2側面に加工	4-19
31	*	サヌカイト質岩	IV	4区	4.6	3.95	1.47	23.74	2-20	片石、1側面に加工	4-5
32	剥片	頁岩	IV	4区	7.90	3.90	1.55	68.3	4-1	幅広剥片	4-70
33	チップ	腰岳産黒曜石	IV	4区	1.45	0.90	0.25	0.1			4-90
34	*	*	IV	4区	1.35	1.05	0.20	0.1			4-50

No	器種	石材	出土層位	出土部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	図No.	備考	注記No.
35	石核	熊本産燧石	IV	4区	2.15	1.6	0.7	2.60	2-1	2次加工あり(残核)	4-10
36	*	*	IV	4区	3.5	1.9	1.5	6.98	2-2		4-9
37	石軸末製品	*	-	埴土	2.35	1.85	0.55	2.2	1-4	スクレイパーとして使用か	5-8上
38	*	*	IV	7区	2.10	1.90	0.50	2.10	1-6		7区-IV
39	スクレイパー	頁岩	IV	5区	4.90	2.75	0.80	11.1	1-17	土として1個辺に片置加工	8区-IV
40	2次加工製片	熊本産燧石	IV	8区	3.15	1.96	1.30	6.5	1-12		6-110
41	*	チャート	IV	5区	5.40	3.20	1.60	26.3	1-8	先端部に集中加工。彫磨様	5-9残片
42	スクレイパー	ホルンフェルス	IV	5区	3.10	3.05	1.10	8.5	1-9	ノッチ加工	5-108
43	*	ガラス質火山岩	IV	5区	3.2	2.36	1.0	6.47	1-14	熊本産の石材、一側辺に片置加工	5-13
44	u-F	燧石	IV	5区	5.95	5.25	1.55	41.81	3-7	打面再生剥片	5-113
45	スクレイパー	ホルンフェルス	IV	8区	5.6	2.2	0.91	10.48	1-7	石刃部の縁部側の両側面に2次加工	6-83
46	2次加工製片	蛇紋岩	IV	5区	4.00	4.70	0.65	15.3	3-4	磨製石片の破片を再利用	5-6
47	剥片	ササカイト	IV	8区	3.15	1.60	0.60	2.4	2-6	小規製片	5-9残片
48	*	燧石	IV	5区	2.90	1.75	0.60	2.3	1-15	小規製か(阿蘇系)	8区-IV
49	2次加工製片	ササカイト質	IV	5区	7.6	9.2	2.8	184.94	4-3	大規製破片の一端に両面加工	6-61
50	u-F	チャート	IV	5区	4.60	3.15	0.95	8.2	2-17		5-44
51	*	*	IV	5区	2.60	2.50	1.15	5.8	2-16	小型製片	6-90
52	剥片	熊本産燧石	IV	5区	2.30	1.60	0.48	1.0	2-7	長辺に加工	5-41
53	スクレイパー	ホルンフェルス	-	埴土	4.9	4.2	1.08	16.09	1-18		7区埴土
54	剥片	ササカイト	IV	6区	2.70	2.30	0.60	2.1	2-15		6-15
56	スクレイパー	*	IV	7区	3.80	3.25	0.50	4.5	1-10	一側辺に前端的な加工	7区埴土
58	*	ホルンフェルス	IV	7号集石	7.30	4.75	2.55	65.2	1-11	大規の縁部側の縁部部に細かい2次加工	5区残片
67	*	チャート	IV	5区							6-106
68	チップ	ガラス質火山岩	IV	5区							5区-IV
59	*	チャート	IV	5区							8区-IV
60	*	*	IV	5区							8区-IV
61	*	*	IV	5区							5-88
62	*	熊本産燧石	IV	5区							5-48
63	*	チャート	IV	5区							6-105
64	*	ホルンフェルス	II	2区	3.85	2.95	0.85	1.4	2-18		2区残片
65	*	ガラス質火山岩	IV	5区							8区-IV
66	剥片	熊本産燧石	IV	7号集石							5-7号集石
67	チップ	チャート	IV	7号集石							5-7号集石
68	剥片	*	IV	5区	1.65	1.90	0.45	1.6	2-13		5-11

小 結

7層の剥片石器類は、石核をはじめ定型的な石器は少ない。石核も2点ともに1号集石に伴う副葬品とみられるところから特殊な出土例とみられる。ここでは、遠距離の佐賀県腰岳産の黒曜石が目立つのに対し、熊本産黒曜石は1点も認められなかった。県南部における縄文時代早期段階でのこの黒曜石の需要の小ささを示すものである。なお、1点であるが、西北九州産と見られる黒曜石の剥片が1点(85-6)出土しているが、これは、腰岳産のものともたらされた可能性が高い。

これに比べると比較的近い大野川流域から搬入されたとみられるチャート・ホルンフェルスの素材としての剥片は大きい。とくにチャートは良質のものを選択的に入手していたとみられる。石英製のものも数点みられるがこれは、佐賀県半島からの搬入というよりは地元の礫岩中の石英礫を母材とするものとみられる。いずれにしても、剥片石器の素材については、他の遺跡にみられない多様性をもつもので、その入手については、その立地からみても相当困難を伴ったものとみられる。

礫 石 器 (第88～91図)

黒岩遺跡では、礫もしくは、半礫礫を素材とした礫石器が多数出土している。ここでもその形態は、素材の礫の形状によって左右され、一定していない。むしろここでは、素材角礫や半球礫あるいは節理にそって板状をなす礫を巧みに利用した多様な形の礫石器が特徴として扱えられる。こうした状況は、これまで他の遺跡ではほとんどみられなかった様相である。石材については前述したように、在地の礫岩から分離された河床の転礫を多く利用していることは間違いなく、これまた多様である。その種類は、ホルンフェルス・砂岩・珩岩・安山岩・流紋岩・花崗片麻岩等である。

片刃・両刃礫器 (第88・89・91図)

片刃礫器としては、88図1・2・5、89図1・3等がある。88図1は板状の安山岩礫に大きく剥離を加工したものである。88図2は扁平な礫岩の主とし片側に加工を集中させている。88図5はやや小さい角礫の一端に加工を施している。89図3はやり角礫のうすく内湾した部分に片面加工を施している。両刃礫器には、88図3、89図2・6等がある。89図2は前述したとおりである。88図3と89図6はいずれも大型礫であるが、断面菱形の前者の加工は顕著ではない。

88図4・6、89図1・5、91図1・4は、半截礫の一端に加工を施した礫器である。素材となった半截礫は、意図的に打ち割ったものもあるが、大半は、転礫の過程で半截礫状態あるいは大きな礫片となったものであり、自然面の風化の度合いが異なる。いずれもその鋭角となった一端に最少限の加工を施したもので、その形態と石材は多様である。その中で89図1と91図1は、花崗岩質の扁平な礫の一端に片面加工を施し、側辺部に調整加工痕を持つ特徴的なものである。こうした特殊な礫の利用方法は、他の遺跡であまり例がなく、黒岩遺跡の石器文化の特徴といえる。

磨石・敲石 (第90図1～5)

いずれも円礫を利用したもので、敲石および磨石・敲石兼用の礫器である。1は短径部のほぼ全周を磨面とし、両端部に敲打痕をのこす。2・3・5は敲石として使用されており、いずれも欠損している。4は大型の硬質の石材を素材とするもので、両面と一側面を磨面とし、敲石としても兼用したためか、大きな剥離痕がのこされている。

石皿 (第90図6)

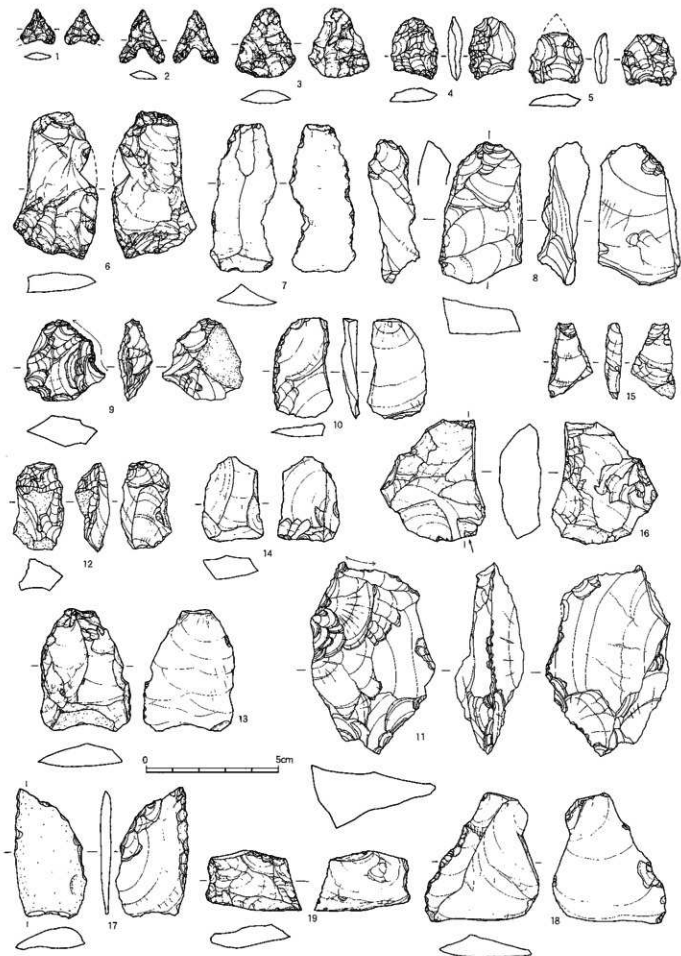
扁平な大型礫の片面を磨面としたものであるが、磨面は顕著ではない。あるいは台石兼用として利用されたものとみられる。一方が欠けた状態であるが、意図的に打ち割った後に使用した形跡がみられる。

槌石 (ハンマーストーン、第89図4)

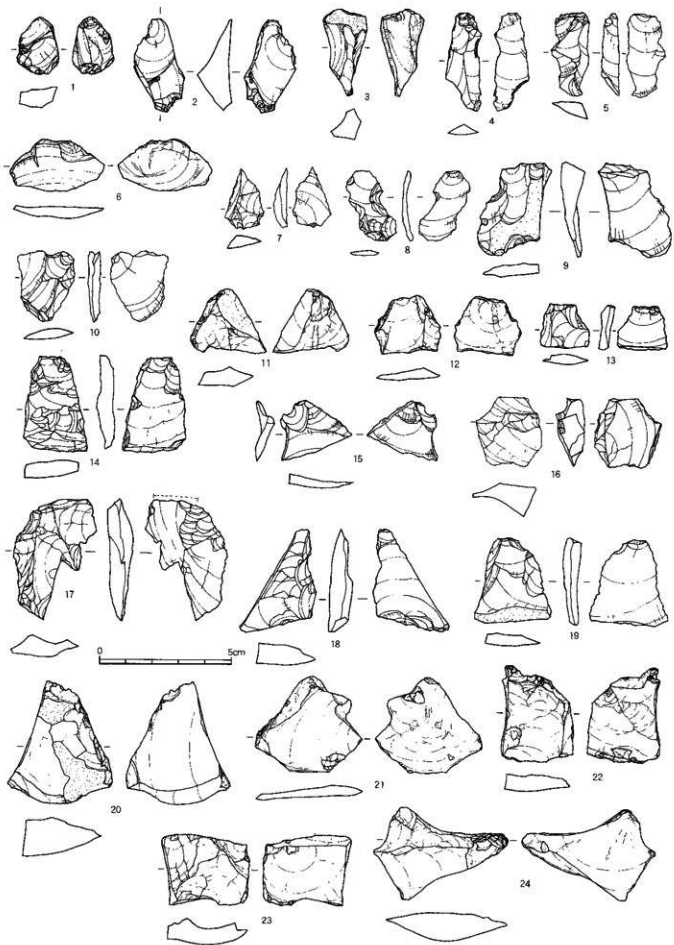
玢岩の角礫の後の部分と一端に敲打による剥離痕をのこすもので、ハンマーストーンとして使用されたとみられる。その用途は主として石器の製作・加工用とみられる。

表2 黒岩遺跡7層出土石器一覧表(礫器類)

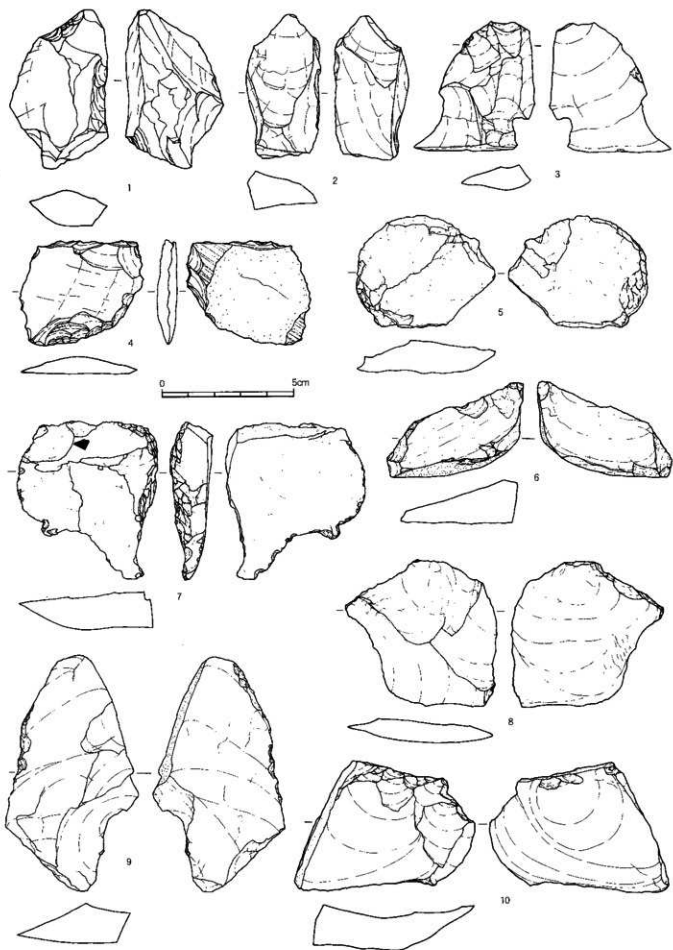
No	種類	石材	出土層位	出土部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	図No	備考	注記No
1	磨石	ホルンフェルス	IV	3区	10.1	5.8	6.25	487	6-6	加工半截礫	3区-IV
2	*	砂岩	IV	4区	12.9	9.9	3.8	653.0	5-3	角礫の一端に片面加工	4-61
3	*	磨石	IV	4区	8.3	5.4	4.18	244	6-4	板状の半截礫に敲打の跡。ハンマーストーンか	4-104
4	*	砂岩	IV	4区	6.1	4.6	4.95	243	6-6	加工半截礫	4-6
5	*	IV	IV	4区	7.8	6.6	3.65	255.4	5-5	角礫の両端に加工	4-78
6	*	礫石	IV	4区	15.0	12.5	4.91	890	8-2	大型の礫片の一部に片面加工	4-89
7	*	安山岩	IV	4区	17.7	8.2	3.15	358	5-1	板状礫の一端に片面加工	4-47
8	磨石・敲石	磨石	IV	4区	9.8	6.94	6.68	650	7-1	円礫のほぼ全周を磨面	4-114
9	磨石	磨石	IV	4区	10.9	6.6	6.8	672.4	7-5	2ヶ所に敲打痕	4-87
10	磨石	砂岩	IV	4区	10.9	9.43	7.0	880	7-4	両面に磨面。敲打痕あり	4-37
11	敲石	安山岩	IV	4区	10.55	8.3	5.4	506	7-3	一端の中央部に凹みあり。破損	4-122
12	*	砂岩	IV	5区	7.9	5.62	5.1	277	7-2	破損	5-81
13	磨石	花崗岩	II	5区	12.0	6.9	3.9	403	6-1	半截礫の一部を刃部とする	6-93
14	2次加工板状礫片	磨石	IV	6区	9.25	7.45	3.3	285	4-5	半截礫の厚手の削りの一端を刃部に加工	6-9
15	磨石	砂岩	IV	4母集石	10.6	6.4	3.5	240.2	6-2	部分的に片面加工と両面加工	4母集石-23
16	*	磨石	II	7区	8.45	5.2	2.88	94.07	4-4	角礫の一端に加工	7-93
17	2次加工礫片	砂岩	II	7区	9.4	7.7	3.71	269	5-4	片面加工	7-93
18	磨石	砂岩	IV	7区	12.6	8.4	4.71	506	6-3	角礫の一端を刃部加工	7-9
19	*	IV	IV	7区	11.4	11.22	5.7	758	6-6		7-6
20	石鏡	砂岩	IV	7区	10.1	9.05	5.1	620	4-6	磨石・磨面の石材	7-8
21	石皿	安山岩	IV	6区	14.1	12.7	6.43	2700	7-6	片側を使用のみ。石皿としては片側。破損	6-3
22	2次加工礫片	花崗岩片	V	7母集石	15.2	10.3	4.6	761.9	8-1	片刃礫器か	5-12
23	磨石	砂岩	V	*	9.3	7.7	5.8	639.5	8-2		5-16
24	石杖?	砂岩	V	*	9.2	9.2	6.9	653.6	8-3		5-20
25	磨石	砂岩	V	*	11.6	10.3	7.0	1089.4	8-4		5-29



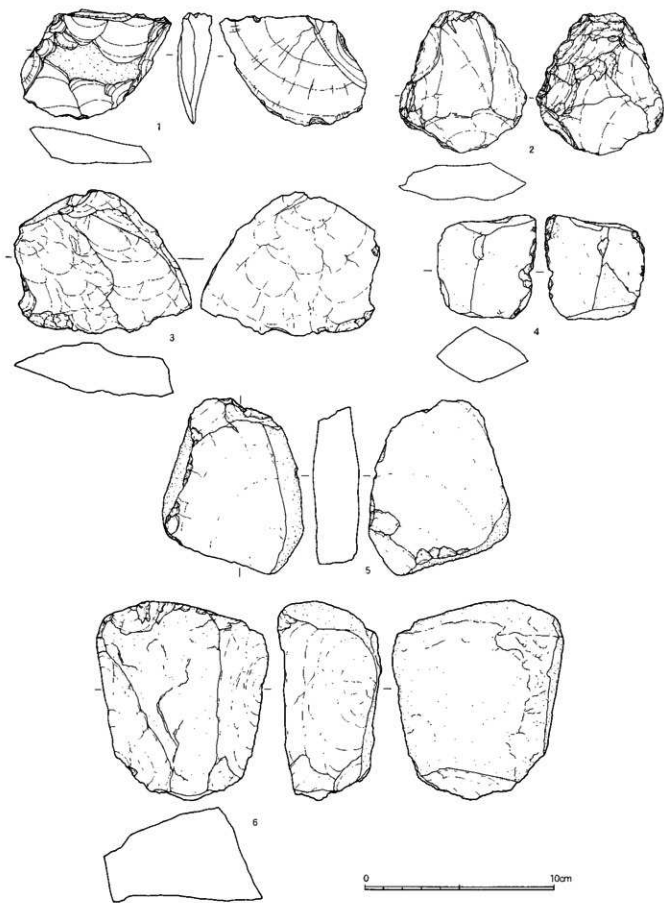
第84図 7層出土剥片石器実測図(その1)



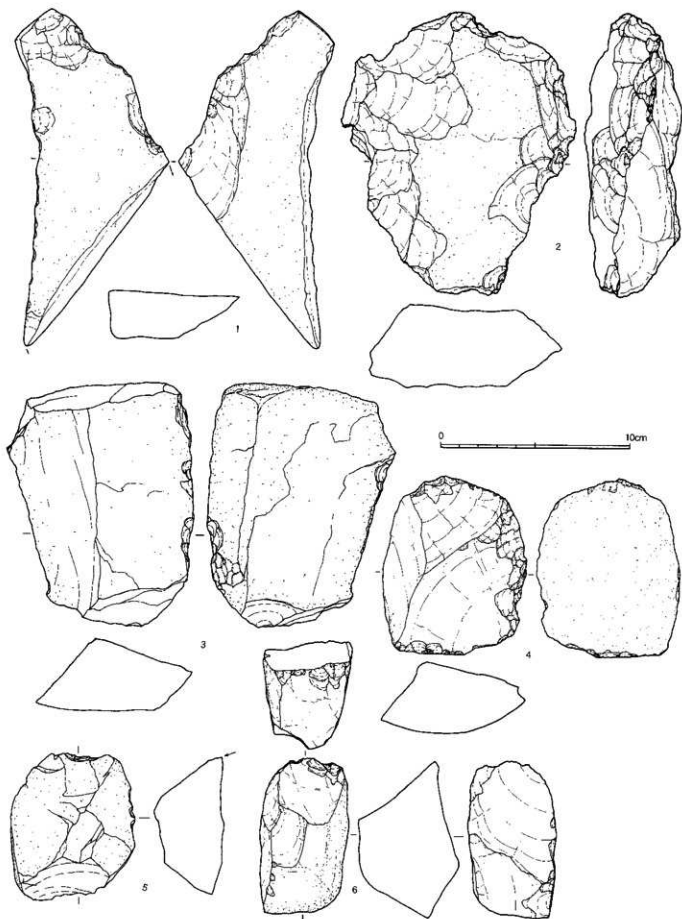
第85図 7層出土剥片石器実測図(その2)



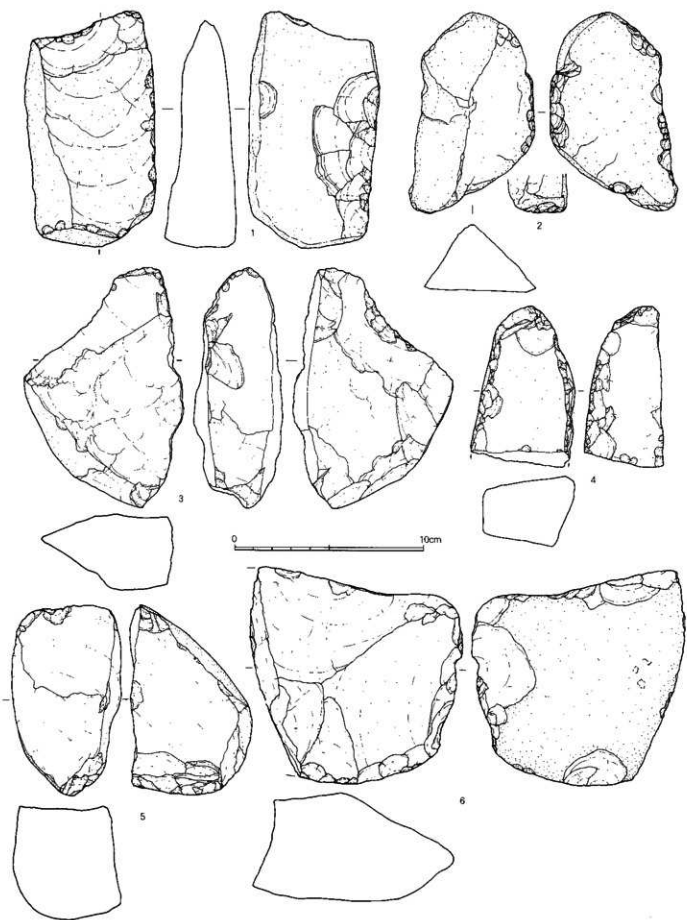
第86図 7層出土剥片石器(その3)



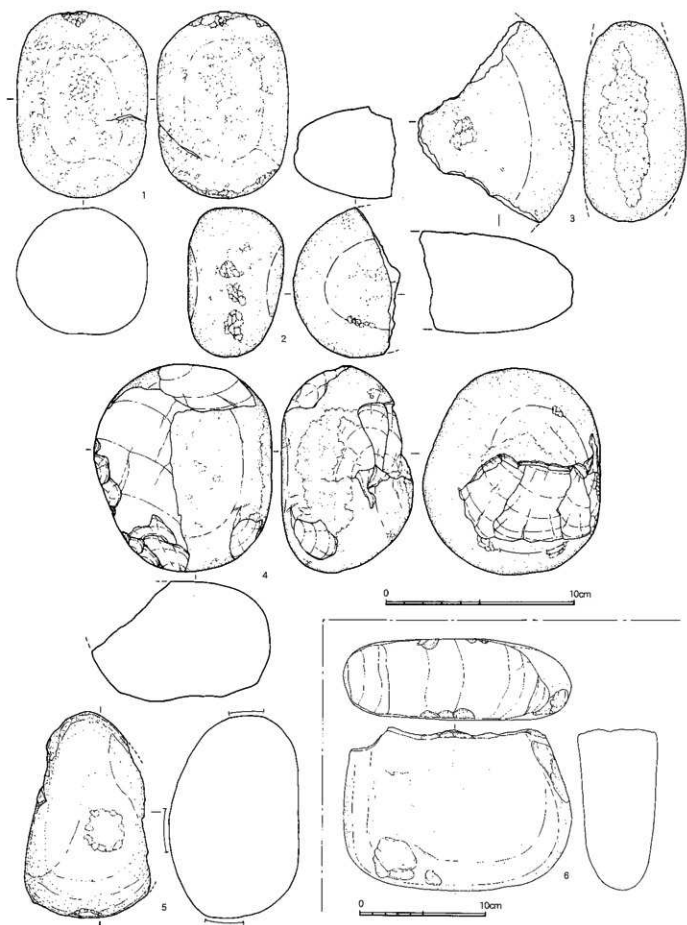
第87图 7层出土大型剥片石器·石核实测图



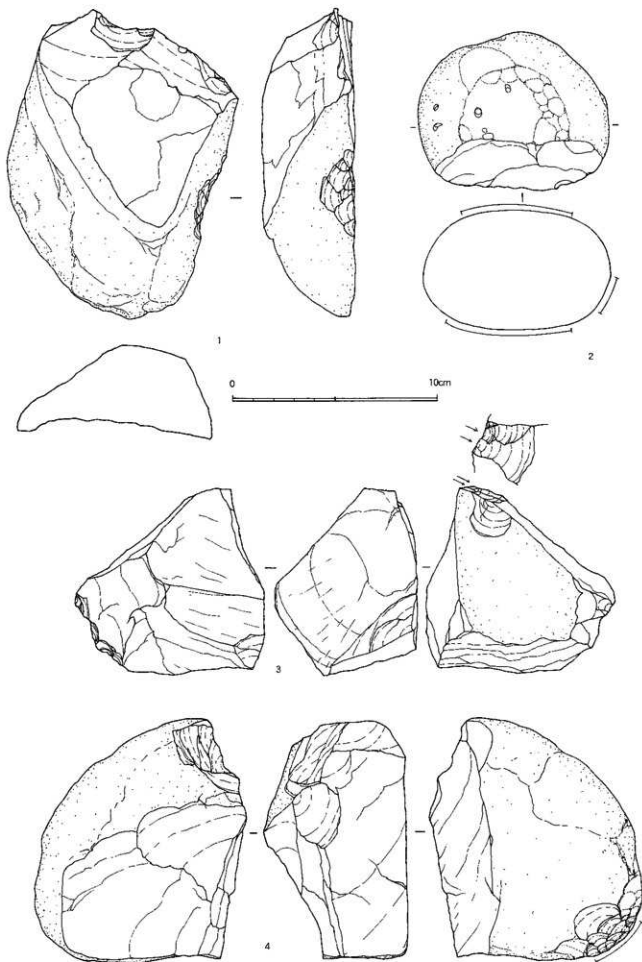
第88図 7層出土石器実測図(その1)



第89図 7層出土燧石実測図(その2)



第90圖 7層出土磨石・石皿類実測図



第91図 7号集石に伴う礫石器実測図

(4) 8層の石器 (第93～100図)

剥片石器類 (第93～95図)

下層出土の剥片石器はチップも含めて50点を数える。上層と同様に定形的な石器が少なく、石材も多様である。石材はチャートが約半数近くあり、黒曜石は姫島産黒曜石が1点みられるほかは、腰岳産黒曜石が上層と同様に主として使用されている。器種は、石鏃、尖頭状石器、異形石器、スクレイパー類・彫器・椀石器・クサビ状石器・使用痕のある剥片(UF)等であり、さらにそれらの母材である石核である。

石鏃・尖頭状石器 (第93図1・3)

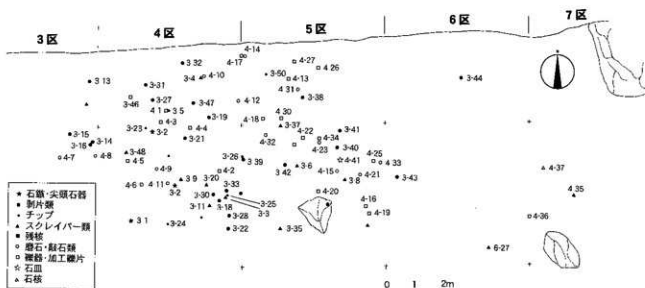
石鏃・尖頭状石器ともに各1点出土である。1は腰岳産の良質の黒曜石を使用した小型の石鏃である。先端部を石錐状にすばめた加工に仕上げている。あるいは、石錐に転用した可能性もある。2はチャート製尖頭状石器、全面両面加工によって仕上げている。

異形石器 (第93図2)

腰岳産の良質の黒曜石による十字形の小型石器である。両面ともにていねいな加工であり、挟入部は大きな剥離のままとまっている。小型の挟入石器(Concave scraper)に分類できるものとみられる。

スクレイパー類 (第93・94・95図)

スクレイパー類は、素材の形状・加工の度合いによってその形態が多様であり、2次加工の剥片と明確に分類できないものが多い。その中で、93図13は、幅広の縦長のチャートの剥片のほぼ全周に加工を施した典型的な削器である。打面を少し残したままで、全体尖頭器状に仕上げられており、自然面をのこす一側片は調整のために片面加工を施している。主要な刃部となるもう一つの側辺は、入念な両面加工を行っており、この部分には使用による後の摩耗痕がよく観察される。おそらく、それは、刃部と平行する横方向の頻度の高い使用、いわゆる擦り切る行為によるものと推定される。93図10は、断面三角形の石刃状のホルンフェルスの縦長剥片の両側面に細かい加工を施したもので、打面部を欠いているが、末端の近い部分の両側にノッチを加えている。この部分に



第92図 8層出土石器分布図(Noは一覧表に対応)

表3 黒岩遺跡8層出土石器一覧表(剥片石器類)

No	器種	石材	出土層位	出土部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	図No	備考	注記No.
1	石 槌	黒岩産燧石	V	4区	1.3	1.1	0.3	0.44	9-1		4-181
2	尖頭状石器	チャート	V	4区	2.5	2.2	0.65	3.30	9-3		4-126
3	2次加工剥片	ガラス質安山岩	V	4区	2.3	1.7	0.7	2.32	9-4		4-149
4	スクレイパー	石炭層岩	V	4区	5.0	4.3	2.1	47.2	10-9		4-215
5	*	砂岩	V	4区	10.0	6.5	3.30	253	11-1	硬質の緻密な砂岩の剥片を片面加工	4-143
6	*	ホルンフェルス	V	6区	6.2	1.5	0.85	9.43	9-10	石刃の側面に細かい加工、両面にノッチ	6-187
7	*	姫島産燧石	V	6区	2.9	1.3	0.32	1.24	9-5	片面加工、石製の破損品か	6-27
8	*	頁岩	V	5区	5.4	3.7	1.54	29.80	10-18	一面加工に細かい加工	5-166
9	*	チャート	V	4区	7.00	3.35	0.90	22.8	9-13	断面、一部に使用痕あり	4-190
10	黒岩産燧石	チャート	V	4区	1.9	1.7	0.4	1.01	9-2	1区所に加工	4-168
11	スクレイパー	チャート	V	4区	3.8	4.75	1.18	22.82	9-11	断面、細かい加工は片面に集中	4-175
12	*	ホルンフェルス	V	4区	4.1	3.8	1.70	25.26	9-12	8片裏石に伴う	4-28燧石
13	剥片	砂化木炭岩	V	3区	3.70	2.35	1.35	10.3	9-8	一端に片面加工	3-28
14	*	頁岩	V	3区							3-1
15	2次加工剥片	チャート	V	3区	4.05	2.80	0.75	6.3	10-14	使用痕あり	3-15
16	*	サスカイト	V	3区	2.4	4.65	0.95	8.8	9-15	一端に片面加工	3-2
17	チップ	チャート	V	3区						一面加工使用痕	3-10
18	u-F	*	V	4区	4.40	3.90	1.50	20.1	9-18	ノッチ	4-194
19	*	ホルンフェルス	V	4区	3.50	3.60	0.75	6.7	10-1		4-145
20	2次加工剥片	チャート	V	4区	2.8	3.3	1.08	10.78	9-16		4-203
21	剥片	*	V	4区	2.25	1.30	0.45	1.4	10-0		4-189
22	*	姫島産燧石	V	4区	1.95	1.50	0.80	1.4			4-195
23	チップ	チャート	V	4区	1.55	0.90	0.25	0.4			4-206
24	*	*	V	4区	1.7	1.25	0.30	0.8	10-12		4-182
25	*	*	V	4区	1.45	1.15	0.45	0.6			4-148
26	剥片	*	V	4区	3.80	1.35	0.70	1.4	10-4		4-180
27	*	姫島産燧石	V	4区	2.10	1.15	0.35	0.7			4-161
28	*	*	V	4区	2.55	1.55	0.40	0.9	10-11		4-161
29	*	黒燧石	V	4区	2.2	3.0	1.0	5.85	10-3	存在物あり、意地不明	4-179
30	2次加工剥片	チャート	V	4区	2.70	1.70	0.70	3.1	9-7	形跡加工あり	4-176
31	*	ホルンフェルス	V	4区	5.6	3.3	1.20	21.95	10-16	一面加工片面加工、上層①-3と同一母材	4-156
32	剥片	*	V	4区	3.75	2.60	0.60	4.5	10-2		4-167
33	*	チャート	V	4区	2.45	2.25	0.65	2.2	10-13		4-147
34	チップ	黒岩産燧石	V	4区							4-181
35	2次加工剥片	*	V	5区	2.85	2.30	1.05	4.5	10-5	(ノッチ)Core Scraper	5-150
36	*	ホルンフェルス	V	5区	4.20	4.35	1.35	21.0	10-8		5-142
37	*	チャート	V	5区	3.95	2.00	0.70	3.9	10-15		5-152
38	u-F	*	V	5区	2.90	1.85	0.60	3.2	9-9	一面加工にリタツチ状の使用痕	5-111
39	*	*	V	4区	2.05	2.85	0.55	3.8	10-7		4-113
40	剥片	*	V	5区							5-181
41	*	石英	V	5区							5-95
42	u-F	チャート	V	5区	4.0	3.4	0.89	11.35	9-17	両側面に使用痕	5-125
43	剥片	*	V	6区	2.40	1.90	0.35	1.5	10-10	打痕を欠く	6-18
44	*	*	V	6区	4.8	4.4	1.09	36.12	9-19	燧石剥片、良質のチャート	6-16
45	2次加工剥片	頁岩	V	3区	10.1	5.45	1.75	137.27	11-5	磨理面をもって刺刺した長辺に片面加工	3-9
46	*	砂岩	V	4区	11.5	5.1	2.05	71.73	10-17	先端部に両面加工	4-155
47	剥片	ホルンフェルス	V	4区							4-164
48	スクレイパー	*	V	4区	3.0	1.65	0.58	4.23	9-6	両側加工の削器、打機	4P-972
49	2次加工剥片	チャート	V	7区	4.2	3.1	0.90	13.20	9-14	先端部に片面加工	7-28
50	チップ	*	V	6区							5-65

おそらくヒモで固定するための加工とみられる。片側の加工は微細なため、あるいは使用によるものかもしれない。93図4～6は、両面加工の削器とみられるもの、いずれも欠損しており、全体の元の形状はつかめない。4は姫島産ガラス質安山岩、5は黒岩遺跡で出土した唯一の姫島産黒燧石である。6は良質のサスカイト製である。93図11は円形状をなす削器であるが、加工は全周に及ばない。93図12は片面加工の一部にノッチをもつもの。93図14・16はチャートの幅広剥片の一部を加工したものである。94図9は、石英脈岩の硬く厚い剥片の断面が鋭角となった一側面に2次加工を施したもので、卍器としての用途が考えられる。

形器様石器 (第93図7・第94図15)

いずれも、チャートの小型剥片の一端に小さなフルーティングを施したものであるが、典型的な形器とはいえない。この種の石器は早期の他の遺跡においても少数例だが出土しており、他の石器と分けて検討すべきものと思われる。

クサビ状石器 (第 93 図 15)

横長のサスカイトの剥片の側辺の両面に長い剥離を行って、断面をクサビ状の鋭角に仕上げたものである。

使用痕のある剥片 (第 93 図 9・17・18、第 94 図 7・14 ほか)

9・17・18 はチャートの剥片の鋭いエッジの部分に使用による微細な剥離痕をもつものである。94 図 14 は、剥片の突出部を利用したもの。

石核 (第 93 図 19、第 94 図 5)

94 図 5 は、腰岳産黒曜石の残核状のもので抉入部に細かい加工がある。93 図 19 は、チャートの剥片を素材とする石核であり、一端の平坦部を打面とし、横長剥片の剥離を行っている。

礫器 (第 95～98 図)

上層と同様に定型的な礫器は少ない。両刃礫器としては 97 図 1・2 に見るぐらいである。1 は扁平な礫の薄い方の稜の半分を両面加工とし、のこり半分は片面加工としている。2 は、角礫の一端を片面が大きく、地面は小さい剥離としたものである。96 図 1 は典型的な片刃礫器 (Chopper) である。厚手の扁平礫の長辺の小側に大きな剥離で片刃を形成したのち、エッジの部分に細かく 2 次的な剥離を加えて仕上げている。96 図 3 は、扁平な礫あるいは厚い礫の剥片を素材とする斧状石器である。自然面側には大きな剥離が表皮を剥がすように行われたのみで、加工は片面に集中している。それは石核状に大きな剥離を行った後、周縁部に細かい加工を施し、先端は尖頭状に残して仕上げている。

表 4 黒岩遺跡 8 層出土石器一覧表(礫器類)

No.	器 種	石 材	出土層位	出土部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	図 号	備 考	注記 No.
1	2 次加工剥片	砂岩	V	4 区	8.0	4.7	3.5	150.9	11-3		4-162
2	両刃礫器	*	V	4 区	8.5	8.7	5.50	427	19-2	硬質砂岩、両刃礫器	4-191
3	片刃礫器	砂岩	V	4 区	9.6	6.8	6.08	381	19-5	角礫、片面加工	4-172
4	*	*	V	4 区	12.20	14.12	5.10	946	12-6	片刃礫器	4-170
5	礫器	*	V	4 区	8.7	8.0	3.0	311.6	19-6	板状礫、片面加工	4-137
6	片刃礫器	頁岩	V	4 区	3.0	7.5	5.69	132.69	19-4		4-136
7	黒石・磨石	安山岩	V	3 区	8.3	7.0	4.75	419	15-1		3-16
8	磨石	*	V	3 区	9.2	7.1	6.2	628.8	16-5		3-25
9	磨石・磨石	砂岩	V	4 区	7.80	6.70	7.53	460	15-5	平突	4-128
10	磨石	*	V	4 区	9.8	5.4	4.40	316	16-2	*	4-158
11	磨石	心臓形石	V	4 区	7.78	6.80	4.58	326	11-8	ハンマーストーン	4-209
12	*	石英	V	4 区	4.3	3.7	2.34	56.70	11-9	石核の小扁平礫を利用、全周に磨打痕	4-167
13	2 次加工礫	心臓形石	V	5 区	9.40	8.47	7.6	648	19-7	磨石か	5-64
14	磨石	砂岩	V	5 区	10.23	7.84	7.80	782	15-3		5-98
15	磨石・磨石	*	V	5 区	12.98	10.08	8.10	1400	19-4	主要な磨面は 2 重	5-136
16	片刃礫器	*	V	5 区	14.3	13.2	6.5	1385	14-6	加工は均等的	5-145
17	*	*	V	5 区	16.2	12.6	6.4	1400	14-5		5-67
18	*	*	V	5 区	8.2	7.9	4.41	304	14-2		5-146
19	2 次加工板状礫	頁岩	V	5 区	5.15	11.2	2.65	128.7	11-2		5-160
20	2 次加工剥片	砂岩	V	5 区	0.9	4.1	3.41	151.43	12-6		5-143
21	凹石	安山岩	V	5 区	6.7	6.3	4.10	297	16-2	両面中央に磨打による凹み	5-119
22	2 次加工剥片	砂岩	V	5 区	8.6	7.2	2.7	209.6	14-4		5-153
23	磨石	安山岩	V	5 区	9.8	6.3	3.65	255	16-1	一端と側面に磨打痕	5-154
24	*	砂岩	V	5 区	10.3	7.0	4.2	430.0	16-3	片端と側面に磨打痕	5-151
25	磨石	頁岩	V	5 区	7.3	7.5	4.11	204	19-3	角礫の一長辺に細かい加工、使用痕か	5-118
26	両刃礫器	砂岩	V	5 区	11.0	8.15	3.78	423	13-1		5-102
27	斧状礫器	砂岩	V	5 区	13.3	8.15	4.86	485	12-3	片端に人工的な加工、全体は尖った斧頭状	5-100
28	片刃礫器	*	V	5 区	8.6	6.5	2.8	164.1	11-4	素材は大扁平片か	5-87
29	2 次加工板状礫	*	V	5 区	9.06	4.1	1.71	96.83	11-6	小型礫器、ノッチ加工	5-88
30	両刃礫器	*	V	5 区	8.7	6.8	3.29	257	14-1	先端部に両面加工	5-97
31	磨石	*	V	5 区	7.6	6.4	5.8	616	16-6	一端に磨打痕	6-101
32	*	安山岩	V	5 区	9.9	4.1	3.41	151.43	15-5	平突	5-129
33	*	砂岩	V	5 区	8.7	7.1	6.4	386.5	16-4		6-138
34	斧状礫器	磨石	V	5 区	14.4	7.9	4.91	501	12-2	厚手の板状、磨石使用	5-71
35	片刃礫器	砂岩	V	6 区	8.96	9.80	2.10	268	12-4	ノッチ状、磨打痕	6-23
36	*	*	V	6 区	9.9	9.7	4.50	616.9	12-1	典型的なツェッパ	6-24
37	石核	*	V	7 区	8.5	14.8	7.4	1200	11-7	大角礫の素材	7-21
38	磨石	*	V	5 号集石	14.1	8.3	6.4	898.8		接合	5号集石21
39	*	*	V	5 号集石	8.0	8.8	6.3	676.1		接合	5号集石25
40	磨石	石英	V	4 区	9.8	8.8	4.7	496.1	13-8	ハンマーストーンか	4-184
41	石核	砂岩	V	5 区	43.6	29.8	6.50	13.6	16-7	片端は凹面、使用痕あり	6-120
42	片刃礫器	砂岩	V	5 区	1.65	0.3	3.2	291	14-3		5-161

上層と同様に下層でも半載礫あるいは礫片を素材とする石器が多い。95 図 1 は部厚い礫片の主要剥離側を片面加工としたもので、礫器と剥片石器の中間的な性格のスクレイパーとみられる。95 図 5・97 図 3・4 等は節理面にそって割れた角礫の鋭角の部分をつ巧みに利用して加工を行ったもので、この遺跡の石器として特徴的なものである。

磨石・敲石（第 99・100 図）

河床から得られる円礫を素材とするもので、その多くは磨石と敲石を兼用するものである。99-1・4 はその典型的なものであり、4 はとくに大型の良品である。短径部の三面と底面部分を崩面とし、その中間部を敲石として利用している。

石皿（第 100 図 7）

大型の砂岩の扁平礫を利用したもので、片面は長期の使用によって凹面が形成されている。平面はやや長円形となっており、磨石とセットとなって使われたものであろう。

槌石（ハンマーストーン、第 95 図 8・9）

8・9 ともに石英質のハンマーストーンである。9 は小型の扁平な石英礫の全周の敲打痕がのこされている。均質な石質と礫面の状況から、佐賀関半島からもち込まれたものであろう。8 は、石英脈岩を扁平な角礫状に仕上げたもので、一端に集中して敲打痕がみられる。この石材は、地元の礫岩中から得られたものであろう。いずれも石器製作のための槌石であり、用途によって大小の別があったと推定される。

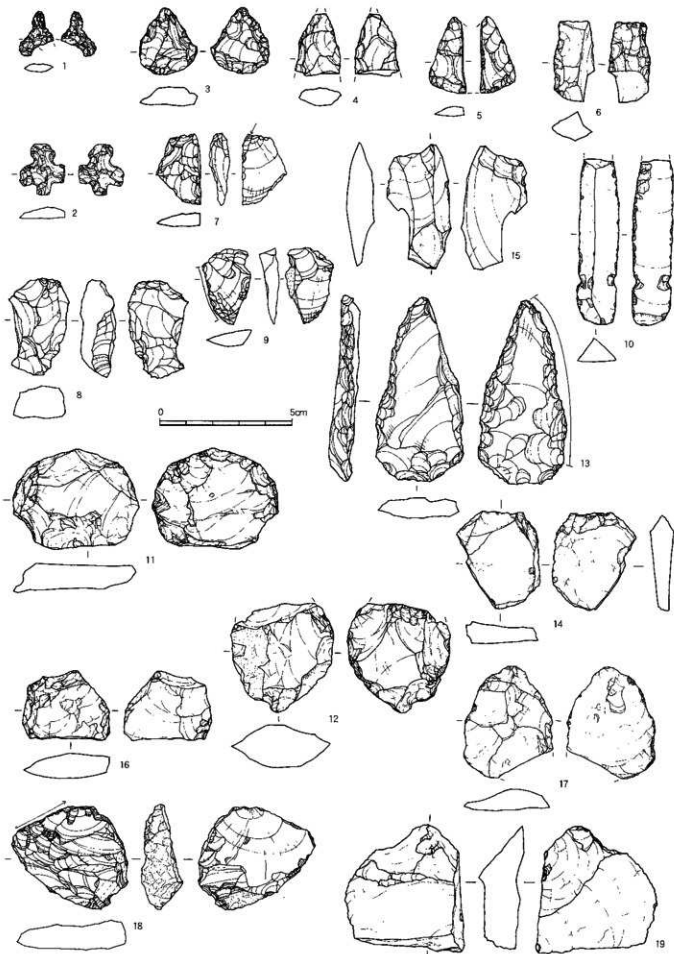
台石（第 95 図 7）

砂岩製の直方体をなす石核状の台石である。平坦な一面から石核状の剥離が行われているが、石材が砂岩であり、これを母材とする剥片類はない。また剥片石器としても耐えられないものと思われるので、用途は台石的なものと考えられる。

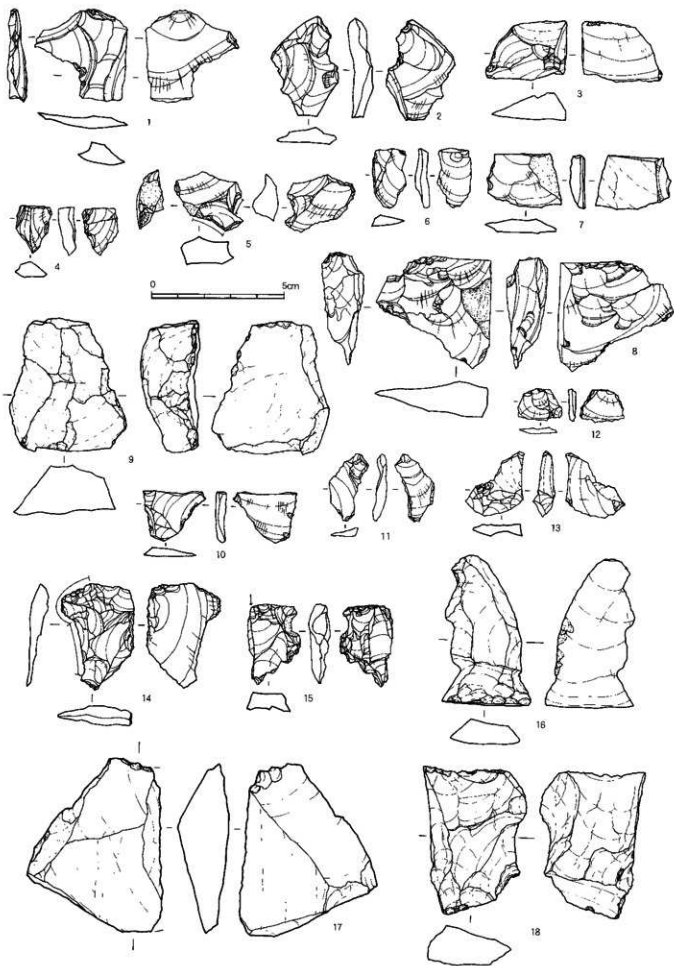
小 結

8 層の石器は、7 層のものと比較して大きな変化はみられない。あえて気付いた点といえば、7 層ではなかった姫島産黒曜石が 1 点ではあるが出土している。また、スクレイパーの中には、尖頭器状の典型的な削器が出土しており、チャートの優越性が感じられた。また石刃状の削器は、その素材の製作に石刃技術の名残をみることができる。

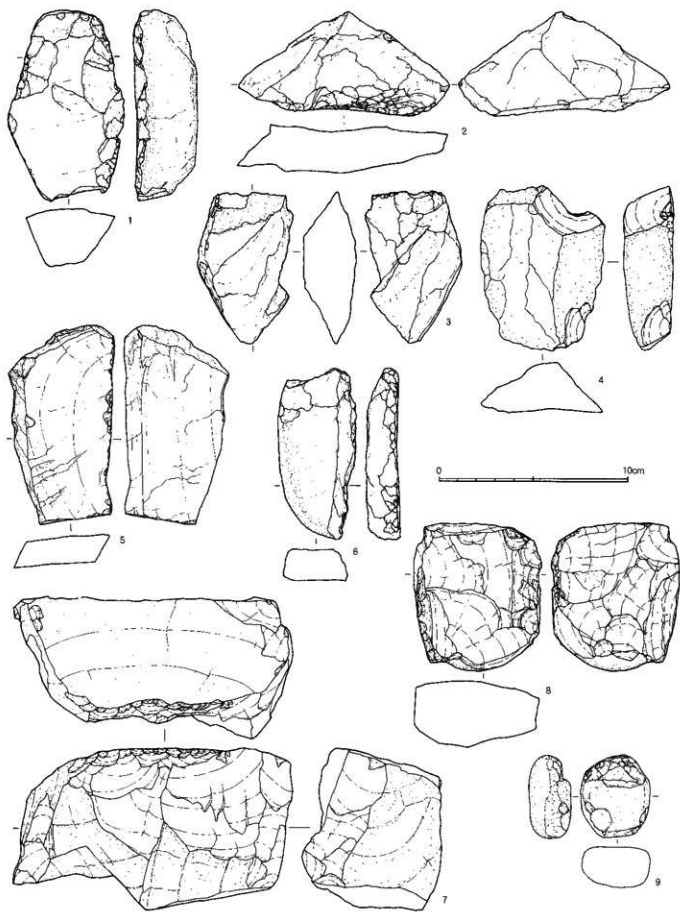
礫器については、片刃石器にいくつかの注目されるものがある。一つは片刃礫器いわゆるチョップパーの典型的なものがみられた。また、斧状に整えられた片刃礫器も 2 点あり、一点は先端をやや尖らせた人念加工のものである。さらに、8 層においては、礫片もしくは、半載礫あるいは節理に沿って割れた角礫をつ巧みに利用した、多様な不定形な石器の存在が一つの特徴となっている。



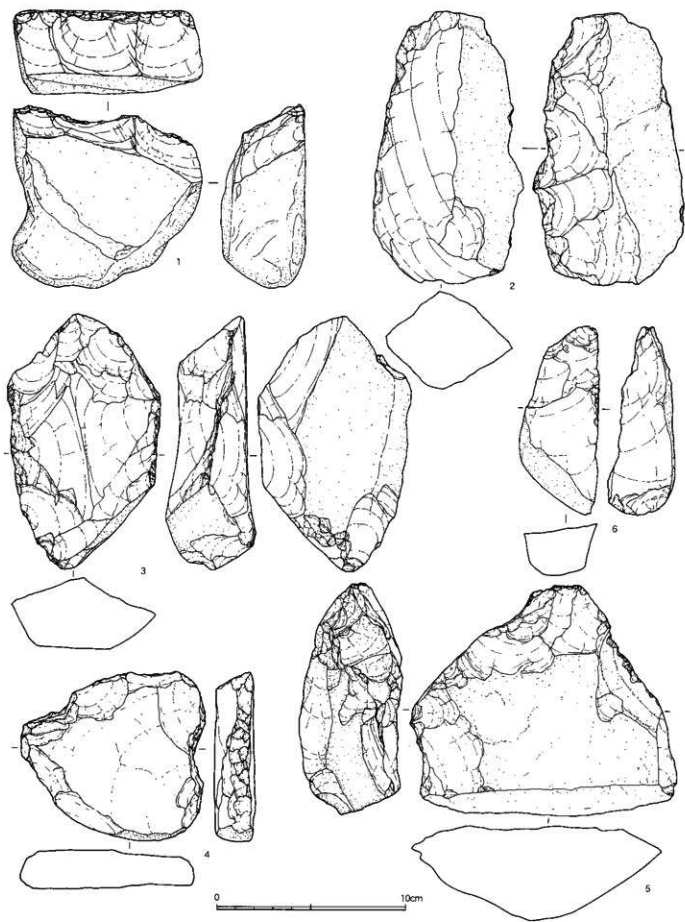
第93図 8層出土剥片石器実測図(その1)



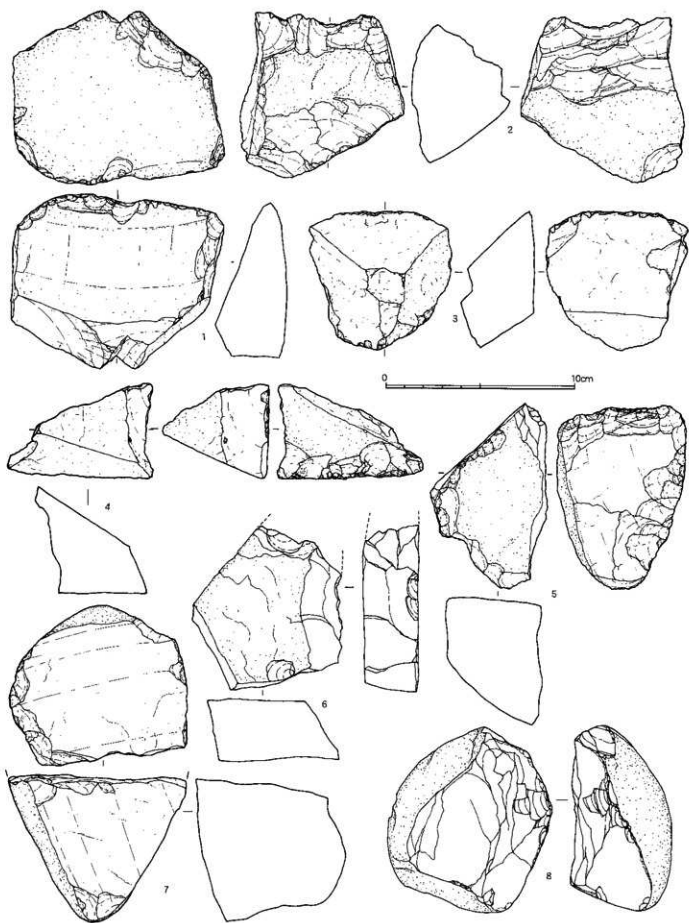
第94図 8層出土剥片石器実測図(その2)



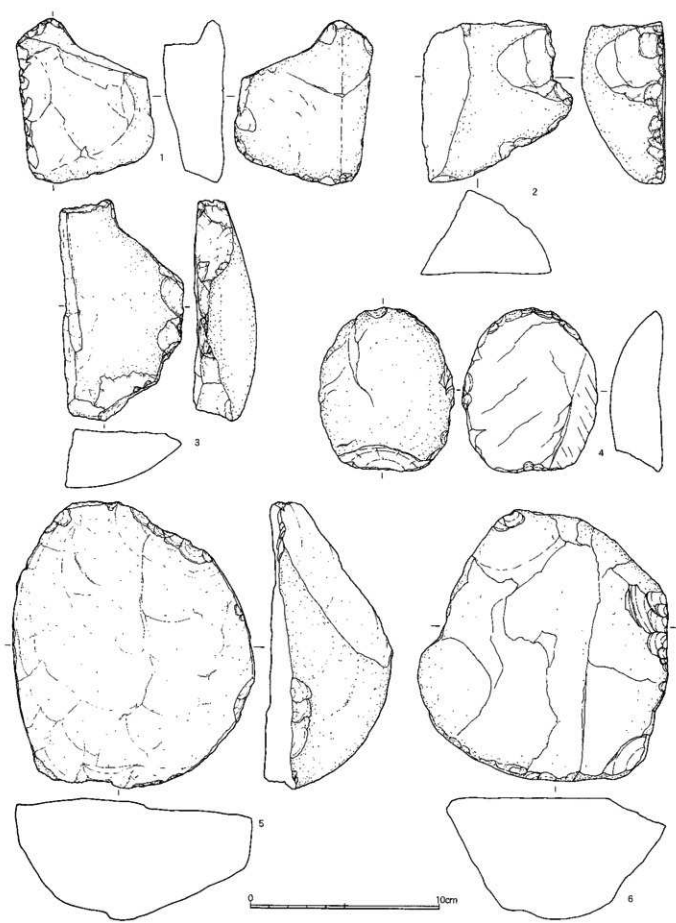
第95圖 8層出土大型剝片石器・礮器類實測圖



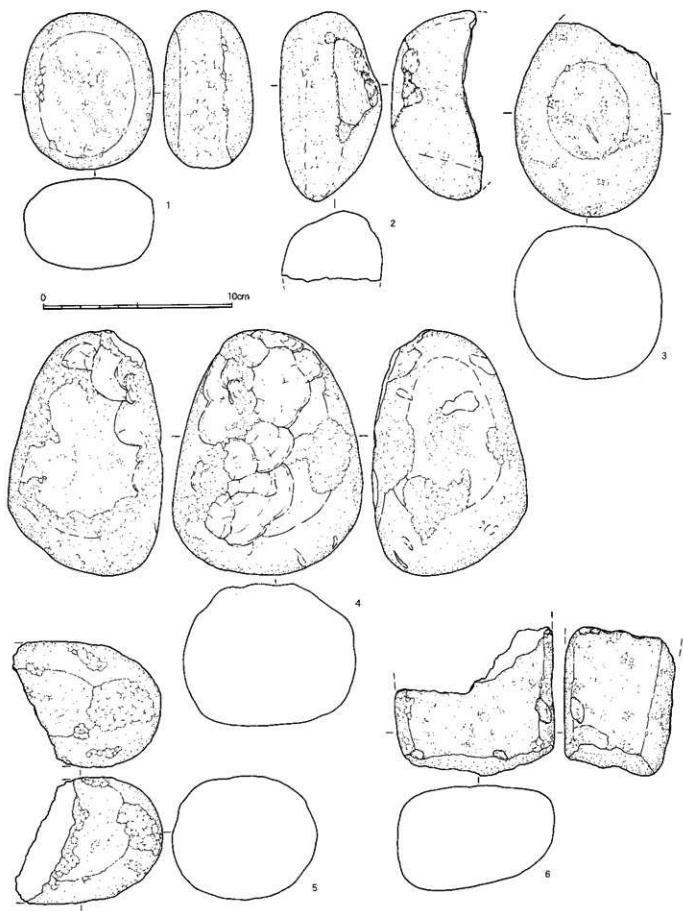
第96図 8層出土石器実測図(その1)



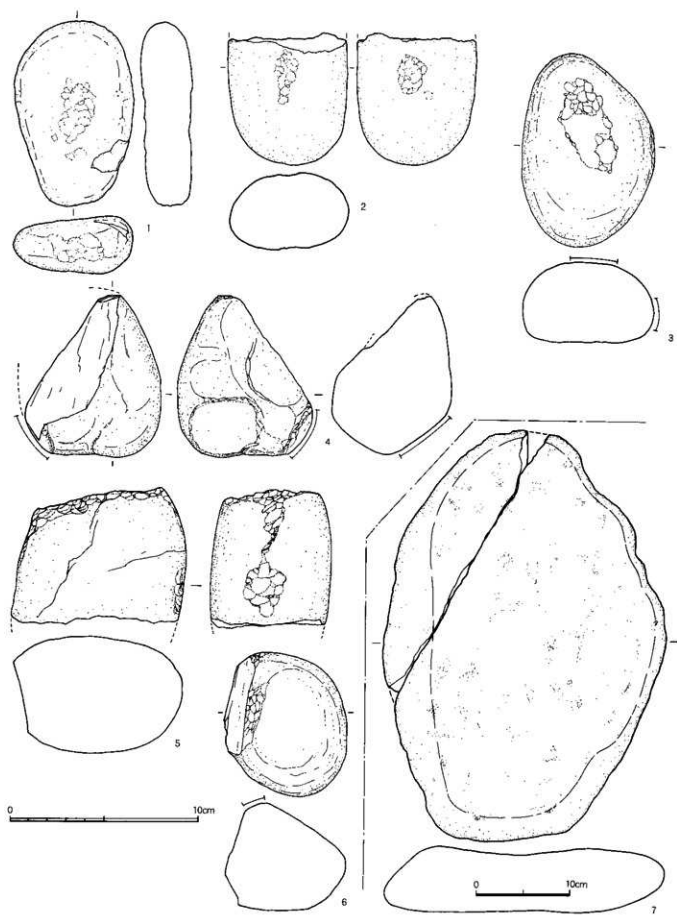
第97図 8層出土石器実測図(その2)



第98図 8層出土石器実測図(その3)



第99圖 8層出土磨石・敲石實測圖



第100図 8層出土の敲石・石皿実測図

第4章 まとめ

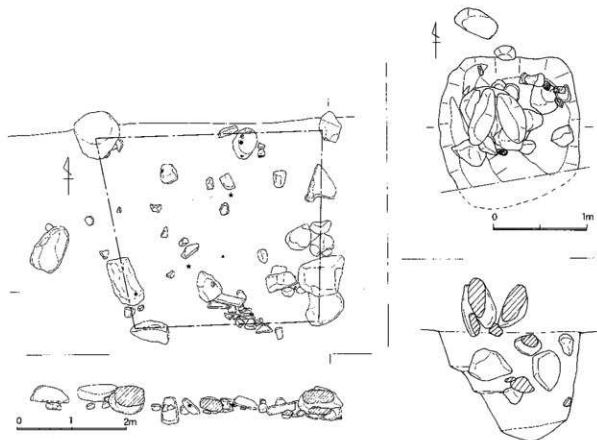
1. 集石遺構と土坑について

黒岩遺跡では、他の縄文早期の遺跡と同様に遺構としていくつかの集石がみられた。しかし、10基ほどの集石は、その性格に違いが見られ、4種に大別することができる。それは、(1)配石状のもの、(2)土坑をもつ集石、(3)焼石による集石、(4)その他である。

(1)の配石状のものは、1号集石と7号集石である。1号集石は上部と下部の二重構造をもち、下部の中心部に埋葬の痕跡とみられる土の変色部が確認されている。変色部の周辺には、石鏃とスクレイパーの完形品が出土しており、副葬品の可能性がある。上部は、とくに変色部の上方の集石は焼けてなく標式的である。周辺の配石は、略長方形の3.5m×2.5mの大きさである。こうした特徴から1号集石は埋葬遺構である可能性が高いものである。7号集石は、径1.8m程の略円形の配石構造で、その内部に空白部をもつ。この部分に礫石器3点とベルト状施文土器の大型破片が出土している。さらにこの部分の直上に4号集石が位置しており、関連性があるとみられる。ただし、4号集石は、1点の礫器を除いては焼石で構成されている。こうした状況は1号集石と異なった様相であるが、7号集石についても埋葬関係遺構の可能性を考えたい。

(2)の土坑をもつ集石には9号集石がある。深い略方形の開口部をもつ土坑の上部構造として扁平礫を複数立てたものである。土坑墓と標石と考える以外にない。

縄文時代早期の埋葬に関係する集石遺構として、別府湾沿岸部では、別府市十文字原第1遺跡と日出町エゴノク子遺跡でみられる。両遺跡は、別府湾最奥部の標高400mの高原性の台地上に立地するもので、前者は、土坑をもつ配石・集石遺構が3基近接して発見されている。そのうちの1号集石は、径5mの略円形に大きな扁平礫を配し、その内側に2.1m×1.5mの土坑をもつもの



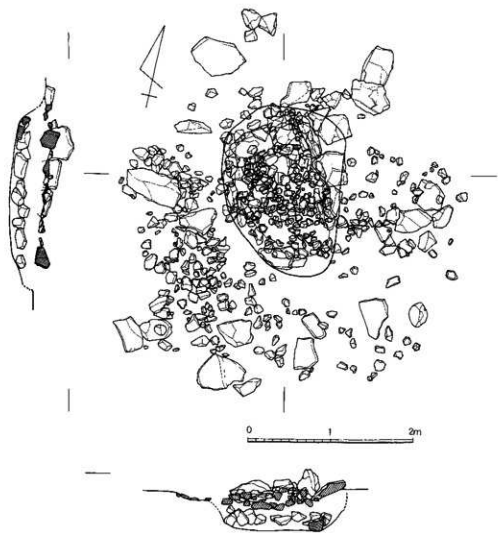
第101図 1号集石下部の配石(左)と9号集石と土坑(右)

で、さらに土坑の床周辺に小塊石を廻らす手の込んだものである。加えてその上部に集石をもつ構造である。また、土坑内部から完形のチャート製の大型石盤が出土している。これは明らかに副葬品と考えてよいものである。なお、上部の集石には焼石もいくつか含まれている。他の2基についても1号に類する構造をもつもので、2号集石では、土坑内から石盤3点と集石内から片刃礫器1点が出土している。

立石をもつ配石遺構については、後者のエゴノクチ遺跡でその集合体として検出されている。ここでは4基の集石で構成され、そのうち2ヶ所で立石が認められる。いずれも火熱を受けたものは見られなかった。その広がり、北側の一部を削られているが、11m×11m程である。埋葬主体としての土坑は検出されていないが、これらは遺跡の最高所の位置にあり、埋葬もしくは宗教に関係するものとみられる。

(3)については、明らかに焼石の集合したもので、明らかに調理に関係するものである。このうち明確な掘り込み土坑をもつものは6号のみであるが、5号集石についても集石の底面の形状から浅い掘り込みがあったものと推定される。

(4)については、焼石はなく、意図的に礫を集合したものであるが、その性格を特定することはできない。



第102図 十文字原第1遺跡配石墓(1号集石)

以上、黒岩遺跡では、300 m²程の調査区の中で、上下にわたって性格が異なる10基程の集石関係遺構を確認することができた。これらは全体として、下層の主として(2)の焼石による集石から上層の埋葬施設と考えられる配石・立石遺構に移行する傾向がうかがわれるものである。

九州地方においても、明らかに縄文時代早期段階の埋葬遺構とみられるものは数少ない。そうした中で黒岩遺跡の埋葬関連の集石遺構は貴重な類例資料として注目してよいものである。こうした遺構については、調査例が少ないこともあって、その性格の確定はむずかしいものがある。黒岩遺跡においても、下部に掘り進む中で逡巡をくり返したことであり、整理の段階で一つの考えを示すことができたものである。今後の類例資料の増加を望むものである。

《参考・引用文献》

牧尾義則・江田 豊編 1983 「十文字原遺跡群—九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報—」
大分県教育委員会

高橋信武編 1993 「宇佐別府道路・日出ジャンクション関係埋蔵文化財調査報告書」 大分県
教育委員会

2. 土器について

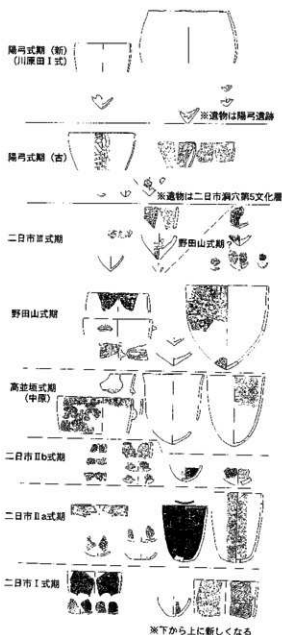
黒岩遺跡調査の成果として、アカホヤ火山灰層の下に二枚の早期遺物包含層から多数の上器を発掘した。調査開始時には遺物包含層は一枚と考えていたが、土層断面図を作成するために掘り下げたトレンチの黒色土層（8層）から口縁部に貝殻の圧痕をもつ条痕文土器が出土し、押型文土器群に先行する条痕文土器群の発見を期待した。しかし、8層からも押型文土器が普遍的に出土し、当初期待したような押型文に先行する条痕文土器は明確に把握できず、可能性のある土器は量的には微量であった。上層、下層とも土器の様相は単純ではなく、土器群は短期間に残されたものではない。

まず、二枚の遺物包含層出土遺物の相違をみておきたい。

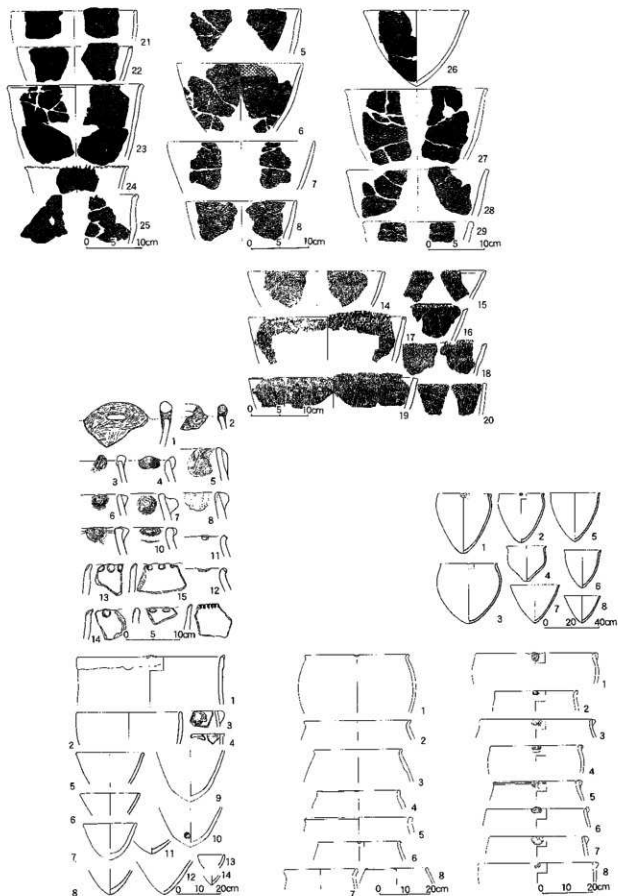
○押型紋土器について

両層からは押型文土器と無文土器が多数出土した。押型文のうち山形文、楕円文と格子目文土器とを数量別にみておきたい。上層の7層では山形文土器11個体、楕円文土器18個体で、37.9%対62.1%である。型式でいうと川原田式、稲荷山式、下管生B式、高山寺（田村）式である。稲荷山式に続く時期の早水台式は出土していない。下層の8層では山形文土器28個体、楕円文土器19個体、格子目文土器1個体で、58.3%対39.6%対2.1%である。型式名でいうと川原田式、稲荷山式、早水台式、高山寺（田村）式、型式名のない山形文を縦方向に施紋した土器である。高山寺（田村）式が下層からも出土している点は編年上疑問がある。層の境界で出土したのを誤認したのであろうか。山形文の比率は下層に多く、楕円文の倍近い出土量である。

大分県をはじめとした北部九州の押型文期の土器編年は川原田式→稲荷山式→早水台式→下管生B式→高山寺式（田村式）→ヤトコロ式→手向山式とされており、これらに無文土器が伴うとされている。本地域で最古の押型文土器に位置付けられる川原田式土器は、黒岩遺跡でも複数出土している帯状施文土器である。坂本嘉弘氏は帯状施文土器は川原田式のみならず、次の稲荷山式にも伴うのではないかと指摘している（坂本1995）。黒岩遺跡では下層の8層から山形押型文の帯状施文土器が出土し、上層の7層から楕円紋の帯状施文土器が出土しているが、どちらも本来の包含層の位置を示していると考えられる。したがって、帯状施文土器にはやはり時期幅があると考えるべきであろう。



第103図 縄文早期前葉の土器編年(綿貫1919より)



第104図 稲荷山遺跡の土器(一部:賀川1970より)

○無文土器について

最近の早期土器の研究では、押型文土器と無文土器とを完全な同一期としてよいか検討の対象となっている（遠部 2003）。たしかに大分県臼杵市東台遺跡のようにごく少量の押型文土器以外はすべて無文土器である例や、大分県国東町陽弓遺跡のように無文土器だけという例がある。押型文土器が出土するということで、興味の対象はそちらのほうに向かいがちだが、もつと無文土器自体の検討が必要であろう。綿貫俊一氏は大分県九重町二日市洞穴の層位的出土例を柱に、その後の単純な様相をもつ調査例を加えていわゆる無文土器・条痕文土器に対して別表のような編年案を示した（綿貫 1999）。

黒岩遺跡の場合、底部の形態の分かるのは尖底である。底部からいえば野田山式以降に該当する。無文土器には粘土の貼付けをもつものがある。横長のもの、片仮名のエのように見える破片、大きな楕円形のもの等がある。横長のものがあるという点は野田山式に似るが、陽弓式までどのような貼付けがあるのか明らかではない。新しい時期の稲荷山式に伴うときれてきた例は円錐形ものがほとんどであり、黒岩遺跡の円錐形でないものはそれより古くなるのであろう（賀川他 1970）。下層出土の無文土器にみられる突帯状の貼付けは、大分市利光遺跡に類例がある（坂本 2002）。同遺跡の押型文は稲荷山式が主体で、早水台式が従の構成である。楕円文と山形文との漠然とした比較であるが、利光遺跡は山形文の割合が多い。この点、稲荷山遺跡に似た組成である。ただし、帯状施文の山形文はなく、比較的単純な組成である。黒岩遺跡下層には帯状施文山形押型文があって、利光遺跡よりも古い特徴をもつ時期が存在することをうかがわせる一方、楕円文の方が多いのはより新しい時期も存在するというのであろう。

矢野健一氏は広島県帝釈峡弘法滝洞窟遺跡出土土器を検討し、稲荷山式に伴う格子目文は近畿地方のネガティブ楕円文（楕円文が窪んで表現される押型文土器）よりも新しいことを層位的に証明する調査例であることを指摘した（矢野 2003）。また、「従来、稲荷山式に伴うと考えられた無文・条痕文土器の多くは、押型文土器出現以前か少量の山形文しか伴わない時期に位置づけられる可能性が生じている」（同 P713）とした。この場合に考えられる「少量の山形文」とは、押型文土器は帯状施文の山形文である。先にも述べたように、黒岩遺跡では下層の 8 層出土土器の一部に山形文の帯状施文土器がある。これにどの無文土器が伴うのか、黒岩遺跡では今回、指摘できない。格子目文については、口縁部がないので不詳だが、帝釈峡弘法滝洞窟第 15 層で出たようなネガティブな楕円文ではない（矢野 2003）。

○土器の位置付け

九州地方では最近、时期的にまとまりのある草創期後葉から早期前葉頃の資料が得られつつある。福岡市柏原 F 遺跡（貼付けと刺突をもつ土器：山崎編 1983）、大原 D 遺跡 15-3 区（口縁部に刺突列をもつ尖底土器：荒牧 2003）、松木田遺跡（尖底の撚糸文土器：米倉他 1998）等である。これらと大分県内の各遺跡との関係はまだよく分かっていない。少数ではあるが、黒岩遺跡では口唇部に貝殻刺突をもち、器面調整に特徴的な条痕を残す土器がある。一般的な無文土器とは異なる点を重視すれば、本遺跡では最古の段階のものであろう。その他の無文土器についてはよく分らないが、山形文の帯状施文土器（川原田式）があり、次に稲荷山式が比較的多い。以上が 8 層である。7 層からも稲荷山式が多く出ている。楕円紋の帯状施文土器も伴う。早水台式はほとんどみられない。下管生 B 式があり、高山式（田村式）が最後である。寒ノ神式等の早期後葉の土器は 1 点も出土していない。

黒岩遺跡は山間地の小規模な面積の遺跡である。川の合流する狭い段丘上にある。しかし、人の移動路という面からみれば現在でも大分市と大野郡とを結ぶ交通の要の地点であり、川を遡った場

所にあり、縄文時代にあっても彼らが頻繁に通りにかかった場所であっただろう。したがって、黒岩遺跡の土器の様相が単純期を示さないというのは、繰り返し利用された結果であろう。

〈引用・参考文献〉

- 賀川光夫・橋昌信・高木正文・首藤卓茂・横山邦継 1970「稲荷山遺跡緊急発掘調査」大分県文化財調査報告第 20・21 合輯 大分県教育委員会
- 山崎純男・小畑弘己 1983「柏原遺跡群 I—縄文時代遺跡 F 遺跡の調査—」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 90 集
- 米倉秀紀・星野恵美他 1998「松木田遺跡群第 2 次・第 3 次調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 578 集
- 坂本嘉弘 1995「西日本の押型文土器の展開—九州からの視点—」『古文化談叢』第 35 集 九州古文化研究会
- 綿貫俊一 1999「九州の縄紋時代草創期末から早期の上器編年に関する一考察」『古文化談叢』第 42 集古文化研究会
- 遠部 慎 2003「黄島貝塚再考」『立命館大学考古学論集Ⅲ』立命館大学考古学論集刊行会
- 坂本嘉弘他 2002「利光遺跡」大分県文化財調査報告書第 132 集
- 矢野健一 2003「北部九州地方における押型文土器出現の時期—広島県帝釈峽弘法滝洞窟遺跡出土土器の検討から」『立命館文学』第 578 号
- 荒牧宏行 2003「1503 区の調査」『大原 D 遺跡群 4』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 741 集 福岡市教育委員会

3. 黒岩遺跡の石器群

黒岩遺跡では、7層から92点、8層から93点とほぼ同数の石器が出土している。この数は、調査面積に比しては多い数量といえよう。それは、この遺跡の2層合わせて1mに及ぶ包含層の厚さによるものとみられ、当然土器の量とも比例するものであった。7層・8層の文化層の石器の組成を比較すると基本的には共通項が多い。剥片石器についていえば、石鏃が少ないこと、定型的な石器が少ないことである。石材については、多様な石材組成を示す。遠距離の原産地のものでは、腰岳産黒曜石が選択的に使用されており、姫島産黒曜石は1点のみの出土である。この問題については別項後述する。他の石材としては、チャートが主要なものであり、そのほかホルンフェルス・サヌカイト・石英・珪化木・頁岩等が使用されている。チャート・ホルンフェルスは大野川本流の河床から得られるもので、遺跡から約10kmの距離である。チャートを主として使用している点では、他の縄文時代早期の遺跡と相通するものがある。そうした中で、スクレイパー類の主要な石器には、良質のチャートを使用したものが目についた。一方それを補うように地元の礫岩の中から得られる石英・頁岩等の石材も積極的に利用していることが観察された。

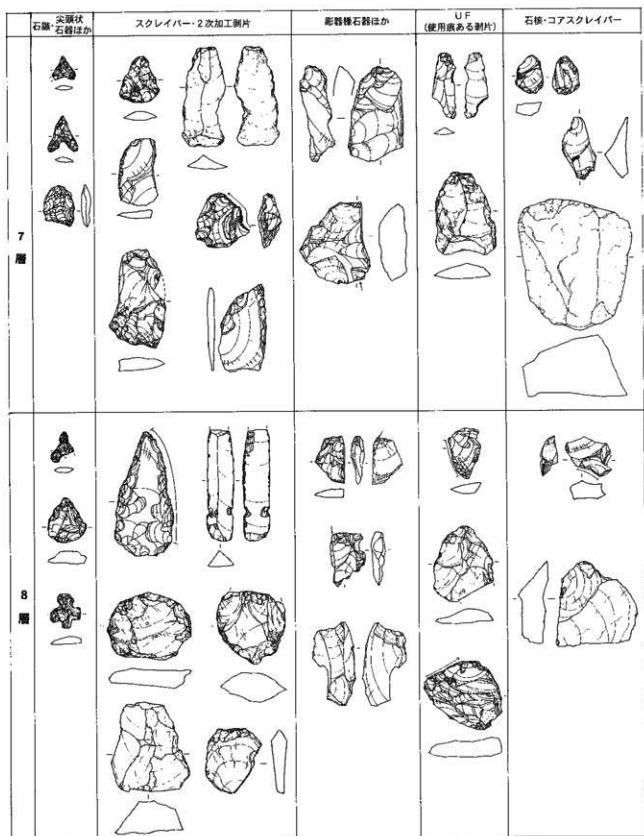
器種の中には、彫器的な石器が7層・8層ともにわずかであるが認められた。これまで県内では、臼杵市東台遺跡、同下野遺跡、佐伯市森の木遺跡でも検出されており、旧石器時代の石器製作技術の名残を感じさせる。ともあれ、黒岩遺跡の剥片石器は、形態が多様であり、器種の分類が十分に果たせなかった部分もあるが、限られた石材供給の中で、得られた剥片素材を最大限に活用するという先人の努力を垣間見ることができる。

礫器についても7層・8層に大きな相違はない。器種も、礫器、磨石、敲石、石皿、槌石と一通り揃っており、8層では磨製石斧用とみられる砥石も出土している。7層の文化とはほぼ同時期と考えられる佐伯市森の木遺跡と比較するならば、森の木遺跡はいくつかの定型的な礫器に分類できたことであるが、黒岩遺跡は典型的なものがきわめて少なく、形態が実に多様であることがあげられよう。それは、一方が砂岩という石材に統一されているのに比べここでは素材である礫の石材の多様性によることが指摘できる。それと森の木遺跡では、砂岩製の大型剥片石器が多数出土したが、黒岩遺跡では、それに替るものとして、礫器の中に含めたが半敲礫、礫片を加工した石器が7層・8層ともに目についた。これは、黒岩遺跡の大きな特徴としてあげてよいものである。

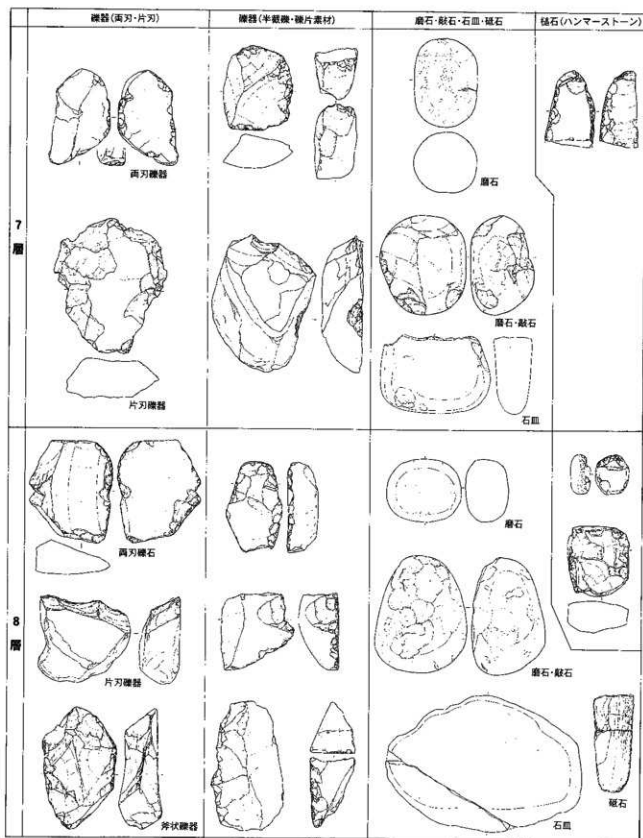
石器はいうまでもなく、後の時代の金属に相当する利器であり、有機質の木器・骨角器で用をなさない道具の素材として不可欠のものである。黒岩遺跡に残された石器をみると、剥片石器・礫器類ともに実に多種の器種にわたるものである。それは、とりも直さず多くの生活の各部にわたって機能を果たした物証として評価しなければならない。黒岩遺跡は、生活環境としての立地は狭隘な地形条件のところである。しかし、遺跡としては、厚い二つの文化層が長期の生活時間を示しており、それに伴う各形態の集石遺構と合わせて、単なる一過性の生活空間でなかったことを示唆するものである。

【引用文献】

- 清水宗昭編 1974 「東台遺跡」 臼杵市教育委員会
高橋信武編 2000 「森の木遺跡」 大分県文化財調査報告109輯 大分県教育委員会
坂本嘉弘編 2001 「下ノ山遺跡—東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書1—」 大分県文化財調査報告114輯 大分県教育委員会



第105図 黒岩遺跡出土製片石器類対比図



第106図 黒岩遺跡出土石器類対比図

黒岩遺跡出土の黒曜石について

黒岩遺跡出土の剥片石器類の中で、比較的遠方から運ばれ、産出地が明らかな石材に黒曜石がある。ここでは7層・8層両方合わせ22点、総重量48gに過ぎないが、剥片石器全体の中でも主要な石材を構成しているので、若干の考察を加えたい。

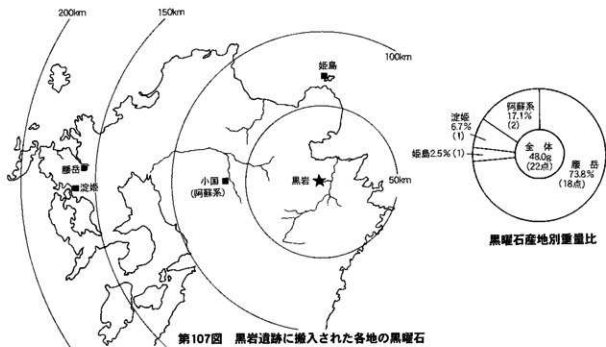
剥片石器類に使用されている黒曜石は5種類認められる。産地別に見ると肉眼観察による色調、自然面の状況等から、①大分県姫島産、②長崎県佐世保市淀姫産、③佐賀県伊万里市腰岳産、④熊本県小国産（阿蘇系）、⑤不明（阿蘇系か）である。③の腰岳産以外は全て1点の出土であり、石核、剥片、製品、チップと贈っているのは腰岳産に限られる。姫島産は石鏃（半欠）のみ、淀姫産、阿蘇系とみられる2点も剥片のみである。

黒岩遺跡では、比較的距離に近い姫島産、阿蘇系のもはほとんど使用されていないといつてよい。また、姫島産ガラス質安山岩も2点のみの出土であり、姫島産石材総体としても黒岩遺跡での利用度は低い。それに比べて西北九州の腰岳は最も遠距離ではあるが、姫島産、阿蘇系の黒曜石と比べて良質であり、点数も18点（82%）、重量も計35.4g（73.8%）と大半を占める。その組成も、石核から製品までみられるところから、原石もしくは石核素材の形で持ち込まれ、この遺跡において加工・消費されたものと考えられる。

大分県内では、縄文時代早期の前半段階では、姫島産黒曜石の使用頻度は小さく、その分チャートあるいは姫島産ガラス質安山岩の比重が大きいことはよく知られていることである。黒岩遺跡では、チャートの比率が高いことは他の遺跡と比して特別なことではないが、腰岳産黒曜石の利用がより顕著であることは注目されてよい。

縄文時代早期に先行する細石刃文化期の細石刃核の県内の石材をみると、大野川流域の一部を除いて腰岳産黒曜石を広い範囲で使用している。例えば、日田郡天瀬町黒草遺跡・遠見郡日出町エゴノクチ遺跡では全て腰岳産の黒曜石であり、他にも直入郡荻町政所馬渡遺跡の1点は同地産のものである。昨年、佐伯市門前遺跡でも同産地の細石刃核が1点出土しており、石材が話題となった南海部郡本匠村聖嶽洞穴出土の細石刃核も例外となるものではない。

こうしてみると、石器の中でも最もアリケートな細石刃に使用されることで需要が高かった腰岳産黒曜石は、大分県内においても、細石刃文化の伝統を引き継いで、縄文時代早期の前半の黒岩遺跡にその伝統をうかがい知ることが出来る。縄文人のよりよい石材への執着を感じるのである。

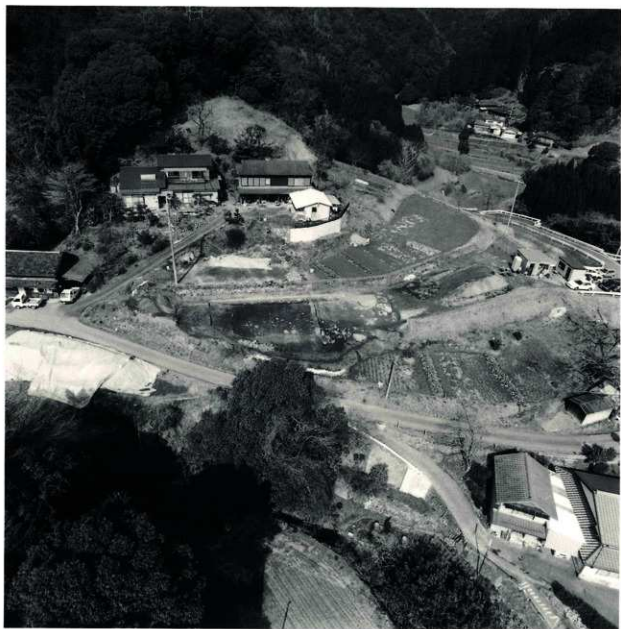


4. おわりに

当初黒岩遺跡は、大分市南部の大野郡と接する山峡部にあつて有望な遺跡の所在が予測されるところとはいへなかつた。発掘調査の結果、アカホヤ火山層の下部に封印されていた縄文時代早期の2つの文化層に加え、当時の精神文化を垣間見る埋葬遺構とみられる配石遺構を発見できたことは予想外の成果であつた。厳寒の中、発掘調査面積に比して厚い包含層を期間内に終了できたことは、ひとえに地元安藤地区の方々の発掘調査に対する献身的なご協力の賜ものであつた。末尾ながら記して感謝申し上げる次第である。

甲斐幸義 甲斐清二 甲斐ミヤ子 甲斐福美 甲斐安寿 後藤正憲 後藤スミ子 後藤幸紀
藤野 博 佐藤カヨ 阿南時雄 阿南チエ子 後藤一英 後藤トミ子 甲斐トミ子

写 真 图 版



調査区全景（南から）



調査区風景（東から）



調査区拡張作業風景



1号集石検出状況



1号集石中心部



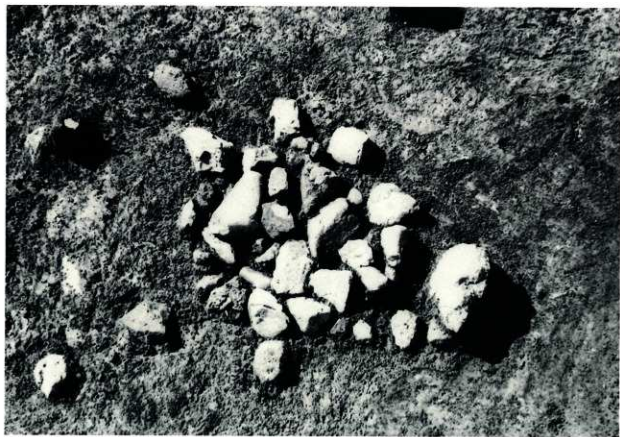
4区・5区検出状況



4区1号集石付近



5区7号集石付近



4号集石



9号集石除去後の土坑と南側土層断面図



9号集石除去後の土坑内部



6号集石横出状況



6号集石と配石



土器出土状況



石器出土状況



土器出土状況



土器・石器出土状況



内面施文土器（表）



同上（裏）



山形文土器 (表)



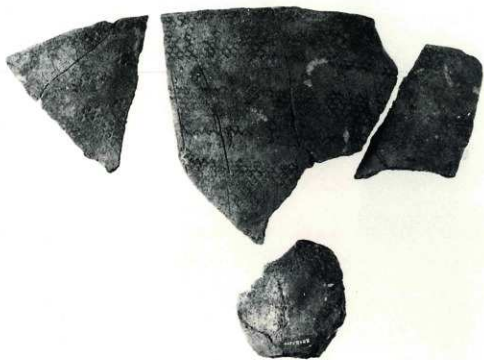
同上 (裏)



山形文土器 (表)



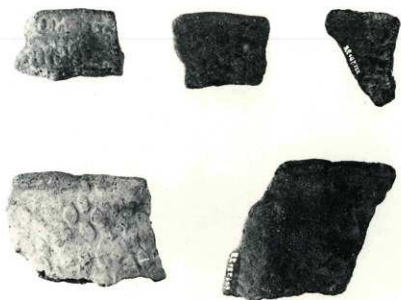
同上 (裏)



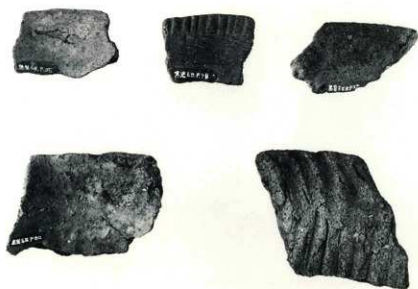
帚状施文土器 (表)



同上 (裏)



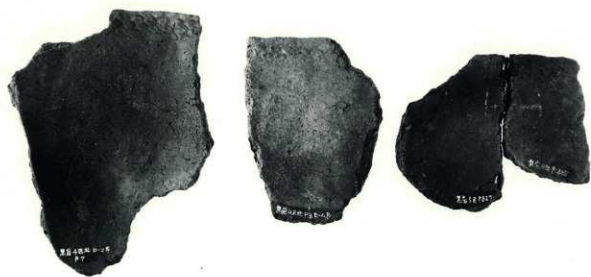
精円文土器 (表)



同上 (裏)



带状施文土器（表）



同上（裏）



楕円文土器 (表)



楕円文土器 (裏)



注口土器 (表)



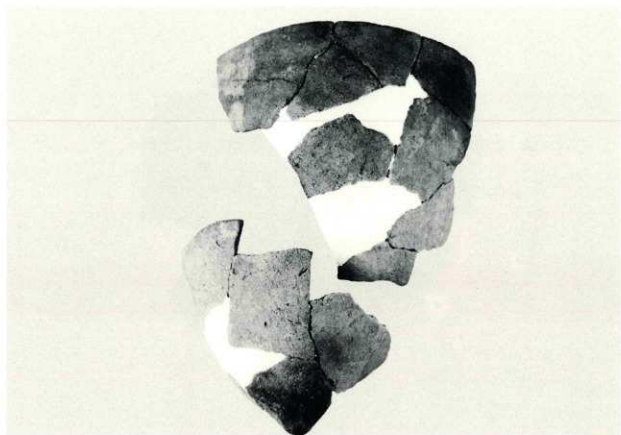
注口土器 (裏)



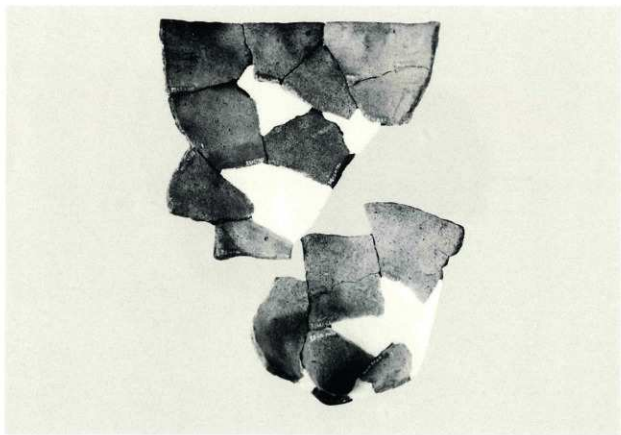
精円文土器 (表)



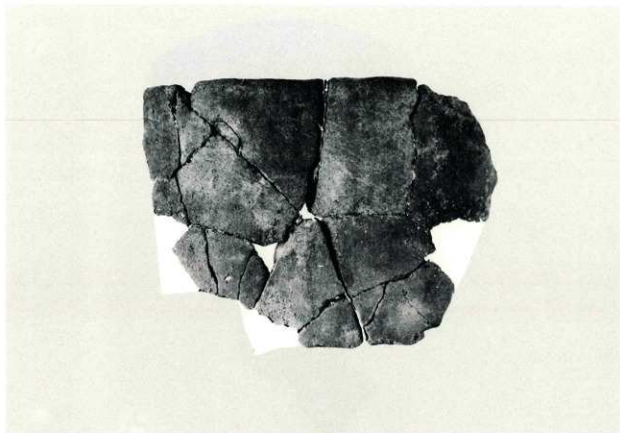
同上 (裏)



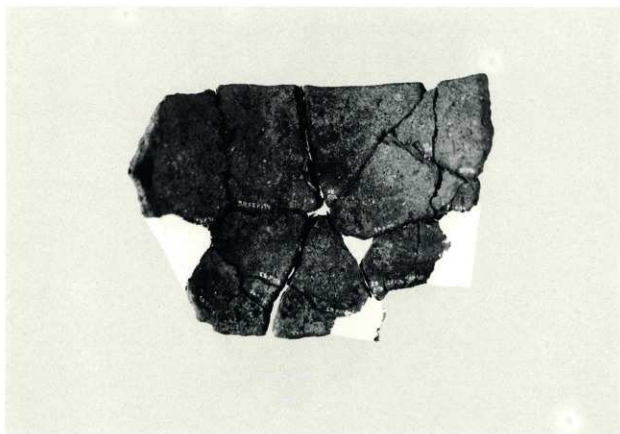
無文土器 (表)



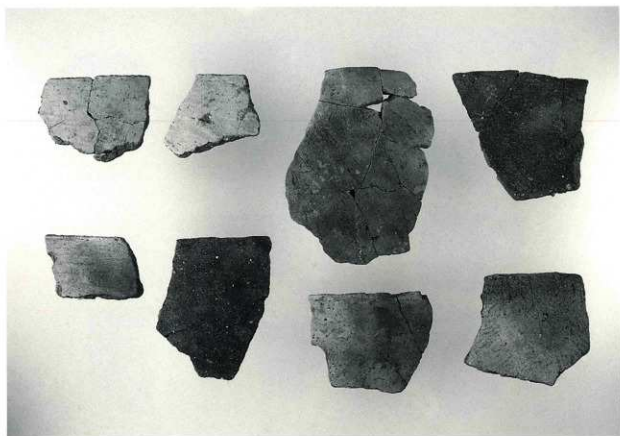
同上 (裏)



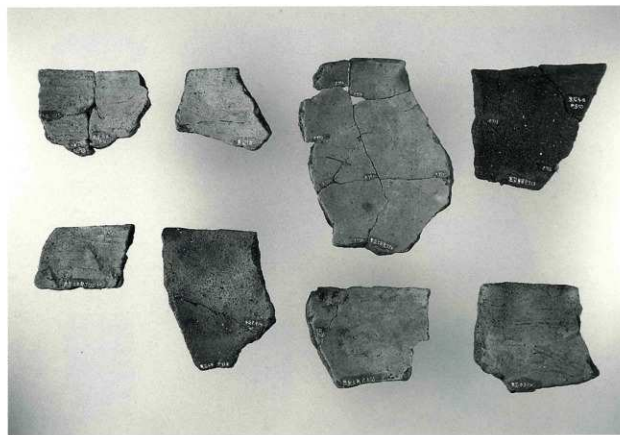
無文土器 (表)



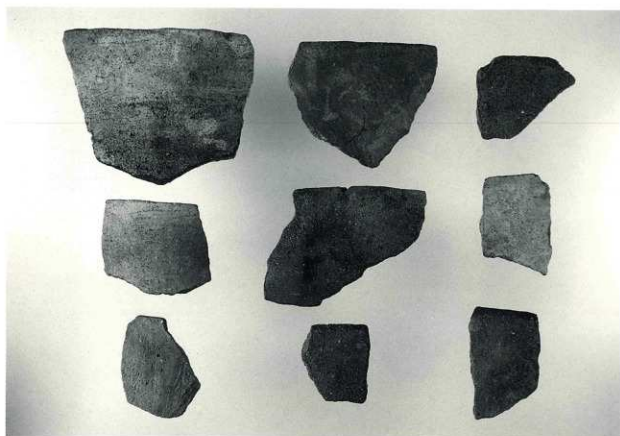
同上 (裏)



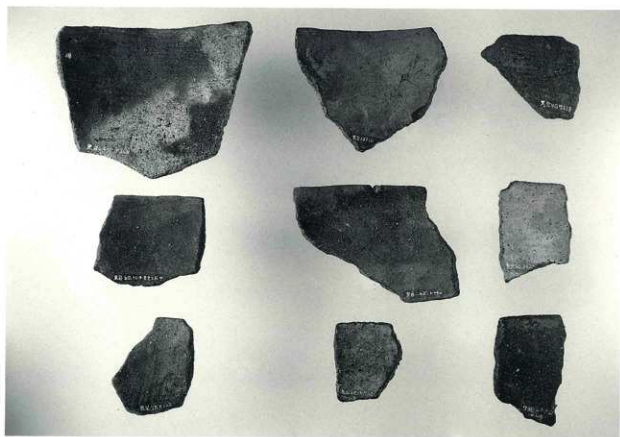
無文土器 (表)



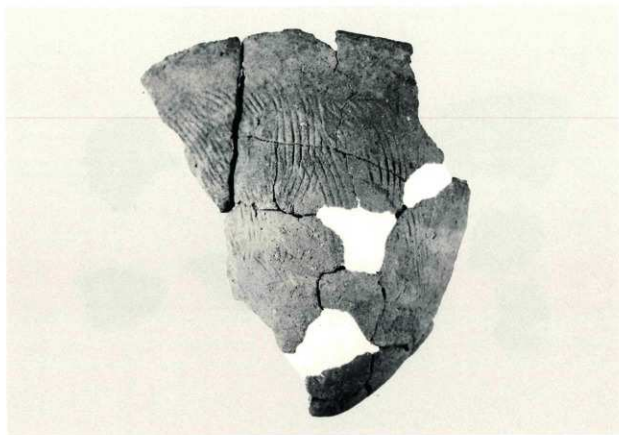
同上 (裏)



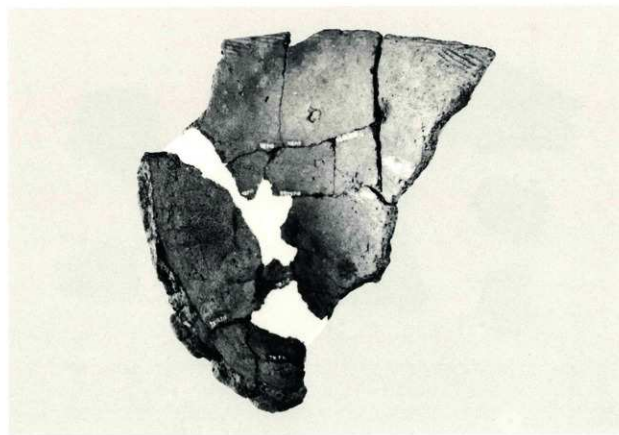
無文土器 (表)



同上 (裏)



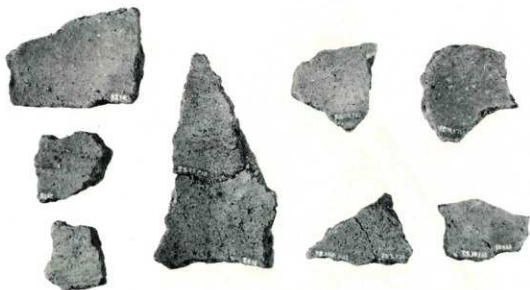
燃糸文土器 (表)



同上 (裏)



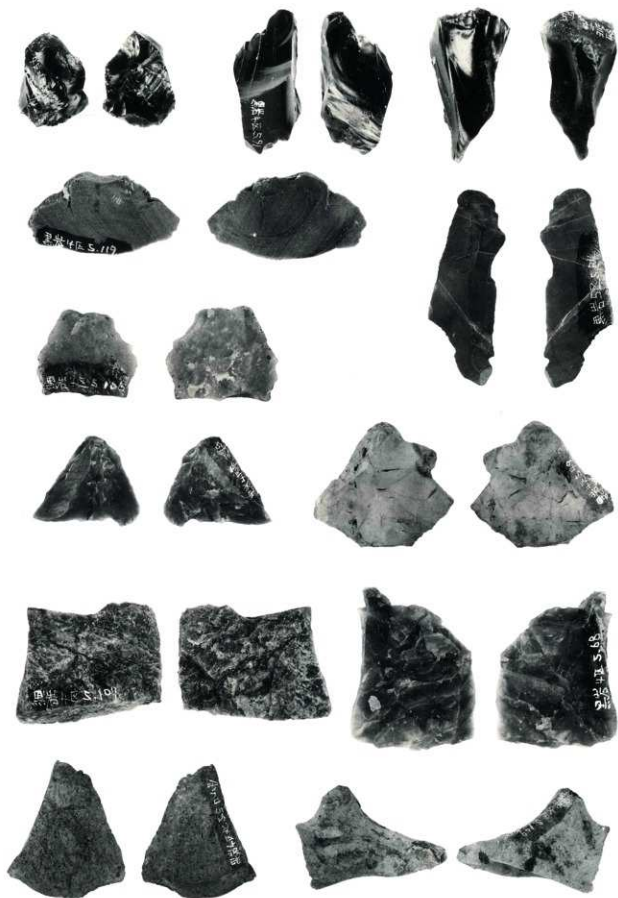
燃糸文土器 (表)



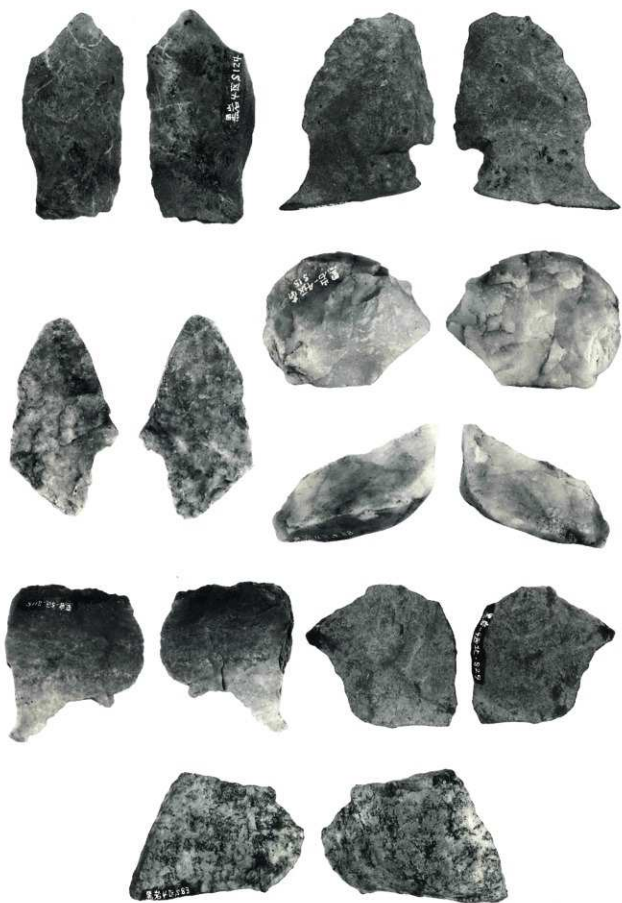
同上 (裏)



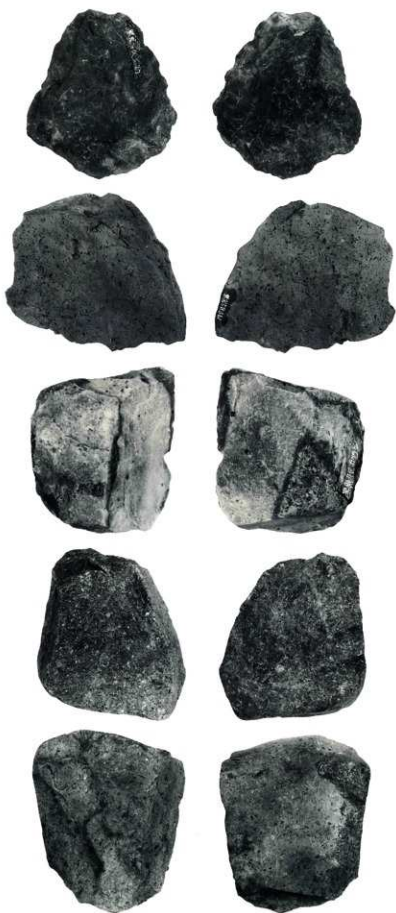
第7層出土の石器(1)



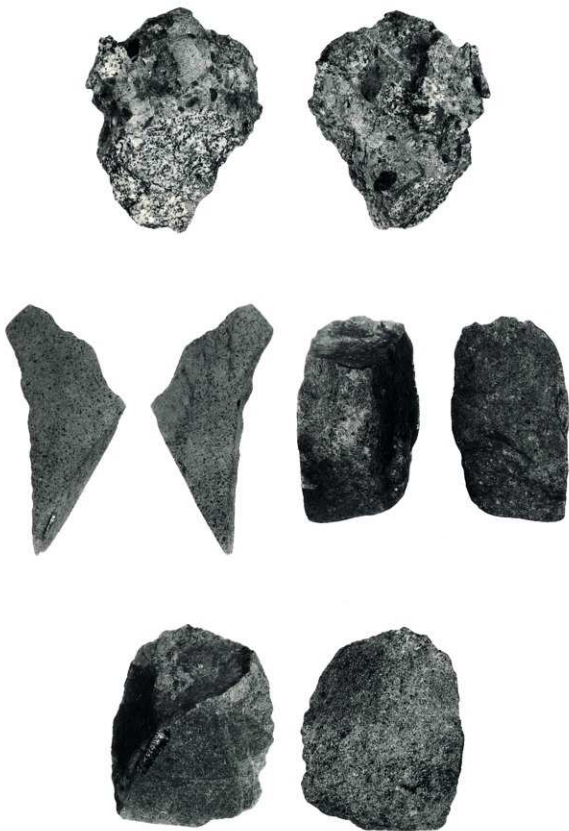
第7層出土の石器 (2)



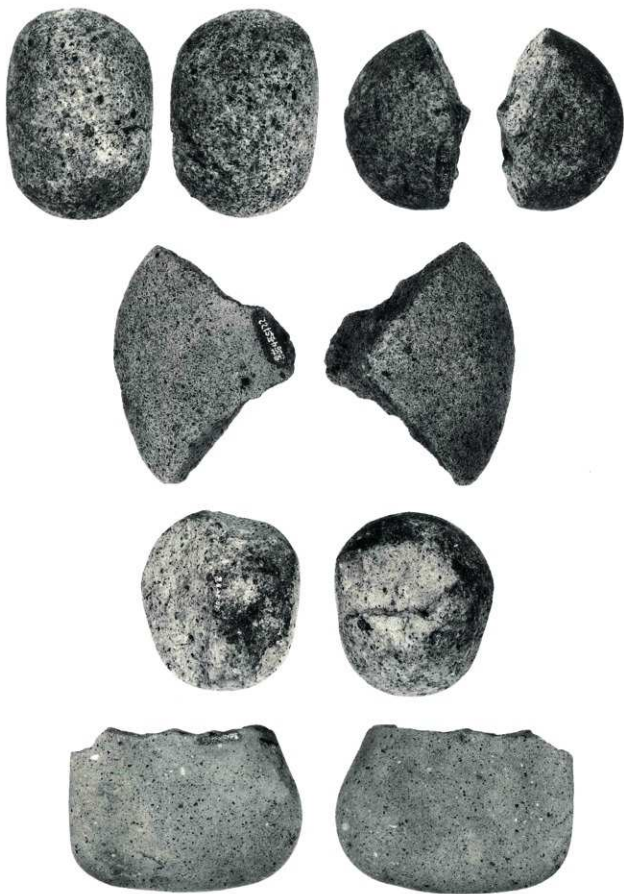
第7層出土の石器 (3)



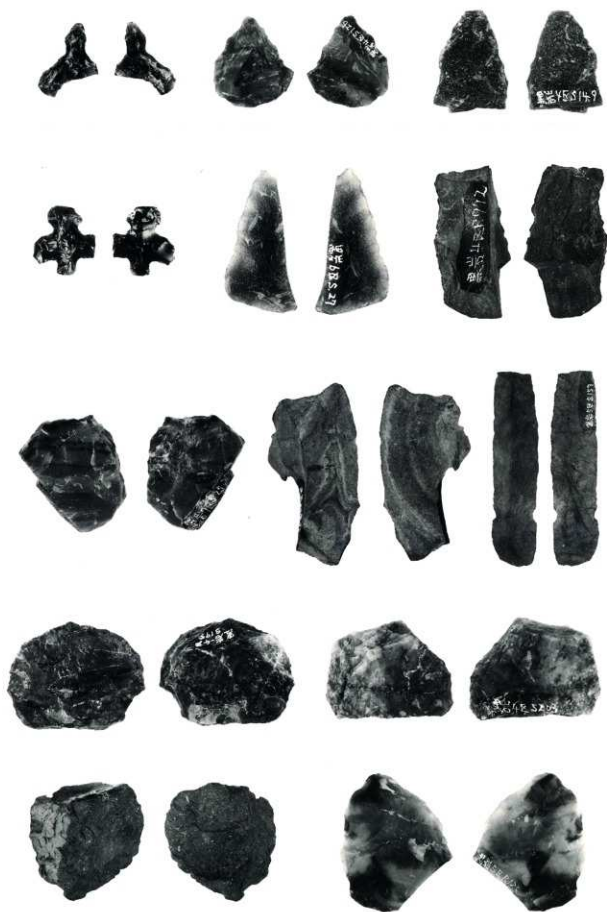
第7層出土の石器(4)



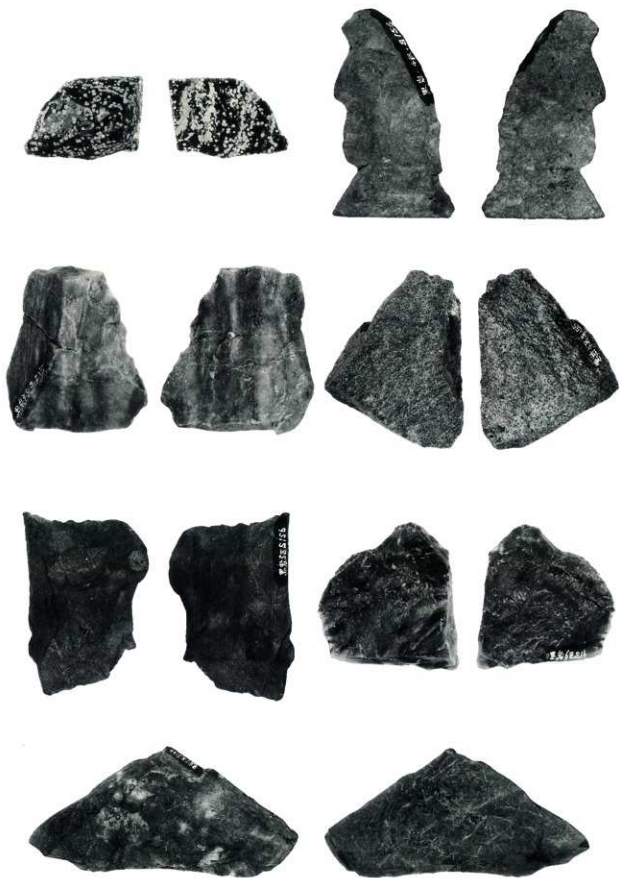
第7層出土の石器(5)



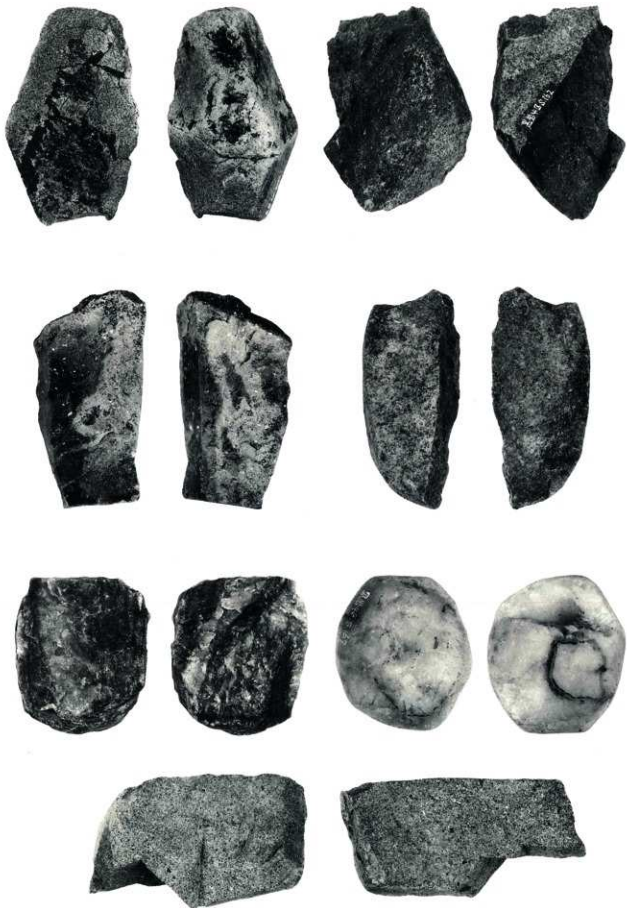
第7層出土の石器(6)



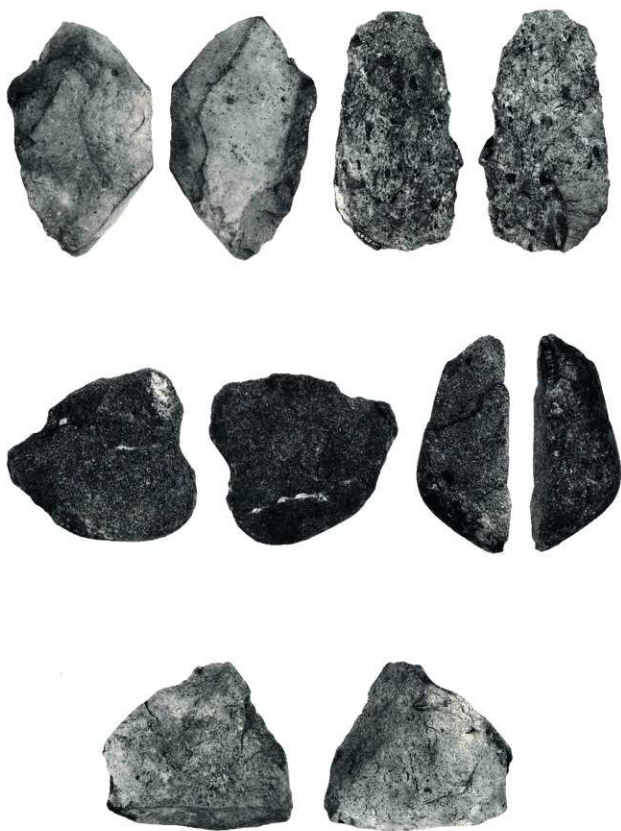
第8層出土の石器 (1)



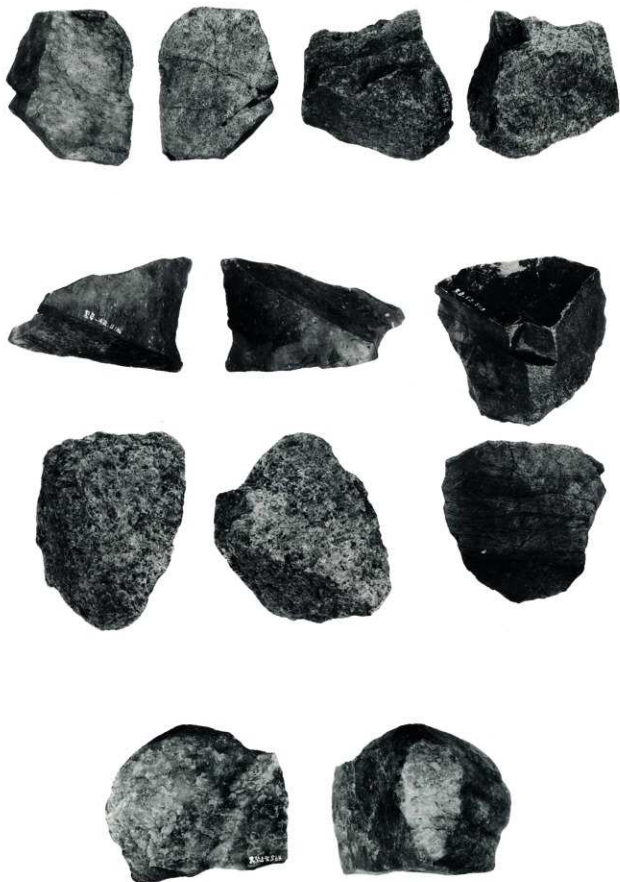
第8層出土の石器(2)



第8層出土の石器 (3)



第8層出土の石器(4)



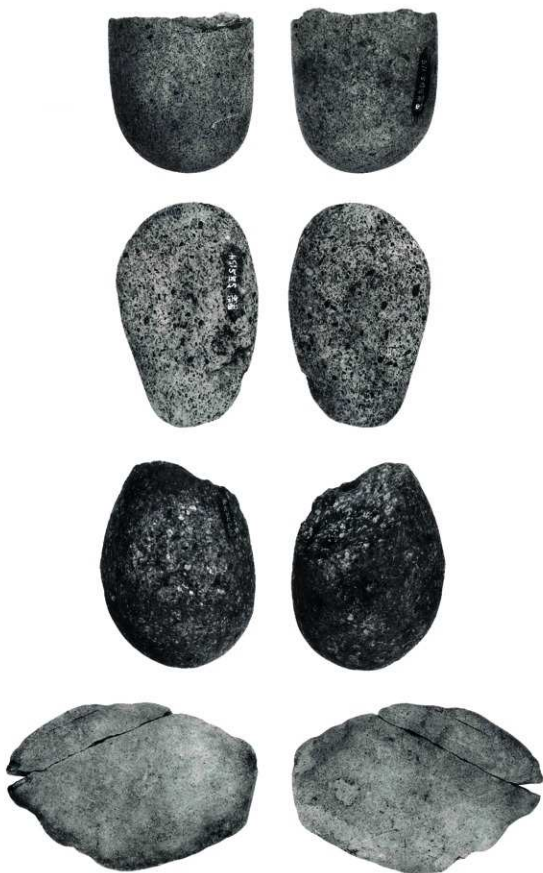
第8層出土の石器 (5)



第8層出土の石器 (6)



第8層出土の石器 (7)



第8層出土の石器 (8)

報告書抄録

フリガナ	クロイワイセキ
書名	黒岩遺跡
副書名	県道大分大野線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県文化財調査報告書
シリーズ番号	第165輯
編著者名	清水宗昭・西哲弘・高橋信武
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870-0021 大分市府内町3丁目10番1号 〒870-1113 大分市大字中判田ビワノ門1977番地 大分県教育文化課文化財資料室
発行年月日	2004年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° / ′	東経 ° / ′	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
黒岩遺跡	大分市 大字安藤	322	347	33° 6′ 58″	131° 34′ 15″	平成14年12月2日 ～ 平成15年2月18日	280	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
黒岩遺跡	包蔵地	縄文時代早期		集石・配石		押型文土器、無文土器、 条痕文土器、陶器、削器ほか		上・下2層 の文化層

大分県文化財調査報告書第165輯

黒岩遺跡

県道大分大野線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004年3月31日

編集 大分県教育委員会
発行 大分県教育委員会
〒870-0021
大分市府内町3丁目10番1号
TEL 097(536)1111
印刷 三恵印刷